

### 第三章 世界文化との交渉

#### 第一節 東洋と西洋

##### 一 東西相知らず

日本は永く世界を知らなかつたが、世界も亦永く日本を知らなかつた。否、人類は永い年月、同じ地球の表面に棲息しながら、海洋相隔て、遠く相知ることなく、同じ大陸の中に住みながらも、山河これを劃しては互に相知らず、各自其の見聞の及ぶ所を以て殆んど世界の總ての如くに考慮して居つたので、其の全世界を知るに至つたのは頗る近代に屬するのである。

人類の搖籃よちばんといはれ、文化の發源地といはるゝ歐亞の大陸は、東を亞細亞といひ、西を歐羅巴と呼ぶるゝも、もと／＼同一大陸の兩方面、一方は地中海より大西洋に向ひ、他は

世界を知らず

歐亞の大

東の方印度洋を経て太平洋に向ひ、其の脊梁に北の方ウラル山脈あり學者は此山脈よりウラル河、裏海、マニツケ溪谷、黒海等を以て歐亞の境界とし、遠き昔に於ては地中海よりトルキスタン凹地を経て北極洋に通ずる一大内海あつて劃然此二大洲を分ちたるものありしならんといふも、それは遙かに有史以前に屬して明かならず。人類が史上に足跡を印せし頃は地續きの一大陸たりしを以て今に於てこそ歐といひ亞と呼ぶも、西方亞細亞は遠く東方亞細亞を知るよりも近く歐羅巴と接觸を有し、南方亞細亞は遙かに北方亞細亞を知るよりも、僅に紅海を隔て、相望む亞弗利加との交渉を保ち、こゝに世界の歴史は開展を初めたので、地理上の亞細亞、歐羅巴の區劃は必らずしも歴史上の東洋史、西洋史との區劃とはならない。

西洋の歴史は地中海沿岸を中心として更に西、大西洋に向つて開展し、東洋の歴史は印度洋に向へる方面と太平洋に向へる方面との二個の中心を有し喜馬拉山脈の兩者を遮るあつて、これ亦相知ること頗る遅く、これらは皆な自己の小天地を以て世界とし、早く恒河の流域に文化の花を開きし印度に於ては夙に喜馬拉ヒマラヤの高峰を以て世界の中心とする感想よ

印度人の世界觀

漢人の世界観

り聯想せられたりと見るべき須彌山説出で、須彌山は梵語須迷盧(Sumero)其の高さ八萬由旬——一由旬を四十里とする——其の周圍に七重の金山あり、一々の山間に香海あり、而して其の外圍に一大鹹水あり、更にそれを繞つて鐵圍山あり、これを九山八海といひ、此鹹海の四方に四大洲あり、東を弗婆提、西を俱耶尼、北を鬱單越といひ、我等の棲む所を南閻浮提洲といふ龐大なる世界觀を出し、支那に於ては曠漠たる陸地、天は圓にして地は方、東西南北、繞らずに海を以てし、日出る所を扶桑とし、日没する所を虞淵とし、南は炎光を極とし、北は勞水を限りとし、四方の怪異を説く四千年前の古書と傳ふる「山海經」あるも、もとより後人の假托にして想像の域を脱せず、自ら住む所の黃河楊子江の流域を中華と稱して早く象形に基く漢字を作りて其の文化を誇り、四方を東夷、西戎、北狄、南蠻と呼んで犬種、蛇種と卑む。それらの日に於ては何れの民族も自尊倨傲、自己以外の民族を劣等視せざるはなく、特に自ら神の選民なりと稱する猶太人は「創世紀」に於て神の初めて造りたまひし人類をアダム、イブとし、それより幾世代を経てノアに至り、全地は悉く大洪水に浸されて、人類はすべて絶滅し、たゞ方舟に乗りて難を逃れしノアの子セ

神の選民

古代文化

ム、ハム、ヤベテのみ殘留し其の子孫の地上に蕃殖し國々の民分れたりと傳ふれど、其の分布は西方亞細亞と北部亞弗利加の域を出でず、されど西洋文化の源頭は亦此地方を中心とし、一は西方亞細亞たるユーフレテース、チグリスの二大河流域たるメソポタミヤ地方にして、こゝにはバビロニア、アッシリヤの文化を生じ、早くクネフォルム(Cuneiform)と稱する楔形文字を造り、他は北部亞弗利加なるナイル河の流域たる埃及にして殆んど世界最古を以て稱せられ、夙にヒエオグリフ(Phielogriph)といふ一種の象形文字は用ひられたのであるが、何れも一地方に跼蹐して未だ世界を知らず、それよりも廣く知るに至りしはフィニシヤ人にして其の國の位置は東にレバノンの山を負ひ、西は地中海に面し、特に航海の術に長じ且つ通商貿易を事としたるを以て、早くこれら兩地方の文明に接觸し、海路は歐羅巴なる希臘の沿岸より、更に西してイスパニアに及び北の方は遠く英吉利よりバルト海に達し、北部亞弗利加は勿論進んでジブラルタルの海峡を過ぎて西方亞弗利加の諸島に及び東の方は紅海より印度に進み、陸路はバビロニア、アッシリヤは云ふまでもなく、アラビヤ、アルメニヤの方面にまで進出して居つたので、西曆紀元前一千年代に於て最も

廣く世界を知つたのは此民族で、其の文化的遺蹟として我等に傳へられたる最も偉大なるものは當時文化に誇る國々でさへも象形又は楔形の文字を以て未だ音符文字を有せざりし時代に、多くの國々の間を往來し多くの民族と接觸し、其の言語を寫すの必要より音符文字を發明し、希臘に入りては希臘字となり、伊太利に入りては羅馬字となり、西洋文字の源頭をなせしのみならず、印度の梵語さへも其の影響を受けたるにあらずやと云はるゝのである。

次で西洋文化の源頭と云はれたるは、此フィンニシヤ人の影響を受けたること多きも、其の世界的知識はフィンニシヤ人が商業の秘密として多く傳へざりしが故に、頗る幼稚なるものにして世界の周圍は海を以て包まるとし、希臘最古の詩人たるホーマーによつて傳へらるゝ所も、北方希臘及び小亞細亞の西海岸、亞弗利加に於て埃及付近に止り、其の以外は驚くべき想像を以て描き出されたるに過ぎなかつたのである。其の後希臘人の發展は地中海沿岸の大植民となつて其の眼界次第に開け、西は伊太利半島より歐羅巴大陸に及び、東は小亞細亞よりベルシヤに入り、紀元前四百九十年代に於てはベルシヤとの衝突となり、こ

れを撃破して國威大に振ひ、同四百四十年代に出でたるヘロドタスは歴史の父と呼ばるゝと共に地理學の母とも稱せられ、親しく埃及、バビロニヤ、ベルシヤ又は黑海の沿岸を旅行し精確なる知識を蒐集し、其の以後希臘人の亞細亞に關する智識は大に其の範圍を擴め、終に印度までも知るに至り、此希臘を統一して埃及を略したるマケドニア王アレキサンドルが紀元前三百三十四年進んでベルシヤ遠征の途に上り、行く／＼諸州を略し、終にベルシヤを撃破し、長驅してバクトリアに入り同二十七年には更に進んで印度に入りインダス河畔に都市を建つるに至り、源頭を異にする東西兩文化は初めて接觸の機を得たので、此アレキサンドルの遠征こそ古代に於ける歐亞交通の開拓であり、東西文化融合の濫觴であつたのである。

アレキサンドル大王の版圖は其の死後三分せられてマケドニア、シリア、埃及の三個の中心を有し、中にも埃及のプトレマイオス朝はアレキサンドリアに都し、フィンニシヤ、キプロス、キレネを隸洲として遠く印度、アラビヤと交通せしを以て一時東西文化の融合地となり、アレキサンドル大王の侵入により國內の紛擾せるに乗じ殆んど印度の大部分を統

一し摩竭陀國に君臨してマウリヤ王朝を建てたチャンドラクプタより三代の王たる阿輸迦(阿育王)が紀元前二百七十年代に佛教弘通の爲めに四方に派遣せしめし布教僧も亦此アレキサンドリヤの地に入り、夙に佛種を播きたりと稱せらるゝのである。

アレキサンドリヤを中心として世界の智識は開け、紀元前二百年頃に出でたるエラストネスは太陽の造る陰影より起算して其の周囲を測定して、略ぼ今日の測定に近似するの結論に達せるも尙ほ極北と極南とは人類の棲息に適せず、人類の棲息は西はジブラルタル海峡より東は印度の東部に至る地域に限るとし、東北亞細亞や西南アフリカに就ては知ることがなかつた。エラストネスに次でトレミーあり、古代の記録を蒐集して大小世界的知識を廣めしも、其の知る所は多く此範圍を脱せなかつたのである。

アレキサンドル大王以後歐亞に跨る大版圖を領有するに至つたものは羅馬帝國である。此帝國は其の盛時に於て東はユーフレテース河より西は大西洋に通じ、南はアフリカの北部より北はライン、ドナウ兩河並に黒海に及び、其の以外に國あり民族あるを知りしも未だ精確ならざりしも地は續き人は相交るを以て先きにアレキサンドル大王の部將ネアルコ

スは印度の北方より傳來するセレスなる布に就ての記録を残し、此の繪の支那音より轉訛し來れるセルの早くも西方へ行商せられ羅馬にも傳へられて居つたので、羅馬帝國の盛時は支那も亦後漢の隆盛期で其の領域は西域諸國に及び、殆んど中央亞細亞の大部分を服屬せしめてベルシヤの國境に接し、中央に安息の國を隔て、ユーフレテース河に臨める羅馬帝國と相接したので、後漢の西域都護たる班超は其の部將甘英をして太秦即ち羅馬に至らしめんとしたが東西貿易の利を得んとする安息人は其の直接交通を喜ばず、之れを妨げて赴かしめざりしを以て其の事終に止みしが、其の後、羅馬は安息を破つてベルシヤ灣頭の地を取り、紀元百六十六年、太秦王安敦即ち羅馬皇帝マルクス、アウレリウス、アントニオスは海路、ベルシヤ灣より使を支那に送り、安南に上陸して、象牙、犀角、玳瑁等を後漢の桓帝に献じ、こゝに東西兩大國は初めて接觸の機會を得たのである。

## 二 東西興亡の異同

此時代に於ける世界の大國は漢と羅馬とであつた。東に於て漢民族が「我は中華の民な

漢と羅馬

佛教と基督  
教

り」と威張る時は西に於てラテン民族が「我は羅馬の市民なり」と威張る時であつた。羅馬の領域は東へ東へと擴大して其の領内に基督を生じ、漢の領域は西へ西へと擴大して大乘佛教の隆昌地たる大月氏國と通じ、其の佛教の支那に求められ迦葉摩騰、竺法蘭の二僧が佛像經典を白馬に載せて洛陽に入つた後漢明帝の永平十年は、基督の使徒たるペテロが迫害に屈せず、羅馬に布教して磔殺せられた紀元六十六年の翌年である。東の方、佛教は歴代の崇敬を受け桓帝靈帝の頃には大仕掛なる佛典翻譯事業の行はれ、漢亡びて三國鼎立の時代に入つて益々盛んに、これに反して西の方、基督教は歴代の羅馬皇帝の迫害を受けつゝ宣傳に努め、終に紀元三百二十年代に入つてコンスタンチン大帝の歸依を得、其の國教と定めらるゝに及びて教域全土に遍き隆盛を致し、東西二大宗教は期せずして殆んど同時に興隆したのである。これより先き紀元二百二十一年、漢の天下は分裂して蜀、吳、魏の三國となり少しく遅れて紀元二百八十四年、羅馬は東西に兩分せられ其の後、一時統一せられしも三百九十四年に至つて完全に分裂し、東羅馬帝國はコンスタンチンノープルに、西羅馬帝國は羅馬に都して相對立し、支那に於ける三國鼎立も一時晋によつて統一せられ

東西史の  
酷似

しも、異民族の侵入によつて攪亂せられて五胡十六國の分裂を見、西羅馬帝國も亦異民族たるフン族、ゲルマニ族の侵入によつて攪亂せられて四百七十六年を以て全く滅亡するに至り、東西、地を異にし、しかも時を同うして史容を酷似せしめしも一奇とすべきではないか。況んや其のゲルマニ族を壓迫して南下せしめしフン族はモンゴル種にして支那は所謂匈奴に屬し、漢民族に追はれて南匈奴は北匈奴を壓し、北匈奴はゲルマニ族を追ひ、終にゲルマニ族をして羅馬に侵入せしめしといふに至つては、山河相隔つといへども、同一地上の出來事として脈絡相通するものあるを看取せざるを得ない。

其の後、支那の歴史と歐羅巴の歴史とは頗る趣を異にし、支那に於ては五胡十六國の次第に南北兩朝に統一せられ、兩朝亦隋に統一せられ、隋、僅かに三十年にして倒れて唐代つて之れを統一して二百九十年、唐亡びて五代五十四年を経て宋の天下となり、宋實に百六十七年、北方に遼起ち、金興り、爲めに都を南、揚州に移し版圖は縮少せられしも尙ほ百五十年の存在を保ち終に元の爲めに統一せられ、元百六十二年、明次で起つて二百七十五年、清代つて二百四十八年、統一に次ぐに統一を以てせるに、西羅馬滅亡後の歐羅巴は

東西史の  
相違

分裂に次ぐに分裂を以てして其の廢墟に起てるゲルマニ諸王國は西ゴート、東ゴート、ワ  
ンダル、ブルグント、フランク並にアングロ・サクソン諸國となり、後フランク王カロロ  
大帝一たび西羅馬帝國の版圖を統一せしも、紀元八百年戴冠式を行ひ、同十四年に死して  
忽ち分裂し、爾來たゞこれ分裂に分裂の歴史を續け、強て統一の例を求めればカロロ大帝  
以後獨りナポレオン大帝を推すの外はないが、ナポレオン大帝は霸業未だ成らずして身は  
配流の身となり、歐羅巴の分裂は依然として續けられ漸次強國に合せらるゝの傾向ありし  
も世界大戰は却て其の分裂を甚しくし、各國林立して今日の歐羅巴を形成して居るので、統  
一に次ぐに統一を以てして居る支那の歴史とは全然趣を異にするものあるを感ぜざるを得  
ないのである。これには東西地理的狀勢を異にし、支那は主として黄河楊子江の流域を中  
原として山脈の起伏少くして統一に便し、歐羅巴は山岳縱横に地を劃して國を分つに便な  
るにも由るのであらうが、一は夙に堯舜の治を理想とし王道を説いて徳化を旨とし、民に  
教ふるに服従の美德を以てし、他は早く希臘羅馬の昔より民權思想の歴史的に回想せらる  
ゝと共に自治を主としたるゲルマン民族の思想が自由獨立を喜びたるに基く東西思想の相

思想的影  
響

異も亦これが因となり果となれるものあるを見逃すことは出来ない。

### 三 東西の交通

端なくも、談は岐路に入り東西の歴史を一瞥し去つたが、支那に於て佛教が、歐羅巴に  
於て基督教が全盛を誇る時代に、其の中間アラビヤの地に五百十七年に生れたるマホメツ  
トによつて唱道せられし回々教は其の經典たるコーランを振り舞はし「劍かコーランか然  
らずんば貢賦か」と戰鬪的態度を以て教域の擴張を計り、其の繼承によつて其の領土は擴  
張せられ、シリアを陥れ、メソポタミヤを略し、ベルシヤを従へ、北亞弗利加海岸を服し、  
進んでイスパニアに入り、西ゴート王國を亡ぼし、こゝに<sup>ぼうだい</sup>龐大なるサラセン帝國を建て、  
後、帝國は三分せられてアッパス朝はチグリス下流のバグダートに、フアチマ朝は埃及の  
カイロに、ハリファ朝はイスパニアのコルドバに都を奠め、特にバグダートは歐亞交通の  
要路を扼し、東西の文化こゝに特殊の發達を遂げ、アラビヤ數字、代數學等<sup>アルゼブラ</sup>歐羅巴に傳へ  
たるもの多く當時全く文化の廢絶して暗黒時代と呼べる中世期の西洋史を輝かす新月の光

マホメツ  
ト教

であつた。

中世紀の歐羅巴は基督教全盛の時代で、羅馬教會の首長たる羅馬法皇は心靈の支配者として各國帝王の上に位し、一切の學術も教會の信條に背くものは異端なりとして之れを排斥せられたので、世界に對する地理上の知識も「聖書」の示す所、以外に出るを拒み「以西結書」に

「主エホバ、かくいひたまふ、我れこのエルサレムを萬國の中に置き、列邦を其の四周に於けり」

とあるを信じ、エルサレムを以て世界の中心とし、世界の地圖をO字の中にTを描ける如く上部を亞細亞、下部の右方を亞弗利加、左方を歐羅巴とし、これを限れるものを地中海とし、エーゲ海と紅海とを其の横に限るものとし、中心をエルサレムとし、未だ知られざる亞細亞の北方に同じく「以西結書」に文明を滅ぼす犖猛なる怪人として擧げたるゴীগ及びマゴグ(Gog and Magog)が棲むと信ぜられたのである。

歐羅巴人が世界の中心として神聖視したるエルサレムは回々教たるサラセン帝國の領土

十字軍と  
東西交通

にあつたが彼等は其の參拜者によつて巨利を博するを以て基督教徒の往來を妨げず、寧ろ歓迎したから、別段異教徒の領内にあつても、支障を感じなかつたがバグダートのアッバス朝亡びて同じく回教徒たるセルジウク・トルコ之れを占領するに至り、基督教徒の來集を歡ばず、其の寺院を破壊し、其の參拜者を虐遇するに至つたから、歐洲の參拜者は大に憤慨し、エルサレム恢復の聲全歐の基督教徒を震撼し、羅馬法皇亦これを激勵し終に一千九十六年を以て「エルサレムへ〜」と叫びつゝ十字架を陣頭に押し立て、亞細亞の地に入る宗教的遠征を企てたので、これを第一十字軍とし其の強烈なる信仰の力と多數の兵力とは一度びは之れを恢復せしも、軍少しく撓みては直にトルコ人に奪還せられ一千百四十七年には第二回を試み、かくて第三回、第四回と回を重ねること七回、一千二百九十一年を以て全く失敗に終り、依然としてエルサレムは異教徒に領せられ、最早これが恢復を計る氣力も失はれたが、此數回の遠征は歐亞交通の路を開き沿道の諸市の隆昌を促し、歐羅巴人をして亞細亞を知らしめ、基督教以外別に文化あるを知らしむるの効は大なるものがあつたのである。

此十字軍の末期に近く歐羅巴人を驚かしたものはゴーク、マゴークの襲來と思惟せしめたる蒙古の襲來である。蒙古は亞細亞の西北幹難、怯綠連兩河の源なる不兒罕山邊に遊牧したる一民族であつたが、こゝに鐵木眞なる英雄出で附近の部落を攻略して成吉思汗と稱し、東征西伐、全蒙古を統一して進んでマホメット諸國を下し、子孫相承けて之れを擴大し、東の方は忽必烈によつて支那を統一して國號を元と改め、更に緬甸、安南、瓜哇を服し、西の方拔都の歐羅巴侵入となり、モスクバを陥り、キエフを焼き、ポーランドを取り、ホンガリアを略し、更に獨逸の東部に入りシレジアを侵し、大舉將に歐羅巴を席卷せんとするの勢ひを示し、ゴーク、マゴークの襲來として全歐を震撼せしめ、羅馬法皇は爲めに新たに十字軍を起さんとしたが、拔都は途上、太宗の計に接して兵を收めボルガ河下流のサライに欽察汗國を建て、西南に進むことなかりしを以て漸く事なきを得たが、此帝國の霸業は更に西南に進める旭烈兀はバグダートを略し、ダマスクを抜き、小亞細亞の一部を服して伊兒汗國を建て、その他、察合臺汗國は天山附近、阿窩臺汗國はアルタイ山附近、支那本部を中心として遼東、内外蒙古、青海、西藏及び中央並に東南亞細亞を直轄とし、

東は日本海より西は歐羅巴の東北部に跨りカスピ海並に黒海に臨み、北はシベリヤの地より南は印度洋に臨む空前にして絶後なるべき大帝國を成立し、従前専ら南西亞細亞に接したる歐羅巴人をして北東亞細亞に觸れしめ、以て其の世界的眼光を一段廣からしめ、エルサレム中心説は動搖し、ゴーク、マゴークの存在の夢物語たるを知らしむるに力あつたことは疑ふを要せぬ。

#### 四 世界一周

蒙古大帝國の成立は從來各地に割據した小邦を滅ぼして之れを統一治下に置き且つ政治並に軍事の必要から官道を開き宿驛を設けしが爲めに頗る旅客の往來を助け、陸路には中央亞細亞を経由する天山南路、天山北路の街道も通じ、海路にはベルンヤ灣から印度洋を経てスマトラより廣州、泉州等に着く等の方途が取られたので東西交通の便、もとより昔日と異なるに至つたが、尙ほ西歐からは數年を要すべき大旅行であつたから、遠く此地に入りし者の旅行談は頗る歓迎せられ、其の見聞記は好奇の眼を以て耽讀せられたので、中に



マルコ・  
ポーロ

も伊太利ヴェニスの人マルコ・ポーロは父ニコロ・ポーロと共にシリヤよりペルシヤに入り、中央亞細亞を経て元の燕京に來り、忽必烈に仕へて樞密副使となり、元に止ること十七年、一千二百九十二年元の公主の伊兒汗國のアルグンに嫁するものを送つて泉州より出帆し、命を果して同九十五年に歸國し、其の見聞を録した「東方紀行」は正確なる記事として歡ばれた。其の中にヂパング (Zhipang) として初めて日本が西洋に紹介せられたので、支那大陸を距る千五百里の海中にある島國で、未だ曾て他國の支配を受けず、固有の國君によつて統治せられ、風俗また大に開けて居る」といふ等正鵠を得た所もあるが、「國内黄金を産すること殆んど無盡藏にして國王の宮殿は其の屋宇を葺くに黄金の延板を以てし、柱石も、床板も黄金である」といふ誇張の記事もある。而して此誇張の記事が却て人類の世界發見に大なる影響を與へたる金玉の文字となつたのである。

日本西歐  
に紹介せ  
らる

此誇張の記事も全く根據のないのではなく、我が平安朝の末期に當り奥州に於ける砂金の産額比較的多く、平清盛が兵庫に經ヶ島を築き宋との貿易を奨励したが、我が國より輸出すべき主要なるものは黄金であつたであらうと想像せらるゝし、承安三年には後白河法

亞米利加  
發見

皇が宋に砂金を贈られた史實があり、平重盛が宋へ黄金を送つたといふ記事もあるから、これらの事實より殆んど無盡藏の如く訛傳せられ、黄金の殿堂なぞいへるは奥州の藤原清衡が中尊寺を建立し金色を以て粉飾する光堂を建てたことなどが誤り傳へられたのではないかとの説を立てる人もあるが、それは明かでない。しかし歐羅巴人が此記事に刺戟せられたことは事實で、後年、オスマリー・トルコの勃興してコンスタンチノープルを陥れて東羅馬帝國を亡ぼし、都を此地に移して附近の諸國を併合し、海陸共に歐亞交通の要路を扼して苛酷なる税金を課するに當り、從來東洋より仰ぎたる香味香料を初め日常必需品の缺乏と價額の暴騰とに困厄し、地球は圓形なれば此通路を經ずして西に航して直に印度又は日本に出で得べしと信じて大西洋横斷を企てたるコロンブスは實に此「東方紀行」の愛讀者であつたのである。かくてコロンブスは西班牙女王イサベラの贊助を得、一千四百九十二年八月を以て出帆し、二ヶ月の後、ガナハニ島に達し、更にキューバ、ハイチ諸島を發見し、これを亞細亞の島嶼なりとし西印度諸島と呼ぶに至り、其の後コロンブスは一千五百二年の航海によつて中部亞米利加を發見したが、コロンブスの西印度諸島の發見に衝動

を受けたるアメリカ・ベスプッチは之れに先きだつ三年、南アメリカの海岸を發見して其の紀行を著はし、終に其の名によつてアメリカと稱せられたが、未だ別の大陸たるを知らず、恐らく亞細亞の地續きならんとせしが、一千五百十三年、西班牙人バルボアがパナマ地峽を横ぎつて更に背後の太平洋と異なる大洋の前面にあるを發見するに至つて、アメリカが別個獨立の大陸たるを確め、次で一千五百十九年ポルトガル人マゼラン、西班牙王の命により亞米利加の南端の海峽を過ぎて波靜かなる此太平洋に出でて太平洋と呼はるゝに至つたが、此太平洋こそは我等東洋人が太古以來眺めつゝあつた海であるのである。

かくてマゼランの船は太平洋を航してフィリッピン島に達し、マゼランは不幸土人の爲めに殺されしが、其の部下の手によつて亞弗利加の南端を巡りてイスパニアに歸航してこゝに世界一周の記録を造つた。これより先き葡萄牙は王子ヘンリー非常に航海に熱中し亞弗利加の南端を巡りて東洋に出で得べしとして、數次西海岸を航海してマデイラ・アゾレスカナリア諸島を發見し、一千四百八十六年には初めて其の南端喜望峰に達し終に一千四百九十八年、バスコ・ダ・ガマによつて其の南端を巡りて印度に達して完全に其の目的を達し、

## 太平洋發見

マゼランの歸航は實に此航路を取つたのである。

かく西班牙は西し西し、葡萄牙は東し東して歐人未知の地を發見し、各々これを自己の勢力範圍となさんとせしを以て羅馬法皇は太平洋上マデイラ島の西方三百リーグの地點を東西の分界線とし、これより東に基督教以外の住地を發見した時は葡萄牙、西なれば西班牙の所屬たるべしと定め、これによつて西班牙は南北亞米利加を得、マゼランの廻航によつて更に西してフィリッピン群島に達し、これを西の島と呼びしが、葡萄牙も亦之れによつて東へ東へと進んで亞弗利加より印度へ、印度より東して同じくフィリッピンに達し、これを東の島とせしを以て、こゝに東西の鉢合せとなり、更に羅馬法皇をして此島とモラツカ群島との間に一線を劃して東西を限らしむるに至つた。

此に於て從來背中合せに發展したる東西兩洋は面と面と相合はすに至り、これに加ふるにトレミーが印度洋の南に大陸ありと想像したるオーストリア洲の、主としてオランダ人によつて探檢せらるゝによつて人類は略ぼ世界の輪廓を領得するに至つたのである。

## 東西相會

## 第二節 日本と西洋

## 一 西洋より日本へ

マルコ・ポーロの「東方紀行」は我が日本を西洋に紹介して、支那の東方に此黄金國あるを知らしめたが、日本が西洋を知ることには遅かつた。亞細亞大陸の交通は夙に開け、支那との交通はいふ迄もなく、早く奈良朝の末には印度人の來つて我が奈良大佛の開眼供養までして居るので、これを波羅門僧正といふ。波羅門僧正は菩提僊那といひ南天竺の人、支那に來りしを天平五年、我が遣唐使多治比廣成等が請ふて我が國に來らしめ、天平八年には副使中臣名代が波斯人李密を伴ひ來つて居るほどで遠く南方亞細亞とも接觸して居つたことは疑ふを要せぬ。當時の支那は漢民族隆盛の絶頂ともいふべき唐の玄宗皇帝の時代で、其の勢力範圍は西域諸邦たる中央亞細亞を通じて遠く波斯の方面に及び、内屬の諸邦八百といはれた頃であつたから其の都たる長安は實に當代文化の中心であつた。前代以

印度人、波斯人

間接的な世界文化の影響

來受けたる印度希臘式の犍陀羅藝術はいふに及ばず、遠くアラビヤの文化をも併せ受け、其の精神方面に見れば波斯のゾロアスター教(唐に妖教といふ)や摩尼教はいふに及ばず、大食(亞刺比亞)人によつてマホメット教(唐に回教といふ)も、波斯僧阿羅本によつて基督教の一派たるネストリアン(唐に景教といふ)は傳へられて長安に波斯寺は建てられ、玄宗皇帝は「波斯景教、太秦より出で久しく中國に行はる(中略)其の本に循ひて波斯寺を太秦と改むべし」と勅し、建中二年には「景教流行中國碑」が建てられ其の下にはシリヤ語が記入せられて居るほどで、此處に往來し此處に留學したる我が入唐の使節や留學生並に沙門が其の見聞を我が國に齎らし我が國に西南亞細亞の文化を傳へたことは想像に難くない。法隆寺の早く印度希臘式の藝術を傳へしはいふまでもなく、其の法隆寺の所傳の香木として今、東京帝室博物館に所藏せらるる香木の烙印のシリヤ語なること明かとなり、平安朝の初め弘法大師によつて將來せられしといふ二十八宿、十二宮、七曜を明したる「宿曜經」は満月より満月に至る月の運行を二十八宿に分ちて埃及、印度、波斯等に行はれたる夜の天文學と日の運行を最も着目し易き群星の路標として十二宮を定めたるメソ

宿曜經

ポタミヤ、カルデヤより希臘にまで入りし晝の天文學との綜合せられたもので、其の日、月、火、水、木、金、土の七曜には胡語、漢語、梵語、波斯語の對照の擧げられたるより推して其の一端を卜知することが出来る。

## 高岳親王

若し日本人にして遠く支那以外に出でしものを求むれば平城天皇の皇子高岳親王たかぶねを擧げざるを得ない。親王は貞觀四年（西曆八百六十二年）支那に入り滯留五年、更に印度に入らんとして行脚十有餘年、其の途中羅越國らこくに於て薨去せられた。羅越國は今の暹羅地方であるから邦人としては最も遠く旅行せられたのである。爾來其の人を聞かないが元が我が國へ來襲した後、幾もなく永仁三年（西曆一千二百九十五年）マルコ・ポーロが伊太利に歸りし年を以て蝦夷地（今の北海道）より樺太に渡り、更に沿海州を経て滿洲に入り進んで燕京に出で蒙古に入り遠くコスコル湖畔にまで赴き此地に入寂せられたとの傳説を有する日蓮上人門下六老僧の一人日持上人あるのみである。

## 日持上人

しかし、日本人はいつまでも國內の蟄伏ちやくふくを甘んずる國民ではない。海を家とする瀬戸内海の沿岸や島嶼に根據するの徒は夙に舟楫に熟練して遠く支那朝鮮の沿岸にまで出るもの

## 倭寇と海外發展

もあつたが、元の來襲に刺戟せられたる是等の徒は報復の志を以て海外進出を企て、特に南北朝以後、國內の紛亂に乗じ、志を得ざる武士の鬱勃の氣を海外に吐かんとするものも加はつて瀬戸内海なる能島の村上氏の如きは海賊大將軍として西海に雄視し、八幡大菩薩の旗を絃頭に立て數千百艘の兵船は隊を成して沿海を侵略し、八幡船はつぱんぶねの名は實に大陸並に半島の沿岸を震駭せしめた。彼等はこれと呼ぶに倭寇わこウの名を以てし、元寇の時、先導となつて我れを苦めし高麗は此倭寇の爲めに國力を疲弊せしめ、其の掃蕩に功ありし李成桂は衆望を收めて王位に上り、國號を朝鮮と改め、元も亦此の爲めに苦められ、元亡びて明となるや、直隸、山東、浙江、福建、廣東、廣西等の地に行都使を置き、城を築き兵を募りて防備に努め、太祖朱元璋は書を我が足利義滿に寄せて其の鎮撫を請ふたほどで、頗る猛威を逞ふした。しかし倭寇は決して初めより掠奪を事とするものでなく、貿易を求めて意に満たざることあるに至つて兵火に訴ふるので、東西共に海事發達の源頭を爲すものたることは彼の英吉利史の劈頭が歐羅巴の北西海岸に住したるアングル・サクス諸族の侵略に初り、更に北方スカンデネビア半島の西岸に於ける慄悍へうかんなるノルマン人の侵略を語るに於

ても明かであり、西班牙、葡萄牙の新地発見といふものも表面は平和を装ふも内實は此倭寇と相距る遠からざるものであつたのである。此倭寇の跳梁したる範圍は頗る廣く、支那沿岸はいふに及ばず、西南は印度の諸國、安南、占城、東坡、暹羅等の沿岸並に臺灣を根據として呂宋、臥亞の方面にも出て居つたので、此倭寇の全く鎮定せられたのは豊臣秀吉の時代であるから西し西し來つてフィリッピン（呂宋）に及べる西班牙人は東し東し來つて亦此處に達せる葡萄牙人の此沿海を往來せし西曆一千五百年代の初めに於ては此海上に於て相會ふことがなかつたとは斷言することが出来ない。

されど史上明かに我が日本が西洋人に接したのは西曆一千五百四十三年我が天文十二年に葡萄牙人アントニオ・ダモタ、フランシスコ・ザイモト、アントニオ・オベリソト等が暹羅より支那に向ふ途中暴風に遇ひ我が九州種子島に漂着したのを初めとし、此時にソンドス・ピントーも來りしといふを普通とするもこれには異説があつて、ピントーの來つたのは其後であらうといふが、兎に角此時に初めて鐵砲が傳へられ、それより僅か六年の後西曆一千五百四十九年我が天文十八年に初めて我が國に基督教を傳ふべく來つたフランシスコ・

葡萄牙人の渡來

ザヴィエルは臥亞にあつて我が薩摩鹿兒島の人アンゼロ（安次郎或は了西といふ）に會し、これを案内者として鹿兒島に來たといふのであるから、國內人が知るよりも早く、國外にありし邦人が歐羅巴人に接觸したることは疑ふを要せぬが、歐羅巴の足跡を日本の地に印したのは葡萄牙人を初めとし、次で西班牙人は平戸に來り、翌千五百四十四年には葡萄牙人薩摩に來りて貿易を請ひ、次で四十八年には豊前に來て居るので、日本人は西洋人を知り、西洋人は日本を知り、翌四十九年に來りしザヴェル（Xavier）は鹿兒島より周防の山口に赴き、京都に入り、歸路再び山口に寄り、更に豊後に往き略ぼ日本の面容を見て歸り、これより世界は日本を知り、日本は世界を知るに至つたので、それまでの日本人の世界觀は印度、支那、日本を三國といひ、三國一の名は殆んど世界一を意味し、「三國一の剛の者」、「三國一の花嫁」等が使用せられて居つたのであるが、此に至つて三國以外更に多くの國を算せざるを得ざるに至つたのである。

## 二 西洋渡來の文化

日本に訪れ来りし當代西洋文化の本質に就て一瞥を煩はせねばならぬ。

西洋文化は古く西方亞細亞に於て其の源頭をなせるユーフレテース、テグリス兩河の流域や、埃及のナイル河畔に開かれたる文化のフィンシヤ人等によつて傳播せられたるに基くが、其の西洋文化として絢爛の美を呈したのは希臘であつて、其の哲學に於て、其の文藝に於て、將た又美術工藝に於て華やかなるものがあつたが、希臘の文化はアレキサンドル大帝の東征を一期として其の光を失ひ、代つて政治に於て、法律に於て統制の美を示したものは羅馬であつたが、羅馬帝國の東西に分れ、其の西羅馬帝國亡滅後は全く四分五裂の状態となり、歐羅巴の天地は文化の光り影を潜め世は全く暗黒時代となり、獨り基督教のみ勢威を逞うし、哲學も科學も其の奴隸となり、苟くも基督教會の信條に背くものは異端なり邪道なりとして排斥せられて其の發達は阻止せられ、羅馬にある基督教會の首長たる羅馬法皇は各國帝王の上に位し、各國帝王の支配する所は其の人民の身體、財産等の物質的方面のみにして其の精神を支配するものは獨り羅馬法皇あるのみとの信仰を如實に現はして居つたのである。

## 西洋文化の經路

## 文藝復興

此信仰は比較的長く歐羅巴を支配して居つたが、十字軍に於ける基督教徒の不成功や、此遠征に於けるアラビヤ文化との接觸は次第に其の信仰に動搖を來し、更に東羅馬帝國の回々教徒たる土耳其の爲めに亡ぼされて、これまで西歐とは隔離せられて東歐の地に遺されたる希臘古典の西歐の地に流れ込み來り、加ふるに從來基督教義と融合してスコラ哲學として僅に光を存せしアリストテレスの研鑽より希臘古典の復興を促して學問上に所謂文藝復興の時代を現出すると共に、宗教上には羅馬教會の專恣を以て基督本來の精神に背くとし、基督の古に還るべき宗教改革の機運は大に熟し、一千五百十七年、ウインデルベルヒ大學教授マルチン・ルーテルが九十五條の意見書を寺門に掲示して敢然として羅馬法皇に反抗せしより其の説、四方に傳播し、從來羅馬法皇に快からざる王侯は之れを援助し、反抗者(Protestant)の名は新教の稱號となつて羅馬舊教に對し、羅馬舊教も亦帝王の援助を借り、終に干戈を以て相争ふに至つたので、日本へ舊教の宣教師ザヴィエルの來た一千五百四十三年はルーテル死後、僅に四年にして歐羅巴に於ては新舊兩教の争ひ酣なる頃であつて、此ザヴィエルの教團は軍隊精神を以て羅馬法皇の教權を擁護するエスウイット

## 新舊兩教の争

## エスウイット教團

(Jesuit) 教會であつたのである。

これより先き葡萄牙人によつて日本に傳へられたる鐵砲も亦西洋に於ては新らしき發明で、其の源は寧ろ東洋にあつて支那にては早く火藥は發明せられて烽火、狼烟等の文字は史上に散見し、地雷火の如きは諸葛孔明の秘器とまで稱せられ、金、元時代には震天雷とて爆發力を以て敵を驚かすの武器あり、蒙古の侵入頃から西洋に傳はり一千三百三十年獨逸のベルトル・ド・シウワルツ初めて今の鐵砲の如きものを造り一千四百年代より戰爭に用ひられ、支那へは明の嘉靖年間即ち一千五百三十四十年の頃之れを傳へたといふから日本傳來と相距ること遠からず、其の日本に來りし時、如何に奇異に感ぜられたかは、「南浦文集」に、

「天文癸卯、蠻船、種子島に漂着す。大明の儒生五峰と名くるものありて、南蠻の賈胡たるを知る。其の賈胡の長二人（中略）手に一物を携ふ。長さ二三尺、中通じて外、直く重きを以て質と爲す、其の傍に一穴あり、火を通ずるの路なり、妙藥を其の中に入れ、添るに小さき團き鉛を以てす、先づ一小白を岸の畔に置き、親ら一物を手にし、其の身

鐵砲の傳  
來

を修め、其の目を眇にし、而して其の一穴より火を放つ、立ちどころに中らずといふことなし、其の發するや掣電の光の如く、其の鳴ること驚雷の轟の如く、聞く者其の耳を掩はざるなし、此物一たび發して銀山摧くべく、鐵壁、穿つべし、姦仇の人の國に害を爲す者、之れに觸るれば立ちどころに其の魄を喪ふ。況んや麋鹿の苗稼を禍するに於てをや。其の世に用ふることを擧げて數ふべからず。」

といへるにて其一斑を推すことが出来る。

日本は實に此精神、物質二様の文化を受けて初めて西洋人に接觸したので、特に當時國內亂れて麻の如く英雄四方に割據して互に戰鬥に従事せる時、此最新の武器が如何に歡迎せられしかは想像に餘りあるので、「南浦文集」は更に文を續けて

「島主兵新、丞時堯、之れを懇望し、以て稀世の珍とす、而して其の何と名くべきかを知らず、人呼んで鐵砲といふ。蠻種の二鐵砲を求めて其の一を紀州根來の僧杉、坊に授け、而して後、時堯、鐵匠をして數十の鐵砲を製せしめ、益々其の蘊奥を究め、藥方及び鎗、鎗の鍛鍊秘術、悉く習得して以て鐵砲を島津義久に送る、義久、是に於て之れを柳營

(足利將軍)に献す。」

と。時堯は更に其の臣篠川小四郎をして火薬の製法を學ばしめ、種子島は鐵砲の特産地となり、和泉堺の商人橋屋又三郎なるもの此地に來つて之れを習ひ、技大に熟し歸つて堺に之れを製造し、畿内に之れを傳習するもの多く、次第に關東關西に弘まり、別に支那人長子口なるもの琉球より種子島に入りて此術を傳へ、近江の佐々木氏に客となつて製銃に従事し、九州の諸侯は更に直接の貿易によつて之れを得るといふ状態となり、天正四年には大砲、當時大筒おほづつといへるもの初めて傳へられ、豊後の大友宗麟これを得て喜ぶこと限りなく、これを國崩しと稱して攻城に用ひたりといふ、此鐵砲の傳來は弓矢を以て唯一の飛道具とし、専ら刀槍を以て相戦ふたる我が戰術に一大革命を起し、一夫嶮に當れば萬卒も登り難しといへる堅壘も砲火の前には一と溜りもなく破却せられ、十八人力の勇士も一發の彈丸には其の勇を誇る能はざるに至り群雄は次第に大部隊に統一せられ終に織田、豊臣をして天下統一の事業を速かならしめた一大原因となつたことは、疑ふを要せざる事實である。

國內統一  
と鐵砲

鐵砲の影響は實に此の如きものがあつた。さらば今一つの精神的渡來物たる基督教の影響は如何。これは又別殊の考察を要する。

### 三 日本より西洋へ

基督の福音を日本に傳ふべく初めて來りしザヴィエルはエスウィット教會中傑出せる人物であつた。彼れの足跡は殆んど日本の半ばに及び、其の感化も蓋し少なくなかつたであらう。彼れは日本人の聰明にして知識あり、道理に訴へて事物を辨別することに敬服し、其のエスウィット教會の總長ロヨラの許へ贈りし書翰の中に日本へ派遣すべき宣教師の資格を述べ「身體強壯にして堅忍不拔の精神を有し、聰明にして神學上の知識充分にして且つ天文及び其の他の學問に通ずる智徳圓滿、言行一致の人ならざるべからず」といひ、日本傳道の有望と共に其の宣教師の選擇に注意すべきを説いて居る、ザヴィエルの日本に留つたのは約三年で、一千五百五十一年に印度に向つて出發したが、此時日本人にして彼れの教化に歸し基督名マタイ及びベルナードといへる者並に豊後の大友義鎮より印度總督へ派し

切支丹傳  
來



たる使節の一行を伴ひ歸り、翌五十二年には師父ガゴ（Gago）修道士シルヴァ（Silva）アルカセヴァ（Alcaceva）等其の返書と共に來りて傳道に従事し、爾來宣教師の來往漸く盛んに、九州の大名大半之れに歸してこゝに多くの所謂切支丹大名を生じ、其の領内を風靡すると共に一千五百五十六年に來りし師父ヴィレラ（Vilera）は遠く京都に赴きて織田信長に謁し、信長爲めに南蠻寺を建立して其の布教の道場たらしめしより其の教、大に近畿に振ひ、こゝにも多くの切支丹大名を生じ、特に信長の居城たる近江の安土には教會堂を建て、多くの子弟に神學並にラテン語、ポルトガル語をも學習せしめたといふほどで、同十七年同教會の東洋布教總監たるヴリヤーニ（Valiyani）の教況視察のために來た頃には宣教師五十九人教會二百五十四の多きに達して實に侮るべからざるの勢力を有するに至つたのである。

基督教の傳播は漸次日本へ西洋の事情を紹介した。しかし未だ一人の西洋へと赴くものがなかつたが、此ヴリヤーニ歸國の一千五百八十二年を以て九州の切支丹大名たる大友義鎮、有馬晴信、大村純忠等は太友の甥にして日向の伊東氏の子伊東祐益（教名 Don Maucio）

羅馬への使節

有馬の叔父の子にして大村の從弟たる千々石清左衛門（教名 Don Michael）を正使として羅馬法皇に謁すべく二月二十日に長崎を出發して、しばし馮港に滞在し、マラッカ、セイロンを経てゴアに達し、こゝにてはポルトガルの印度太守に會し、それより亞弗利加の南端、喜望峰を巡つて大西洋に出で、翌々八十四年の八月十日に葡萄牙のリスボン港に入り、葡、西の各地を觀光し西班牙の首府マドリッドにて國王フィリップ二世に謁し、更に伊太利に出で、長途の旅を續けて羅馬に入り、一千五百八十五年三月二十三日を以て盛大なる儀式を以て法皇グレゴリオ十三世に謁したので、實に長崎出發以後滿三年一ヶ月餘を終て居る。羅馬に駐ること七十餘日、市民の大歓迎を受け、更に伊太利各地の靈跡を巡拜し、歸路復び葡萄牙を訪ね、滯歐約二年、一千五百八十六年四月を以て出帆し往路と同一の航程を取つて同八十八年六月馮港に入り、こゝに本國の政變と豊臣秀吉の切支丹禁制を耳にして、空しく一年有半を滯留に費し、終に同九十年七月を以て長崎に歸着した。此行實に八年と五ヶ月を費し、殆んど東半球の各沿岸を経由した大旅行であり、邦人の西洋訪問の最初の記録である。

これと逆航路を取つて西半球を經由して歐羅巴に赴き、羅馬法皇に謁したのはフランシスカン派の宣教師ソテロ (Sotelo) の慫慂しんように基き伊達政宗が、支倉六右衛門を羅馬に遣はしたので、支倉は一千六百十三年十月我が慶長十八年九月十五日陸奥國牡鹿郡月浦を出帆して先づフィリッピン島に寄港し、更に太平洋を横断して同十四年一月其の頃ノビスパン國といはれたる新西班牙、今のメキシコのアカプルコ港に着し、新西班牙總督の優遇を受け、翌年キューバ島を経て大西洋に入り、西班牙のサン・ルカ港に達し、首府マドリッドに入りてフィリッパ三世に、羅馬に赴きて法皇に謁し、歸路しばしマニラに滞留し、一千六百二十年の八月我が元和六年を以て歸還したので、其の間約七ケ年、此の伊達政宗の遣歐は先きの有馬、大村等の遣歐使の如く單なる信教の爲めではなかつたことは明かであるが、通商貿易の爲めであつたか、又世に政宗の詩として傳ふる。

「邪法、邦を迷はし、唱へて終まず、

蠻國を征せんと欲して、未だ功を成さず、

圖南の鵬翼、何の時にか奮はん。

久しく待つ、扶搖萬里の風。」

といへるが如く外征の偉志があつたかは明かでない。

これより先き一千六百年、和蘭陀人ヤンヨース英吉利人アダムスの日本に来るや、徳川家康之れを優遇して邸宅を江戸に與へ、此ヤンヨースが日本の東方數千里に亞米利加があり、其の亞米利加に新西班牙ネウ・エスパンありて日本に渡航する呂宋と共に西班牙の領なるを開き之れと交通せんとし、アダムスに命じて南蠻形の船を造らしめアダムスは相模の三浦の地に二百石を知行せられて、名を三浦安針と改め専ら造船に従事し其の成るや、フランシスカン派の宣教師ムノズ (Munoz) を使節として西班牙に赴かしむると共に京都の商人田中庄助、朱座隆成、堺の商人山田助左衛門其他を便乗せしめて一千六百十年、太平洋を横断して新西班牙即ちメキシコと交通の端を開かしめ、支倉一行の赴くに當ては、伊達政宗は幕府の船手方なる向井將監忠勝と計り、船材は主として自領の山林より伐採し、大工は幕府より差し下されし與十郎等によつたので長さ十八間、横五間半、高さ十四間一尺五寸、帆柱の長さ十六間三尺といふ此大船が全く邦人の手に成りしに見ても、當時に於ける造船技術の

進歩實に著るしきものありしを察知すべきである。

#### 四 東西交通の斷絶

日本に於ける基督教傳播の旺盛なる時代は歐羅巴に於て新舊兩教の争ひ最も激甚なる時代で、政教は全く混淆し各國其の好む所に従ひ、一國一教の主義を以て他と争ふて居つたから自教自派の擴張は殆んど國力の發展の如くに思惟せられて居つたので、當時世界に覇を唱へたる西班牙、葡萄牙の教派宣傳は同國の國力増進の上に力あつたことは疑ふを要せぬので、初めは其の宣教師として印度地方より來るを以て之れを佛教の一種として切支丹佛法、天主<sup>デウス</sup>如來と仰いで居つた人々も、其の傍若無人の宣傳と佛教の包容主義とは全く趣を異にする他神排斥主義なるを知るに及んで勢ひ反對運動を生じて、しばしば佛耶の衝突を演じ、其の初めには頗る傳播を助けたる織田信長さへも後には疑惑を生じ、一千六百八十九年、エスウィット教會のジアン・クラゼの書ける「日本西教史」をして「信長は陽に聖教の眞實を信するが如しといへども、其の實は信することなし、又敢て信するの望みなし」

切支丹禁  
制へ

といはしめたほどで、歐羅巴の知識輸入にこそ熱中したれ、其の宗教に於ては冷淡なるものがあつた。信長に次で豊臣秀吉立ち其の九州征伐に向へる時に際し、端なくも肥前長崎が切支丹領と稱し、今云ふ租借地の如き状態を以て葡萄牙人の經營せる基督教會の手に期し、長崎市民は切支丹教徒たることを強要せられ、其の神社佛閣を破却しトートノ・サンタ、ヘヤドノ・サンタ、サンジュリヤン等の大教會を建築したるを耳にし、「長崎の地は日域の正道を失ひて伴天連に服従し、地頭職のものより切支丹寺領と記して差出すこと不届至極なり」とて斷然彈壓の手を下し、長崎を收めて公領とし、「日本は神國たる所に切支丹國より邪法を授け候條甚だ以て然るべからざる事」其の國郡の者を近付け門徒に爲し、神社佛閣を打破らす事前代未聞に候」といひ、

「伴天連の義、日本の地には召置かれ間敷候間、今日より二十日の間に用意仕、歸國すべく候」

と令し、其の命を奉ぜざるものは之れを嚴罰に處した。時に西曆一千五百八十七年我が天文十五年で、先きに有馬、大村等より歐洲に遣はされたる使節の歸路馮港に於て聞いたの

西班牙の  
勢力

は此禁制であつたのである。

當時西班牙の勢力は殆んど絶頂に達し、既にメキシコを略してノバ・イスパニヤ (Nova Hispania) 我が國にて濃毘數般と呼べる新西班牙を領し、更にベルー・チンを併せて亞米利加大陸の富源を専し、一千五百十七年には葡萄牙の王統絶えたるを以て西班牙王フィリップ二世之れと併せてゴアを中心とせる同國の領土を掌中に收め、更に南洋に向つてルスン・ビザヤ・ミンダナオ、パラワンの諸島を取り之れをフィリッピン群島と稱しマニラ市を建設したほどであるから其の勢力を背景とせる葡西二國の宣教師の跳梁に我が國が脅威を感じたのは事實で、クラゼの「日本西教史」が基督教迫害の第一理由を「西班牙が其の威力を東洋に振り、既にマラッカ、モリエーリ、フィリッピンを奪取し、基督教徒と結び、其餘勢を日本に及ぼすと推定し、更に此推定を確むべきは西班牙の航海士が太閤の臣に向て我が國王の威勢を誇言し、其の地圖を示して其の領土の廣大なるをいひ、これ畢竟宣教師を用ひ宗教を口實として征服したに由るといへるにある」といへるは確かに其の一面を道破したもので慶長元年（西曆一千五百九十六年）西班牙の商船、土佐に漂着し、秀吉が增

田長盛をして之れを調査せしめし時、其の船長が「我が國は多くの宣教師を諸國に派遣して教法を説かしめ、信徒漸く多くなるに従ひ、兵を發して之れと合し其の國を伐つ」といへる如きは其の一例である。しかし秀吉は決して西班牙の威勢に屈服するやうな怯懦なる政治家ではない。彼れが天正十九年に原田孫七郎を使節としてフィリッピン群島の總督たる呂宋大守に遣したる書面の如きは我が國威を説いて其の降服を勧め「匍匐膝行遅延するに於ては速に征伐を加ふべきものなり、悔る勿れ」といひ、爲めに大守をして萬一に備へしめたほどで、切支丹をこそ國害ありとして禁じたれ、彼の天正十五年の禁令にも「自今以後、佛法の妨げをなさざる輩は商人の義は申すに及ばず、何にても切支丹國より往還苦しからず候」として通商貿易は寧ろ之れを奨勵したのである。

徳川家康も亦切支丹に對しては多大の疑懼を抱いたが、海外貿易に就ては其の隆盛を企圖したほどであるが、其の貿易對手國たる葡西二國人が相反目せる上に、此二國を併せる西班牙に對し強烈なる競争者を出し、其の競争者の口より對手國の野心は歴々徳川幕府の耳朶に觸るゝに至つた。競争者とは羅馬舊教を信ぜざるが爲めに西班牙王フィリッブ二世

和蘭陀と  
の交通

の暴壓に遇ひ、敢然として叛旗を翻し、一千五百八十一年を以て獨立を宣言し、其の後これ亦新教に好意を有せる英吉利女王エリザベスの應援を得て終に一千六百四十八年のウェストファリアの條約を以て其の獨立を公認せられたる和蘭陀である。西班牙は和蘭陀を目して叛逆者といひ、和蘭陀は西班牙を目して侵略者といふ。其の反目は東洋貿易の上にも現はれ、特に其の信仰を異にせるが故に英、蘭二國は切支丹にあらずとして親近を得、徳川家康は書を和蘭陀に與へて「兩國、志を同うす、縦ひ千萬里の海路といへども年々往來何ぞ異なるあらん」といひ、英吉利に對しては「イギリス國よりも日本へ今度初めて渡海の船、萬、商賣方の義相違なく仕るべく候」といひ、舊教國と交りを絶つて新教國と交を厚くするの傾向を生じ、此和蘭陀人の密告によつて慶長十六年（西曆一千六百十一年）九州に於ける切支丹教徒が書を葡萄牙の船長モロに托して本國政府より兵器彈藥を借りて徳川幕府の顛覆を計らんとする陰謀を知りたりとも傳へ、家康は慶長年中に西宗眞なるものを外國に遣はして其の教法を探らしめ、二代將軍秀忠も亦近臣揖斐政景を遣はして滯留七年、詐つて教徒となつて之を學ばしめ、それらの復命と、事實、國內に於ける同教徒の狀況と

伴天連追  
放の文

に察して其の統一に害あるを斷定し、益々其の彈壓を嚴にし、慶長十八年十二月を以て更に之れが勵行を計り、金地院崇傳をして伴天連追放の文を作らしめ秀忠の名を以て諸侯に下した。其の文の終りにいふ、

「彼の伴天連の徒黨、皆政令に反忤し、神道を嫌疑し、正法を誹謗し、義を殘ひ善を捐し、刑人あるを見れば、すなはち欣び、すなはち奔り、自ら拜し自ら禮し、以て宗の本懐と爲す、邪法にあらずして何ぞや、實に神敵佛敵なり、急に禁ぜずんば後世必らず國家の患あらん、殊に號令を司つて之れを制せずんば、却て天譴を蒙らん、日本國の内、寸土尺地も手足を措く所なく、速に之れを掃蕩せよ。」

かくて嚴重なる吟味を以て切支丹教徒を探索し、終に切支丹大名たりし高山右近、内藤如安等を呂宋に追ひ、且つ日本國民をして悉く何れの寺院かの檀徒たらしめ、「此者は當寺の檀那に相違なし」との寺請狀を出さしめ。特に切支丹より改宗したるものにはシユラメントの起請とて、

「私事、何年何月より切支丹に候得共、何年の御法度よりころび申し、今は何宗にて候後

宗判制度

々末代に至るまで切支丹に立ち歸ること仕まじくと認め、最後に

「元の切支丹に立歸るに於ては、上は天公でうす、さんたまりやを始め奉り、諸のあんしよの御罰を蒙り、死してはいんへる野といふ獄所に於て、諸の天狗の手に渡り、永々五寒三熱の苦みを受け、重て又現世にては白癩黒癩の重病を受くべく、仍ておそろしきゆらめんと如レ件」

と誓はしめ、踏繪と稱して基督若くは聖母マリヤの像を踏ましめて其の信否を吟味する等百方手を盡くして之れが絶滅を計り、終に彼等をして敢然戈を取つて徳川幕府に反抗する天草一揆を起し、幕府の大軍を引き受けて征討使板倉重昌を戦死せしめ、次で來れる松平信綱も容易に陥る能はず、蕞爾たる島原城によつて「唯だ教法に殉ずるのみ」と之れを死守し、寛永十四年より翌十五年に亘る二百餘日の對陣、糧食彈藥の盡くるに及びて漸く落城するに至つた此意氣は益々幕府をして切支丹を恐怖せしめ、いよく其の禁遏を嚴にし、寛永十五年九月を以て、

禁制の行

「伴天連門徒、累年御制禁たりといへども、斷絶するなく、今度九州に於て惡逆を企て畢んぬ。これによつて諸國相改め、彼の宗門徒これありと訴人いたし候族は、たとひ同宗なりとも、其の科を宥され公儀より御褒美下さるべき旨仰せ出さる」云々と達し、

- 一、ばてれんの訴人 銀子二百枚
- 一、いるまんの訴人 同百枚
- 一、きりしたんの訴人 同五十枚又は三十枚、訴人によるべし

右訴人致し候輩は假令同じ宗門たりといふとも、其の宗旨をころび申出に於ては其の咎を許し、御褒美御書付の如く下さるべき旨、仰せ出さるゝもの也。

とし、斷乎、西葡二國の船舶の入航を禁じ、僅に許したる支那並に和蘭陀に對しても、

「切支丹宗門の儀、堅く御制禁の上、いよく其の旨を守り、彼の法を弘むるもの乗せ來るべからず、違背いたし候はゞ其の船中悉く曲事たるべく、自然隠くし乗せ來るに於ては同船のものたりとも、之れを申し上ぐべく急度、御褒美下さるべきもの也。」

切支丹と鎖國制度

と達し、且つ和蘭陀よりは「蘭人御條目」とて

「和蘭陀事は御代々日本と商賣致し候様に仰付けられ、毎年長崎へ着船仕候、此より以前仰付られ候如く、切支丹宗門と通用仕間敷候、若し入魂いたすの由、何れの國より申上げ候ば日本渡海御停止成さるべく候」

又

「相替らず日本と商賣のため渡海仕度存じ奉り候へば、切支丹宗門の義に付て聞し召されて然るべき義、之れあるに於ては毎年和蘭陀船渡海の事候間、屹度長崎奉行まで申し上ぐべく事」

と誓はしめ、たゞ此和蘭陀を世界の耳目として之れを通じて西洋事情を知るの外、先きに和蘭陀と共に渡航を許されて居つた英吉利は和蘭陀人との競争のために日本を撤退し、其後延寶元年再び來りし時には英王チャールス二世が日本が入航を禁ぜし葡萄牙の王妹カテナと結婚せるを口實として之れを卻けたから西洋とは全く和蘭陀一國のみとの交通となつた。

### 五 海外發展の阻止

倭寇以來、日本人の海外發展は異常なものであつた。特に外よりは西人の來往となり、内は國內統一せられて海上の安全も亦保障せられ、豊臣秀吉が朱印を捺したる特許狀を與へて貿易に従はしめしより其の朱印船は支那近海より遠く印度支那方面に及び媽港マカオは勿論暹羅、安南、柬埔寨、呂宋、臺灣等既に西人の割據占領せる地方と往來し、其の地方地方に根據地を有し、暹羅のアユチャ、安南のフエフオ、呂宋のマニラ等には日本町を造て居住しつゝあつたので、其の發展著るしく豊臣秀吉は夙に此方面に眼を注ぎ、朝鮮を征伐して、大明に入り更に進んで南洋、印度にまで雄圖を進めんとした計畫をも胸中に描いたと云はるゝほどで、日本人の世界的眼光は頗る大なるものがあつたのである。不幸、鎖國の政策はこれを阻止し、僅に濱田彌兵衛が臺灣に於て和蘭陀人の暴横を懲らし、山田長政が暹羅に入つて偉功を立て國賓を以て遇せられた如き一二の例を史上に遺すのみとなつたのである。若し徳川氏にして國を鎖すことなからしめば、日本の植民地は沿岸到る處に隆昌を

海外發展  
の氣宇

極め早くも太平洋上に雄視して居つたであらうと思はるゝ。

しかも徳川氏の鎖國政策は徳川氏自衛の策としては眞に已むを得ざるに出でたので、彼れは所謂切支丹大名の外國と通じて徳川氏に叛かんことを恐れ、且つ其の教義が徳川氏の國內統一策と相悖るあるを見、之れを禁ずるの已むなきを認むると共に、外國との交通は之れを絶滅し得る所以にあらざるを知つた。それは豊臣秀吉禁制以來も續々其の信徒は増加し、ザヴィエル渡來以後秀吉が禁制せし時までには受洗せし者四十五萬人、其後に於て受洗せし者三十萬人を越え、三代將軍家光の迫害最も熾烈なりし時に於てさへも二萬五千人の受洗者を出すの状態であるから、其の根源たる外船の渡來を禁ずるにあらざれば其の目的を達し難きを以て終に通商貿易を犠牲に供して鎖國を斷行したので、其の鎖國は頗る徹底し、我が商船にて外國に漂着したのも五年を過ぎて歸り來れるものには上陸を許さず、よし五年以内なりといへども、外國に於て住宅を構へたるものは死罪に處すとし、寛永十三年には更に申令して外國へ私に渡海するものは死罪、又外國に居住するものに書信の贈答を爲すものも死罪、外國人の子孫は悉くこれを媽港に追ひ、且つ日本人にても外國住居

東海に孤  
立す

の者の子は其の國へ追放すると定め、内の者は全く外へ出でず、外の者は全く内に來らざらしめ、僅に許されたる和蘭陀人さへも、これを長崎の一角たる出島に封鎖し「故なくして和蘭陀出島より出る事」を禁じ容易に邦人と接觸せしめなかつたから、事實上日本は西洋との交通を斷たれ、復び西洋と相識らざる昔に還元したのである。

天文十二年葡萄牙人の初めて鐵砲を傳へしより、斷然外國貿易を禁ぜし寛永十六年（西曆一千六百三十九年）まで九十六年、其の間の交通によつて我が受けし世界知識は決して尠少ではなかつた。其の一例としては早く一千五百九十年ワリヤーニの渡來と共に西洋活字印刷機を齎らし別に日本字を凸形に鏤刻する工人數人を伴ひ肥前の加津佐、天草、長崎等で國字又は羅馬字を以て宗教、語學に關する幾多の典籍を出版した事實によつても推すことが出来る。若し其れ日常生活に於ては、「長崎市史」に

「長崎方言のうちの外來語にジバン Jibao 襦袢、カツバ Capa 合羽、メイヤス Meiyās (葡語) メリヤス Medias (西班牙語) カルサン Carcao 輕衫など言ふ言葉があるのは衣類に及ぼせる影響を證明するものと謂はねばならぬ。またバン Pao カステラ Pao de

西洋文化  
の渡來



castilla ポーロ Polo コンベイトー Confeitos アルベイ Alfeloa ヒカド Picado ヒリュ  
ウス Filhoses テンブラ Tempero チンダ酒 Vinho tinto など食料品や飲料、ハーカ  
Faca ナンプ Copo フラスコ Frasco など食器什物などの言葉は食品、飲料、食器、什  
物などの長崎風俗に及ぼす影響の一斑を示すものと考へたい。織物の名稱として擧ぐべ  
きは夥しいのであるが、サラサ Saraca ハロード Veludo ランヤ Raxaなどは我が邦で  
普く用ひられ、寧ろ歸化語たるの觀がある、南蠻黒船の舶齋した織物が衣類其他に用ひ  
られたことなども決して遺却してはならぬ。」

といへるにても推すことが出来、今日日常必需品として算せらるゝ砂糖も此時代の輸入で  
あり、其の甘蔗の我が國に栽培するは慶長年間大島の支那海岸に漂着して其の種苗を持ち  
歸りしに初ると傳へ、烟草も亦其の原名を今に存する如く同年代頃で、烟管は西班牙語、  
管の義、羅字は安南の西南老撾國の竹を用ひしに初るといひ、其他南瓜、玉蜀黍、蕃椒の  
類、擧げて數ふることが出来ない。これらは幸に鎖國以前に早く我が國に栽培せられて不  
自由を感じざるに至りしも、西洋日新の科學的知識が此爲めに其渡來を杜絶し日本をして

世界文化に遅るゝこと二百有餘年に至らしめしは、日本人の海外發展阻止と共に返すくゝ  
も遺憾な次第である。

### 第三節 鎖國日本と世界

#### 一 西力東侵し來る

寛水十三年（西曆一千六百三十六年）商船の外航を禁じてより安政元年（同一千八百五  
十四年）の外國との和親條約訂結まで二百十八年、我が國は全く西洋との交際を絶ち、僅  
に和蘭陀より傳聞することによつてのみ世界の大勢を推斷し、超然として東海の表に泰平  
を謳ひつゝあつたのである。しかも其の間に於ける世界の變轉は甚しく、事情は刻々我が  
日本に逼迫し來るを知らなかつたのである。

曾ては豊臣秀吉をして大軍を擁して其の征討を企てしめし隣國支那の明亡びて清新たに  
滿洲より起りて四百餘州を統一し、日本人を母とし、日本に生れたる鄭成功の獨り臺灣に

據つて明の遺業を復せんとして來援を請ふをさへ拒絶して一意、事を外國と構ふるを避け、専心國內の平安を計りたる徳川幕府は遠き西洋の興亡に關しては全く無關心であり、且つ沒交渉ならんことを之れ努め、其の後何れの國より通商を求め來るとも斷然祖法嚴守の名を以て卻け、久しく日本を世界の歴史より孤立せしめたのである。されど我が日本の四周を繞るの水は洋々として世界の各地に通ず。彼等の長く日本に迫り來らざりし所以は、寧ろ彼等の間に互に牽制する所があつたからである。

試みに海上に於ける彼等の興亡を見んか、豊臣秀吉が切支丹禁制を斷行し葡西人を追ひたる天正十五年(西曆一千五百八十七年)の頃までは西班牙全盛の時代にして國王フィリッポ二世は其の繼嗣なきに乗じて葡萄牙王を兼ね、東西に亘る世界の各地に其の國旗の翻るを見ざるなきの勢ひであつたが、海上權は漸次南歐より西歐へと移り、一千五百八十八年、英吉利が和蘭陀と協力して西班牙の無敵必勝艦隊(Invincible Armada)と稱せらるゝ規模壯大なる海軍をドーヴァ海峡で撃破せしより西班牙の勢力は頓挫し、舊教の傳播力も大に阻止せられ、新教國たる英、蘭二國が海上權を掌握するに至り先づ東洋方面に力を伸べた

海上に於ける西洋の興亡

和蘭陀と英吉利

ものは和蘭陀で、ジャバ、スマトラ、各地に於て葡萄牙人を追ひ印度地方の貿易を獨占し、一千六百二年には和蘭陀東印度會社なるものを設立して貿易に従事すると共に武裝の艦隊を以て其の勢威を示し、一千六百十九年にはジャガタラにバタビヤ府を開いて之れを貿易の中心として活躍し、我が日本にも此地より往來したのである。これに對して英吉利も決して黙視するものではない。和蘭陀人が東洋の産物特に香料類の如きを英國に賣るに暴利を貪り、もと一斤三シルリングなりし胡椒を六シルリングに上げ、更に八シルリングにまで高めしを以て倫敦の商人等は蘭人の手を経ずして直接印度と貿易を開かんことを計り、女王エリザベスの許可を得て英國東印度會社を設立し一千六百一年第一回の航海を試みて巨利を博し、東印度會社は益々隆昌を致し一千六百十二年印度大陸に手を下し、大陸に殘喘を保てる莫臥兒帝國の許可を得てこゝに根據を得たが佛蘭西も亦印度貿易の利を看取し、一千六百四年に東印度會社を立て、印度の富源は當時重商主義に傾き貿易の利を海外に得んとする歐洲各國爭奪の標的となつたのである。しかも各國の國民性は其の間に窺はれ、史家の夙に看破せるが如く葡萄牙人は暴力を以て征服と改宗とを強ひしが爲めに土人の反

感を買ひ、和蘭陀人は専ら獨占を志して他の侵入を拒まんとせしが爲めに警備に便なる島嶼に於ては其の目的を達せしも尨大なる警備を要する大陸に於ては成功せず、佛蘭西人は本國政府の方針確定せず國民も亦冷熱甚だしかりしが爲めに忽ちに得て忽ちに失ひ、一時はデウブレーの如きあつて英人を壓迫して勢威を振ひしことあるも、本國政府に召還せられて其の志を得ず獨り英吉利のみ忍耐の力を以て終始一貫着々として計畫を進め、クライブの如き英傑出でて終に會社をして領土を印度に有せしむるに至り、一千七百五十八年を以てベンガル知事として勢力を扶殖し、次で同七十三年英國政府は印度管轄法を定め、ワールン・ヘスチングスを以て總知事とし、一千八百五十七年莫臥兒朝を亡ぼし翌五十八年には東印度會社の手よりこれを政府に收めて其の直轄とするに至つて世界の富源は英國の手に歸し、更に一千八百八十五年には緬甸を略して英領印度の一部とし、益々擴大しクライブの初めて領土を得しより約百年、我が文化に深き關係を有する佛教の故地が此の如くに變化する間、日本は殆んど知る所なかつたのである。

支那の清朝も亦一種の鎖國政策を執つて葡萄牙人の澳門に居住し、他の西洋人が僅に廣

東地方に出入するの外は之れを許さなかつたが、英吉利が印度に勢力を得るに従ひ、力を支那方面に伸べ、其の東印度會社は最も利益ある阿片の輸入を企て、清國政府は其の爲めに人命の耗損甚しく、且つ資財の濫出多きを憂へ、斷然之れを禁じたるも、英吉利人は之れに應ずるなく、清國政府の其の阿片を燒却せるを名とし、艦隊を率ゐて舟山島を占領し、廣東、厦門等を封鎖し、楊子江に入りて上海を略し、南京に迫り、終に一千八百四十二年の南京條約によつて廣東、厦門、福州、寧波、上海の五港を開かしむると共に英吉利は多大の賠償金と香港の地を割讓せしむるに至つた。此一戦は西洋人をして支那の與みし易きを知ららしむると共に、支那人をして西洋の武器の精銳を知らしめ、これを契機として西洋各國は續々支那と通商條約を訂結し、從來清國の監督の下に澳門（媽港）に居住して貿易の權を收めたる葡萄牙は英國の香港を有せし例に慣ひて清國税關の撤去を要求し、後、一千八百八十七年終に正式に割讓せしめた、これより先き英吉利は清國の官吏が妄りに英吉利船アロー號に入りて清人の犯罪者を拿捕せしを名とし、佛蘭西は宣教師を殺せしを口實とし兩國軍聯合して北京を攻落して露國公使イグナチーフの調停により其の兵を止め

多大の償金の外、牛莊外六港を開き、且つ英佛兩國が公使領事を支那に派すること、基督敎宣布の自由を許す一千八百六十年の北京條約を訂結するに至つた。

此イグナチーフの調停は必らずしも清國を幸ひするものではなかつた。これによつて露西亞は極東經營に一步を進めた。露西亞は蒙古侵入以來殆んど二百年、欽察汗國の支配下にありしが一千四百八十年に至りモスクバ公イバン三世汗國を亡ぼして東羅馬帝國の後繼を以て任じ傳來の二頭鷲の旗章を襲用し、其の子イバン四世に至りて初めてザー(Czar)と稱し西比利亞を征服し大に國威を振ひしも、其の後國內亂れて國勢大いに衰へしが一千六百十三年ミカエル、ロマノフの國內を平定するに及びて露西亞帝國の基礎確立し、東方侵略の手は勢ひ清國と衝突せざるを得ず、一千六百八十九年のネルケンスク條約により黒龍江の支流ケルピチから外興安嶺を以て兩國の國境を定め、其の北を露領とし、露西亞は西比利亞よりカムチャツカ、並に北米アラスカ方面に手を着け、一千八百五十一年にはニコライスク、同五十三年にはアレキサンドルスクを開き、同五十四年の愛暉條約により黒龍江左岸一帯の地を露領に歸し、着々南下して來たのが、今、イグナチーフは北京條約調

露西亞の  
西比利亞の  
經營

停の報酬として烏蘇里江東の地を割讓せしめて一千八百六十年には其の南端に浦鹽斯德港を開き日本海を隔て、我が日本に隣りするに至つたのである。ロマノフ王朝の起りしより二百四十七年、徳川二代將軍の慶長十八年から十四代家茂の萬延元年に至る間、露西亞の膨脹此の如くにして日本は何の發展をもなさなかつたのである。發展せざりしは致方なしとするも、最早、他國の發展を袖手傍觀して居ることの出來なくなるまで自家頭上に逼迫し來つたのである。

## 二 西洋學術の輸入

國を鎖して二百有餘年、日本は決して世界の事情に盲目ならんことを努めて居つたのではない。毎年長崎の出島より江戸に參觀し來る和蘭陀甲必丹を通じて之れを聞かんことを求め、且つ日進月歩の近代學術に就て知らんことを望んだ。慶安三年、和蘭陀の本國船來るや幕府は其の船員を江戸に召して發砲攻城の法を問ひ、北條正房、由利安年の二人に命じて其の所説を筆記して初めて西洋の兵學を傳へ、元祿年間には長崎の通辭たる西玄甫、

鎖國時代  
と西洋文  
化

檜林豊重の和蘭陀醫術を學習するを聞き之れを擢んで將軍の侍醫に擧げ、長崎にあつて天文、地理を修めたる西川如見は享保四年、江戸に召されて八代將軍吉宗の下問に答へ、如見の著たる「華夷通商考」「天文義論」等は新知識の書として歡迎せられ、幕府の儒官新井白石は江戸に來貢せし和蘭陀甲必丹に就いて聞く所に基き「西洋紀聞」「采覽異言」を著はし断片的ながらも世界の事情は我が國に紹介せられ、吉宗が享保五年を以て從來一切洋書の輸入を禁じ且つ文字の學習をも禁じたるを改め、技藝の書にして宗教に關せざるもの輸入を許し、元文三年書物奉行青木文藏をして和蘭陀甲必丹の入貢毎に其の通辭に就て文字の學習を命ぜしより、從來言語のみにて文字の學習を許されずして、非常に不便を感じし長崎通辭も亦漸く蘭書を學び得るに至り、泰西知識の輸入はこゝに一段の光を認むるに至つたのである。

## 「蘭學事始」

青木文藏が毎年入貢の和蘭陀人を通じて學びし所は五年を経て僅に五六百字に過ぎなかつたが、これを基礎として「和蘭文字略考」「和蘭語譯」等を著はし、此文藏に師事したる前野良澤は長崎に遊びて「辭書」並に「醫書」を求め未だ之れを讀むに至らざるも中にターヘル、アナトミヤ」といへる解剖學の書あり、精細に内臓を圖示するを見て夙にこれを読み得んことを望みしが、偶ま學友杉田玄白も亦此書を藏し其の圖を見て大に感ぜるを以て二人相謀りて之れを實地に檢せんと欲し、明和八年、幕府醫官に、罪囚の死體解剖を命ぜらるゝを聞き、便宜を求めて之れが參觀を乞ひ、其の從來漢法醫書の粗雜なるに反し、此「ターヘル、アナトミヤ」の精細にして悉く適合するに驚き、これを翻譯して世に示さば如何に人命救助の上に功あるべきかを思ひ、慨然として僅に五六百字の蘭語の知識を以て此解剖學の翻譯に従事したので、其の間の苦心は實に想像以上のものであつた。杉田玄白の「蘭學事始」の序に其の事を記して、

「扱て此書を読み始るに如何やうにして筆を立つべしと談じ合ひしに、とても始より内象の事は知れがたかるべし、此の書の最初に仰伏全象の圖あり、これは表部外象の事なり、其名處は皆知れたる事なれば、其圖と説の符號を合せ考することは取付きやすかるべし。圖の初とはいひ、かたゞ先づ之れより筆を取り初むべしと定めたり」と人體外面の圖によりて其の名詞を考へ、それによりて解説を考へ、さて

「其の頃は「デ」の「ヘット」の又「アルスウェルケ」等の助語の類も、何れが何やら心に落着て辨へぬ事故、少しづつ記憶せし説ありても、前後一向にわからぬ事ばかりなり、譬へば眉といふものは目の上に生じたる毛なりとあるやうなる一句、彷彿として長き日の春の一日にも明らめられず、日暮るゝまで考へ詰め、互ひににらみ合て僅か一二寸の文章一行も解し得ることならぬことにてありしなり。又或る日鼻の所にて「フルヘツヘンド」せしものなりとあるに至りしに此語わからず、これは如何なる事にてあるべきと考合しに、いかにせんやうなし、其頃「ウォールデンブック」(釋辭書)といふものなし。やうやう長崎より良澤が求め歸りし簡略なる一小冊子ありしを見合たるに「フルヘツヘンド」の譯註に木の枝を断ちたる迹、其迹「フルヘツヘンド」すといふ様によみ出せり、これは如何なるべくと、又例の如くこじつけ考へ合ふに辨へかねたり、時に翁(玄白)思ふに木の枝を断りたる迹、愈えて堆くなり。又掃除して塵土あつまればこれも堆くなるなり、鼻は面中に在りて堆起せるものなれば「フルヘツヘンド」は堆といふことなるべし。然れば此語は堆と譯しては如何といひければ、各々これを聞て甚だ尤なり、堆と譯

さば正當すべしと決定せり、その時のうれしさは何にたとへんかたもなく、連城の壁をも得し心地せり云々」

と、あるにても其の苦心は察せらるゝ、かくて四年の歳月を経て安永三年(西曆一千七百七十四年)に至り「解體新書」といふ一部四冊の刻本が出来たのが我國最初の解剖學の翻譯書である。

我等が冗長を厭はず、「蘭學事始」を引用して此事を詳叙したのは、我が先覺者が如何に苦心して新知識輸入に努力せられしかの蹟を尋ねて現代人に反省を促すの一助たらしめんがためである、此先覺者の苦心ありたればこそ維新後泰西の文物輸入せらるゝに際し之れを咀嚼するの素地が養はれつゝあつたのである。

此書を契機として従來外科のみ傳はりし西洋醫術も新に内科を傳ふることとなり、次で宇田川玄隨は和蘭陀内科の書を纂譯して「内科選要」十八冊、語學の方にては良澤の門に學びし大槻玄澤の「蘭學階梯」玄澤の門に學びし稻村三伯の和、蘭對譯の辭書たる「波羅麻和譯」あり、同門山村才助は「萬國地誌」を、同橋本宗吉は「醫事方函」「新譯地球圖」

先覺者の  
苦心

を著はし、爾來蘭學大に起り、諸種の翻譯書相次いで西洋の新知識は刻々に我が日本へ紹介せらるゝに至り、其の間には和蘭陀より幕府に呈せし天球儀、地球儀の用法を命ぜられたる長崎の通辭本木榮之進の如きは其の命を受くるや、每朝神に祈りて「我が家世々和蘭陀通辭として俸祿を受け、我れに至つて歐文讀習を許され今此命を拜す、縱令身命を失ふとも辭する所にあらざれば願くは此成就と護らせたまひ」といひ、苦心慘澹して寛政五年「二球儀用法」の譯書十冊を上り、身心疲勞して翌年終に死せしが如き悲壯事をも傳へられるのである。其の他平賀源内が早くも電氣機械を傳へ、司馬江漢が洋畫の筆法を傳へたる等、我が日本人は決して歐洲新知識に無關心ではなかつたのである。

更にこゝに一言すべきは日本人をして傳習に優れて獨創の才なしとするの謬見である。徳川三百年、すべて傳統を貴んで相變らずを旨とし、發明發見を許さなかつたから獨創的な新事物の發明を見ることが出来なかつたが、一切科學の基礎となるべき數學は寛永十九年即ち一千六百四十二年、泰西科學の泰斗と云はれたる引力發見の第一人者ニュートンと同年に生れたる關孝知によつて初めて筆算の方法を用ひて代數學の應用を發明し、高等數

日本人と  
獨創力

學に入り微分、積分の堂奥を極め諸種の發見をなさしめたので、何等外國の影響を受けざる獨創のものであり、大阪の麻田剛立が暗夜屋上に立ちて群星の位置運行を觀察し、曲折鏡を作り、各種の窺天機を製して實驗十餘年、確然たる天經を定め、後、傳はりし支那譯の西洋新曆書を見るに其の獨創と毫も異なるなく、寛政十年（西曆一千七百九十八年）幕府これを召したが應ぜず門人高橋作左衛門を代らしめし如きは確かに其の一例として算すべきである。此高橋の門に伊能忠敬あり、前後十八年の日月を経て本州、四國、九州の沿岸里程並に大小の群島を測定して精確なる地圖を作り、後年、英國人をして此圖あれば復た沿岸測量を爲すに及ばずと感ぜしめたのである。

## 第四章 明治維新の精神

## 第一節 明治維新の原動

## 一 王政復古の思想

日本の文化史はこれを四季に配當して見ることが出来る。初めて大陸の文化を受けて其の絢爛を競ひし王朝時代は春の如く、武斷政治を以て國內統一を計りし鎌倉幕府の時代は夏の如く、南北朝以後世の紊れに亂れし時代は秋風漸瀝せきれきとして文化衰へ、徳川三百年の鎖國時代は冬籠りにも似て居るのである。此冬籠りの中にも、春の草の早や雪の下に萌え出で、春の風の戸の隙間すきまより吹き入るが如く、内には王政復古の思想次第に擡頭し、外よりは世界の狀勢我れを促し來つて、遂に一陽來復、明治の新時代を現出せざるを得ざるに至つた。

## 文化四季

中世の文  
化と僧侶

内より擡頭し來つた王政復古の思想は先び純日本思想への還元を期する神佛習合や儒佛混淆の分離より其の端を發し來る、先きにもいふ如く我が國の中世に於ては其の文化も、其の思想も、佛教を離れては看取し能はざるほど佛教は其の全般に浸徹した。宗教信仰に於て佛教を中心として神佛の習合が行はれ、道德の上に於て儒佛が融合包容せられし如く文化はすべて佛教化した。それは當時外國文化の輸入者は道元禪師の隨伴者加藤景正によつて陶器(瀬戸焼の祖)の製作を聖一國師の隨伴者滿田彌左衛門によつて織物(博多織の祖)の進歩を傳へ來りし如く主として禪僧並に其の隨伴者によつてなされたばかりでなく、國內は干戈倥傯くわうぜんにして文事は全く僧侶の手に委ねられ、特に兵仗と絶縁せる禪僧は専ら學事に勤めたので學がくに志す者は寺院に入り僧侶を師とするの外なかつたので、「寺入り」「寺小屋」の名漸く此時代より生じ、其の教科書とするものも「いろは」歌(弘法大師)實語教(同上)童子教(五大院安然)庭訓往來(玄惠法師)等よし其の著者は後世の假托なるものありとするも、皆な僧徒の手に成つたものに外ならなかつたから、佛教の専門語は次第に民間に流布し、今日尙ほ旦那、機嫌、因縁、普請ふしん、雪隠等の寺院專用語が幾多殘存して居るのである。



## 宋學と僧侶

かゝる状態であつたから其初めに於ては國書を讀まず、佛典を講ぜず、たゞ儒書を専らとして學習すべく建てられたる下野の足利學校の如きも僧侶にあらずんば之れを教ふるものなく、上杉憲實の此學校を修理するに當つて「本朝州學存する者、僅に數あり、僧を以て主と爲す」といへる如く儒學も亦これを保持するものは僧侶であつて、支那に於て儒學に一新紀元を開ける程朱の新學說も夙に禪僧によつて輸入せられ、應仁元年、明に入りて儒學を修め、朱子の新註に就き研究を重ね來りし僧桂庵は文明五年を以て歸朝せるも京都の地、紛亂を極めしを以て去つて九州に入り肥後の菊池重朝の師事する所となり、孔子の聖廟を隈府に建て、薩摩の島津忠昌、使を遣はして之れを迎へ、「大學章句」を刊行して大に斯學の普及を計り、三傳して僧南浦に至れる時、偶ま藤原惺窩の四書の訓點を施すが爲めに明に赴かんとし、薩摩の坊津に來り、此地に和訓あるを聞き、最早渡明の要なしとて之れを書寫して歸り、此惺窩、徳川家康の援助する所となつて朱子學、中央に紹介せられ、惺窩に至つて漸く佛教と絶縁し、其の門人林羅山の家康に重要せられて徳川氏文教興隆の大先達となるに及びて全く僧徒の手を離れ、却て鋒を倒にして佛教を攻撃し僧徒を罵倒す

## 儒教の獨立

るに至り、儒教は儒教としての独自の面目を發揮し、其の朱子學によつて唱道せらるゝ大義名分の思想こそ我が王政維新の一大原動力となつたのである。

## 神佛分離の曙光

儒教が佛教より分離せしが如く神道も亦佛教と分離すべき曙光は室町時代に發し、後土御門天皇の頃、京都吉田神社の神宮卜部兼俱なるもの從來の兩部神道に反して唯一宗源神道を唱へ、神道は道の根本、儒教は道の枝葉、佛道は道の華實であるが、今其の花散り實落ちて其の根本の神道に歸すべきであると佛教との分離を唱道し、其の流を汲むものに萩原重穎あり、其の門に吉川惟足出で

「此日本國は萬國の根本の國なり、凡そ三國の中にて日本は東方なり、萬洲の中には中央なり、さて東方は春なり朝なり、春は四季の始めといふのみにあらず、惣じて萬物の始めなり、故に天地開闢の始めも東方より開けし理の當然なり。」

と説き、我が日本は東方日出るの國、故に神道生々發育の教あり、支那は日の中する國、故に儒教人倫の教を説き、印度は日の没する國、故に佛教寂滅の教ありとして盛んに神道を鼓吹した。此吉川惟足に學び、更に神道を儒教の周易と結合して別に伊勢神道を唱へた

## 神道勃興

## 闇齋と綱齋

外宮の神官度會延佳に就て其の蘊奥を究め、別に「神道五部書」中「寶基本紀」に「神垂は祈禱を先とし、冥加は正直を以て本と爲す」といへるに基き垂が神道を唱へたのは朱子學の大家山崎闇齋である。山崎闇齋に至つて支那傳來の朱子學が日本流となり、佛教と手を離ちたる神道は儒教と相結ぶに至つた。此闇齋は當時の儒者が支那崇拜に陥るを慨し、會て門人の「孔子總大將となり、孟子副將となつて我が日本へ攻め來らば如何」といふ問ひに答ふる能はざるを一喝して「其時こそ孔子を生擒し孟子を斬つてこそ聖人の道を行ふ所以である」とふうたといふ有名な逸話を遺すほど日本的の學者であつた。

此闇齋の門人に淺見綱齋があり、盛んに華夷王霸の辯を爲し、當時の儒者が支那を中華とし自ら我が國を東夷と卑むの愚を嘲り、且つ霸者たる將軍を重んじて王者たる天子を輕んずるを慨き、足、霸者の地たる關東を踏まずと、京都にあつて諸生を教授し、慷慨淋漓、逆つて「靖獻遺言」の著となり、事蹟を支那に借りて大義名分を明にし、頗る士氣を鼓舞した。此綱齋の門人三宅觀瀾等も参加して國民自覺に一大衝動を與へ、我が國體の精華を闡明せられたのは徳川光國の「大日本史」編纂である。「大日本史」は光國が會て「史紀」

## 水戸學

の伯夷叔齊の傳を読み、感奮する所あり、大に修史の必要を感じ大藩の力を以て多くの儒者を集めて着手し、こゝに根柢を朱子學に置き、皇道發揮を中心とする一種の水戸學風を生じ、これらの参加の學者によつて著はされたる栗山潛鋒の「保建大紀」三宅觀瀾の「中興鑑言」等皆な頗る士氣を鼓舞するものであつた。これらと共に朱子學以外に立ち、しかも民間學者の述作として當時の士氣に大なる影響を與へたるものは山鹿素行の「士道」であり、「中朝事實」であつた。これらの學說、これらの述作が王政維新の思想的背景となる大なるものありしは今更ら嗚々の辯を費すを要せぬ。

## 古學復興

此修史の進歩に伴ひ發達し來たものは古學の復興であつた。光國は遠く使臣を難波の下河邊長流並に僧契沖に遣はして萬葉集の註解を請ひ、契沖、爲めに「萬葉代匠記」二十卷總釋二卷を作り、後又「古今餘材抄」を著はして古學復興の先驅を示し、古學は先づ京都伏見稻荷神社の祠官荷田春滿の其子在滿をして國學校の創立を幕府に建言して、

「今の神道を談するもの、これ皆な陰陽五行、家の説、世の詠歌を講ずる者、おほむね、圓頓教儀の解、唐宋諸儒の糟粕にあらずんば則ち胎金兩部の餘涯、鑿穴の妄説にあらず

んば、則ち無證不稽の私言、曰く秘、曰く訣、古賢の眞傳、何くにかある、或ひは蘊、或ひは奥、今人の偽造、これ多し」

といひ、今にして復古の道を講ぜずんば邪正の道を混同するに至らんといひ、此春滿の門に加茂眞淵あり、「國意考」を著はして、神道家が佛教と離れて、儒教と結べる其の儒教をも排斥し、我が敦厚素朴の美風は儒教の東漸によつて失はれたりとし、其の門に學びたる本居宣長は「直毘靈」に於て、

「儒者のたゞ六經などといふ書をのみとらへて、彼國をしも道正しき國ぞといひのゝしるは、いたくたがへる事なり、かく道といふ事を作りて正すは、もと道の正しからぬがゆゑのわざなるも、かへりて、たけき事に思ひいふこそ、をこなれ」と罵り、

「皇國の古へはさるこちたき教も、何もなかりしかど、下が下まで亂るゝことなく、天の下は穩やかに治まりて、天つ日嗣、いや遠長に傳はり來ませり、さればかの異國の名にならひて、いはゞ是ぞ上もなき優れたる大道にして、實に道あるが故に、道てふ言ふな

く、道てふことなけれど道ありしなりけり」

といひ、一切の外つ國振、今様振を排して古學の復興を計り、其の書を読んで感憤し、名簿を捧げて其の門下に列せる平田篤胤は國學の復興と神道の振起を以て終生の任とし該博の識を以て儒佛二教を攻撃し以て復古精神を鼓吹した。

鎖國三百年、外に向ふ眼は閉ぢられて、専ら内に向ひ、國史の回顧、國學の復興となつては自然古風に反せる將軍政治に對して反感を抱かざるを得ず。幕府の基礎漸く搖ぎ來つては勤王の論おのづから起り、復古の説次第に時を得、特に頼山陽の如き文才の士が「日本外史」「日本政記」等の史書を作つて之れを激發せるより機を覗ひ隙を窺ふ志士の精神を鼓舞したことは尠少ではない。若し其れ藤田東湖が「正氣の歌」の劈頭に、

「天地正大の氣、

粹然として神州に鍾る。

秀でゝ不二の嶽となり、

巍々千秋に聳ゆ。

注いで大瀛の水となり、

洋々八州を環る。

發して萬朶の櫻となり、

衆芳與に儔にし難し。

凝つて百鍊の鐵となり、 銳利鑿を斷つべし。

蓋臣皆な熊羆、 武夫盡く好仇。

神州孰か君臨す、 萬古天皇を仰ぐ。

皇風六合に洽ねく、 明德太陽に侔し。

世汚隆なきにあらず、 正氣時に光を放つ。」

といへる如きは皇國精神の發揚として當時の志士が愛誦措かざるものであつた。此内に復古の思想は外に攘夷の觀念となり勤王攘夷の語は維新志士の目標語であつた。しかも此攘夷の何の意義をも有せざるに至つたのは、全く世界の大勢で、此大勢を看取することによつて日本精神は更に再吟味せられざるを得ざるに至つたので、此覺醒こそ明治維新への一大促進と成り來つたのである。

## 二 攘夷と開國

外より來るものは先きにも述べたる西力の東侵であつた。國を鎖して太平を貪らんとす

### 「海國兵談」

る當時の日本へ、此刻々に迫り來る大勢を先づ第一に警告したものは孜々として西洋文化に接觸せんことを求めたる蘭學の徒であつた。仙臺の林子平は夙に經世の志を有し、三たび長崎に遊んで蘭學を修め、「海國兵談」を著はして西北諸蕃は概ね地を奪ひ、疆を開くことを務とし、其の勢ひ益々盛んにして其の我が國に及ぶや知るべし、彼等は海上を行くこと平地の如し「日本は海國なり、海國とは地續きの隣國なくして四方皆な海に沿へる國の謂ひなり、海防の策講ぜざるべからず」と絶叫し、別に「三國通覽」「輿地國名譯」等著はして大に警告する所があつたが、幕府は之れを以て無根の事を誇張して世を騒がし、「公儀を憚らざるの所爲なり」とて寛政三年十二月、之れを江戸に召して蟄居を命じ、其の著書並に板木を焼くに至つたが、子平の蟄居を命ぜられて未だ半歳ならざるに露西亞の使節ラクスマンは日本の漂流民、幸太夫、磯吉を送つて根室に來りて貿易を求め、幕府は使臣を派して漂流民を受取り、貿易は長崎に來るべきことを談じ、幸太夫、磯吉を將軍家齊に謁せしめ、彼等の口より海外の事情を聞き、北邊の跳梁する赤蝦夷即ち露西亞人の危險なるを察し、老中松平定信は沿海の諸蕃に命じて警備を嚴にせしむると共に、自ら草鞋を穿ち

沿海警備

て伊豆、相模、安房、上總の沿岸を踏査し且つ畫工谷文晁をして軍艦の圖を描かしめ、

この船のよるてふ事を夢の間も

忘れぬは世の寶なりけり

と題して幕吏を警め、且つ寛永以來、異國船を見れば直に打ち拂へと命じたるを改め、一應其の來意を問ひ、漂流船ならば薪水を與へて立去らしめ、其の立去らざるに於ては之れを打ち拂へと緩和した。

「北地危言」

此時に當つて海防の論は大に識者の注意を促し、寛政九年、大原小金吾は「北地危言」を著はし、

「當時第一の急務は赤夷の侵掠、海岸御手當にあり、外國船の襲ひ來らぬを恃みに致さず、何時たりとも襲ひ來るを待つの姿にて候」

といひ、これと前後して本多利明は「西域物語」を著はして、

「西域物語」

「日本を以て天下の最良國と爲すの道は、東察加は赤道以北五十一度にて、英國の倫敦と同じく、隨て氣候も同じければ、此に都を遷し、北緯四十六七度にして佛の巴里と同緯

蝦夷地探檢

露國南下

度なる西唐<sup>カウラト</sup>太島に大城郭を築き、山丹滿洲等と交易し、四方に武威をたなびかすにあり」と豪語し、幕府は寛政十年勘定奉行石川忠房等に命じて深く蝦夷地を踏査せしめ、其の一行に加はれる近藤重藏は擇捉島<sup>エトロボ</sup>に渡りて露西亞人の建てたる標柱を抜いて「大日本惠土呂府」の標柱を立て、同十二年には伊能忠敬をして蝦夷地を測量せしめ、其の前年同十一年にも、其の翌享和元年にも石川忠房等をして蝦夷地を探檢せしめ、其の一行に加はつた間宮林藏は後に單身樺太の奥地に入り海峽を横ざりて大陸に渡り黒龍江を遡つて滿洲官人と筆談を交へ、復び黒龍江を下りて樺太に歸り、これまで半島なりと思惟せられし樺太の島なることを確めて間宮海峽の名を遺す等北邊の踏査怠るなかりしも、露國南下の計は或はレザノフの來航となり、其の部下の樺太に於ける掠奪となり、次でゴロウニンの捕縛となり、事態はいよく紛糾し、杉田玄白をして其の「野叟獨語」に於て、

「其の先祖の餘光とは乍レ申、二百年近く代々高祿を頂戴し、諸人の尊敬を受け、大名の小名のとあがめらるゝ御身分なれば、御國政のくじけざる様に精力を盡し、上の御用不レ立は其身々々の壹分不<sub>三</sub>相立一の御時節也、しかれば如何してと考ふるに、交易御免有

か、船を引受合戦して打潰すかの二途より外は無き事也」と更に露西亞を説いて、

「ヲロシヤは常に軍事を操練し、扱國は若し人にて云はゞ血氣壯の最中にて唐土にても每度手ごりせし韃靼にも切勝、清朝とも戦ひしと也、清朝の英主と呼ばれし康熙帝も、數度軍馬を發して戦ひしに勝敗終に不定、詰る所はしつこきに退屈し、遂に和議を結び、韃靼地の邊境黒龍江といふ所に、分界を立て、兩地の限りとして、今は互に交易をなすとなり、彼れは其兵を練りに練りし事故、さしもの康熙帝さへ右の形勢に聞る也、然は右の如く老廢せし我國の弱兵を以て、其強兵に差向ひ合戦せんこと如何あるべきや、是等の事辨へしらぬ人は、船軍は格別、陸に上り手痛く合戦せば、手元勝負に至りなば我國兵には及びまじと、申し誇る人もあるべき也、如何とも天正慶長の頃迄の武風逞き兵ならばさも有べきなり、今衰弱の至極の世に至り、たま〜昔物語を聞はつりし斗りにて、恐らくはあてになるべからず、是ぞ老人の口斗り達者にて立居不自由なるを打忘れ、筋骨のよわりたるに心付ず、元氣立てする類なるべし、是又破を取るの端と云べし、能く

彼是と考合、事を計ふ事專一の時節ならずや」

と、太平懦弱の武士の到底敵し難きをいひ、

「何れにても一先づ、交易御免可然と存する處なり、しかし我國內の人御賦甲斐なき様に存する者も有べけれど、夫は内々の事、固より上にも御好きな事、世にも聞知る事ながら、時勢により爲萬民、不レ得ニ止事御許し被レ遊よしの御實意下々へ通りなば、諸人 모두 難レ有事と可レ奉レ存候事なり」

といひ、開國を立言せしむるに至つた。我れが彼れを見る此の如く、而して彼れの我れを見るは久しく我れに捕はれて松前の獄に投ぜられしゴロウニンが歸來筆にせる「遭厄日本紀事」に我が國民性を評して、

「人口饒多なる上に、鋭敏にして能く活動し有爲にして外人の長を採るに躊躇せざる此國民にして若し我がテロ大帝の如き偉大なる君主の支配する所となりたりと假定せんか（中略）短日月の間に容易に東洋の支配者となるに至らん」

と云ふ、

「又若し日本人にして歐洲の文化を輸入して其の政治に則りて内政の改善を計るあらんか、支那も亦之れに模倣すべく、此兩大民族が我が歐洲の政局に向つて洵に由々しき影響を及ぼすべきは疑ひを容れざる所なり」

といひ、略ぼ我れを領會するものが存したのである。

東北、露西亞の逼迫此の如くなる間に西南英佛が支那を壓迫しつゝある風聞も亦蘭學者の耳朶を通じて國民に警告せられたのである。此時に當つて歐洲の天地は佛蘭西革命に次ぐにナポレオン一世の風雲を席卷して威を全歐に振ひ、我れに親善し來れる和蘭陀の如きも一時其の勢力下に屬し到る處の植民地も佛蘭西國旗の下に服従し渾圓球上獨り我が長崎に於ける出島居留地に於てのみ和蘭陀國旗の翻るものがあつたのであるが、風雲漸く收りし一千八百二十三年澳國の博物學者シーボルト和蘭陀人として我が國に來り特に官許を得て諸生を教授し、歐洲の學術は實に此シーボルトの力によつて我が國に輸入せられしもの實に多いのである。シーボルトの和蘭陀甲必丹に伴ふて江戸に來るや、當時蘭學興隆の際とて就て聞くもの多く、こゝにも多大の啓發を我が國民に與へたのである。先きに長崎に

シーボルト

「夢物語」

往いて其の門に學びし高野長英、小關三榮等が渡邊華山と共に組織せる尙齒會はたゞ從來の蘭學者の學術のみを傳習せるに反し、これを中心として時事を論じ、頗る政治的色彩を帯びて居つたので、一千八百三十七年、米船のモリソン號の漂流民を送り來るに對し、幕府が「右體蠻夷の奸賊に對しては接待を設くるの筋にあらず」として卻けんとするを聞き、これ船にあらずこれを英國東洋總督モリソンなるべしと誤信し、これを以て國家の大事故として長英は「夢物語」を著はして、

「イギリスは、日本に對し敵國には無之、謂はゞ付合も無之他人に候、今般漂流人を憐み、仁義を名として、わざ／＼送り來り候者を、何事も取合不申、直ちに打拂に罷成候はゞ、日本は民を憐ざる不仁の國と存候。若又、萬一その不仁不義を憤り候はゞ、日本近海イギリス屬島夥しく有之、始終通行致候得者、後來海上の寇と相成候はゞ、海運の邪魔に相成候哉も難計、左候はゞ自然國家の大患にも相成可申候。たとへ右等の事無之候とも、右打拂に相成候はゞ、理非も分不申暴國と存じ、不義の國と申觸られ禮義國の名を失ひ、是より如何なる患害萌生候哉も難計、或は又頻りにイギリスを恐るゝ様にも

考付候は一國內衰弱仕候様にも推察仕候、乍恐、國家の御武威も捐候様に相成候半と恐れ多くも被考候。」

「慎機論」

と説き、華山は「慎機論」を著はして、

「五大洲中、亞墨利加、亞非利加、亞斯太羅利の三洲は、既に歐羅巴の有となり、亞細亞洲と雖も、僅かに我國、唐土、百爾西亞の三國のみ、其の三國の中西人に通信せざるものは、唯我國存するのみ、萬々恐れ多きことなれども、實は杞憂に堪へず。論すべきは、西人より一觀せば、我國は途上の遺肉の如し。餓虎飢狼の願はざるを得んや。もし英吉利、交歡の行はれざるを以て、我に説て言はん「貴國永世の禁固く侵す可からず、されども我邦初め海外諸國、航海のもの、或ひは漂蕩し、或ひは薪水を缺き、或ひは疾病のもの地方を求め、急を救はんとするに、貴國海岸、嚴備にして航海に害なること、一國の故を以て地球諸國に害あらんことは、同じく天地を戴踏して、類を以て類を害ふ。豈これを人と謂ふ可けんや。貴國に於て能く此大道を了解して、我天下に於て望む所の報を聞かん」と申せしとき彼が從來疑ふ可き事實を擧げて、通信すべからざる故を諭さん

より外あるべからず。斯くて瑣屑の論に落ちて、究する所彼が貪婪の心自ら生ずべし」と説き頗る當路に警告する所があつたが、幕府はこれを以て世を迷はす言として彈壓を加へ、長英を捕縛し華山、三榮をして自殺せしむるに至つたが、しかも鎖國の保ち難く、攘夷の行ひ難きの事情は刻々に迫り、弘化四年和蘭陀のウイリヤム二世は特に使を送つて歐洲の形勢を説き支那に於ける阿片戦争の結果を述べて開國の已むなきを忠告したが、幕府は尙ほ舊態を墨守して改むるなかつた。

### 三 王政復古と開國進取

幕府が如何に表面を糊塗するとも四圍の事情は刻々に迫り、幾もなくして幕府を脅威し國民を警覺すべき一大報道に接せざるを得なかつた。一大報道とは何ぞ。そは外でもない、米艦の浦賀來航である。

一千七百七十六年、大西洋方面たるニューイングランドの地を中心とせる十三州が英吉利の羈絆を脱して獨立せる米合衆國は其の後益々國威を振ひ、終に太平洋岸に進出し、北

米國の發  
展



太平洋に於ける露西亞の活動に對抗し、東洋貿易に一大飛躍を試みんとし、一千八百四十四年には澳門（馮港）の郊外黃夏に於て支那と通商貿易を結び先きにモリソン號を遣はして我が日本に通ぜんとせしも要領を得ざりしを以て、一千八百五十二年、提督ペルリを我が國に送りて開國を迫らんとし、途次喜望峰に寄港し、翌年香港に入り、事若し成らずんば英國が香港を占領したる如く、我が近海たる琉球又は小笠原島の如きを占領して太平洋上に根據地を得んとし、琉球に寄り、小笠原島に貯炭所を置き、進んで我が相模の浦賀に入り大統領の國書を齎らして通商を求む、四艘の軍艦威容堂々として灣頭を壓す、幕府驚駭策の出るなく、國民は震撼して流言大に飛ぶ。幕府漸く明年を以て返書を與ふべきを約して之れを歸らしめしも、國論は沸騰して或は攘夷をいひ、或は開國を談じ、幕府は一方國防を嚴にし警備に努むると共に他方には歐米の事情を聴取して策の施すべきなく。かゝる間に一年の日月を過ぎて翌安政元年、前年の四艘の軍艦を十艘とし議容れられれば一戦も亦辭せざるを示す。幕府已むなく三月三日を以て和親條約十二條を結び、下田、箱館の二港を開くを約す。これ實に徳川氏二百餘年の政策の一變であり、既に米に許せるものは

## 米艦渡來

## 條約訂結

英にも露にも許さざるを得ずして、日本は自ら世界の舞臺に押し出されざるを得なくなつて、其の翌三年には蕃所取調所を開いて、専ら海外の事情を調査せしむる等、最早世界の大勢と絶縁するを許さず。しかも幕府は尙ほ國民の耳目を鎖して歐米の事情に通ぜしむるを好まず、密かに米艦に搭せんとせし吉田松陰を罰し、累を其の師佐久間象山に及ぼす如きの愚を演じ益々志士の反感を買ふに至り、舊習墨守の頑固一點張りの攘夷論に加ふるに、此攘夷の名を以て倒幕を計らんとするの徒、呼應し來り、大老井伊直弼の安政五年を以て日米條約に調印するや、其の勅裁を得ざる專斷を詰り、攘夷と勤王とは共に倒幕の標語となり處士の横議甚しく、終に安政六年の大疑獄となつて攘夷派は悉く閉塞せしめらるゝに至り、其の反動は翌萬延元年の櫻田門外血染の雪となつて井伊直弼の暗殺となり、爾來直接行動漸く旺んに、勤王、佐幕の兩黨相殺傷するのみならず、事を外國と構へしめんとして外人の要撃を企つるものあり、幕府は多大の苦心を以て外人の遊歩地域を定め且つ警戒を嚴重にせしも尙ほ其の難に遇ふものあり、爲めに文久三年八月に於ける英國艦隊の鹿兒島灣砲撃となり、翌元治元年九月に於ける英、米、佛、蘭聯合艦隊の下ノ關砲撃となりて、

## 攘夷論の衰微

極端なる攘夷論者も亦外人の精銳なる武器に抵抗するの難きを知らしめ、攘夷の氣運は漸次其の勢ひを潜め來つたが、勤王の聲は益々盛んに、輿論の中心は全く江戸を離れて京都に入り、此處を中心として活躍せる薩長二藩の勢力は幕府を壓し、慶應元年英國公使パークスの江戸に來るや、列國が天皇の一吏員に過ぎざる將軍と條約を締結するの姑息手段を詰り、公使團體を促して將軍に迫りて勅許を受けしめ、以て此條約を有効ならしめんとするに至り、幕府の威信は列國の間にも失はるゝに至つたのである。

## 政權奉還

一切の紛糾は天皇を中心として其の歸結を得るは我が國史の成跡であり、國民精神の樞軸である。英國公使の此提言は我が國體を正當に認識したものといはざるを得ない。しかしながら國內の形勢如何に歸着すべきか未だ容易に知る能はざりしが、我が國體の精華はこゝに啓き、明治天皇踐祚の慶應三年十月十五代將軍徳川慶喜をして、

「臣、慶喜、謹んで皇國時運の沿革を考へ候に、其王綱紐を解て、相家權を執て、保平の亂、政權武門に移つてより祖宗に至り、更に寵眷を蒙り二百餘年、子孫相受け、臣其の職を奉ずといへども、政刑、當を失ふこと少からず、今日の形勢に至り候も、畢竟薄徳

の致す所、慙懼に堪えず候、況や當今外國の交際、日に盛なるにより、愈々朝權一途に出で申さず候ては、綱紀立ち難く候間、從來の舊習を改め、政權を朝廷に歸し奉り、廣く天下の公儀を盡くし、聖斷を仰ぎ、同心協力、共に皇國を保護仕候得ば必らず海外萬國と並立すべく候、臣慶喜、國家に盡くす所、これに過ぎずと存じ奉候」

と上表して政權を奉還せしむるに至らしめたのである。しかも久しく確執したる薩長對幕府の關係は、これで一掃せられずして終に干戈を交へんとするに至りし時、夙に野心を東洋に有せし、佛國皇帝ナポレオン三世は公使レオン・ロッシュをして徳川幕府に好意を寄せ、力を借さんことを申込ましめ、幕臣の中には之れに頼らんことを望んだものもあつたが、勝安房の如き具眼の士あつて斷然これを卻けて、専ら恭順の意を表せしめ、幸に事なきを得たので、佛蘭西は先きに兵を安南に借して越南王の獨立を援け、更に口實を設けて一千八百六十二年に交趾支那を、一千八百八十三年には東京地方を得、終に安南を其の保護國とした歴史を有するので、當時、佛國、兵を借せば、英國も亦默せずして薩長を援け國內を禍亂に陥ること更に甚しきものあるに至りしやも計られぬが、我が國民精神の如

外國の援助を斥く

何なる困厄の場合に當るも牢として抜くべからざるあるを見るべきである。

かくて翌慶應四年正月、勅して、

「従前條約大君ノ名稱ヲ用ユト雖モ、自今以後當ニ用ヒルニ天皇ノ稱ニ換フベシ、而シテ諸國交接ノ職ハ、専ラ有司ニ命ズ」

とのたまひ、同年二月太政官達を以て、

「萬里の波濤比隣之如く相往來し、一時幕府の失錯とは乍レ申、皇國之政府に於て誓約有之候事は、時之得失に因て其條目は可レ被レ改候得共、大體に至り候而者、妄に不レ可レ動事萬國普通之公法にして、今更於ニ朝廷ニ是を變革せられ候時者、却而信義を海外各國に失はせられ、實に不ニ容易ノ大事に付、不レ被レ爲レ得レ止、於ニ幕府ニ相定置候條約を以御和親取結に相成候」

と達して、日本は世界の舞臺に躍出し、こゝに新時代の曉の光は投げられたのである。

## 第二節 維新の宏謨と其の實現

開國進取

### 一 明治維新の宏謨

時代は幾變轉を重ね、其の間世界の興亡を眼前に展開する走馬燈の如くに眺めつゝ、毅然として東海の表に屹立し、幾たびか危機に瀕するも、牢として抜くべからざる國民精神は終に明治維新の大業を成し來つた。明治維新は神武建國の精神への復古であると共に、新時代の大勢に順應すべき最も進歩的なる國容の革新であつた。謹んで明治天皇が慶應四年（明治元年）三月十四日を以て下し賜ひし億兆安撫、國威宣布の御宸翰を拜し奉れば、維新の宏謨、炳乎として明かに、聖旨優渥、千載の下、人を感激せしむるものあるを念はざるを得ない。

「朕幼弱ヲ以テ、粹ニ大統ヲ紹キ、爾來何ヲ以テ萬國ニ對立シ、列祖ニ事ヘ奉ランヤ、朝夕恐懼ニ堪ヘサル也、竊ニ考フルニ、中葉朝廷衰テヨリ、武家權ヲ専ラニシ、表ハ朝廷ヲ推尊シテ、實ハ敬シテ是ヲ遠ケ、億兆ノ父母トシテ、絶エテ赤子ノ情ヲ知ル事能ハサルヤウ計リナシ、遂ニ億兆ノ君タルモ、唯名ノミニ成リ果、其カ爲ニ今日朝廷ノ尊重ハ、

億兆安撫  
國威宣揚

古ニ倍セシカ如クニテ、朝威ハ倍衰ヘ、上下相離ルル事霄壤ノ如シ。カカル形勢ニテ、何ヲ以テ天下ニ君臨センヤ。今般朝政一新ノ時ニ膺リ、天下億兆、一人モ其處ヲ得サル時ハ、皆朕カ罪ナレハ、今日ノ事、朕自身骨ヲ勞シ、心志ヲ苦メ、艱難ノ先ニ立、古、列祖ノ盡サセ給ヒシ蹤ヲ履ミ、治績ヲ勤メテコソ、始テ天職ヲ奉シテ、億兆ノ君タル所ニ背カサルヘシ、往昔列祖萬機ヲ親ラシ、不臣ノモノアレハ、自ラ將トシテ、之ヲ征シ玉ヒ、朝廷ノ政總テ簡易ニシテ、如此尊重ナラザルユヘ、君臣相親ミテ、上下相愛シ、德澤天下ニ洽ク、國威海外ニ輝キシナリ。然ルニ近來宇内大ニ開ケ、各國四方ニ相雄飛スルノ時ニ當リ、獨リ我國ノミ世界ノ形勢ニ疎ク、舊習ヲ固守シ、一新ノ効ヲ計ラス、朕徒ラニ九重中ニ安居シ、一日ノ安キヲ偷ミ、百年ノ憂ヲ忘ルル時ハ、遂ニ各國ノ凌侮ヲ受ケ、上ハ列聖ヲ辱メ奉リ、下ハ億兆ヲ苦シメン事ヲ恐ル、故ニ朕茲ニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ、列祖ノ御偉業ヲ繼述シ、一身ノ艱難辛苦ヲ問ハス、親ラ四方ヲ經營シ、汝億兆ヲ安撫シ、遂ニ八萬里ノ波濤ヲ拓開シ、國威ヲ四方ニ宣布シ、天下ヲ富岳ノ安キニ置ン事ヲ欲ス。汝億兆舊來ノ陋習ニ慣レ、尊重ノミヲ朝廷ノ事トナシ、神州ノ危急ヲ知ラス、

## 五ヶ條の御誓文

朕一度ヒ足ヲ擧クレハ、非常ニ驚キ、種々ノ疑惑ヲ生シ、萬口紛紜トシテ、朕カ志ヲナササラシムル時ハ、是朕ヲシテ君タル道ヲ失ハシムルノミナラス、從テ列祖ノ天下ヲ失ハシムルナリ、汝億兆能々、朕カ志ヲ體認シ、相率テ私見ヲ去リ、公議ヲ採リ、朕カ業ヲ助テ、神州ヲ保全シ、列聖ノ神靈ヲ慰シ奉ラシメハ、生前ノ幸甚ナラン。」  
此御宸翰と共に公にせられたものが所謂「五ヶ條の御誓文」で、新日本の國是はこゝに確立したのである。

- 一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ。
  - 一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ。
  - 一、官武一途庶民ニ至ルマテ各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス。
  - 一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ。
  - 一、智識ヲ世界ニ求メ皇基ヲ振起スヘシ。
- 我國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ、天地神明ニ誓ヒ、大ニ斯國是ヲ定メ、萬民保全ノ道ヲ立ントス。衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ。

## 公議所

從來武家の專制に任されたる政治の形式は、こゝに一變して廣く會議を興して萬機を公論に決し、上下心を一にし、官武一途、庶民に至るまで其の志を遂げ得るの輿論政治は其の端を發し、直に各藩に命じて大藩三名、中藩二名、小藩一名の秀才を選びて之れを中央政府たる太政官へ差出さしめ、こゝに公議所を設け、翌明治二年には更に「諸學校より公議人一名宛相選び、公議所へ差出すべし」と命じて學者を其の中に加へて萬機公論の實を擧ぐるべく着手し、其の後、公議所は集議院と改められ、廢藩置縣の後は之れを左院に屬せしめらるゝ等の變遷を経たが、これ皆な立憲政治への第一歩ならざるはなく、特に二年正月、維新の功勞者たる薩、長、土、肥の四藩が率先して藩の領地を奉還せんことを請ひ、各藩も亦其の例に倣ひ、同六月之れを許されて、七百年來の封建制度は全く一掃せられ、藩を廢して府縣を置き世襲の領主に代ふるに中央政府任命の官吏を以てし、普天の下、王土にあらざるなき王政復古の大業こゝに全く成り、率土の濱亦王臣ならざるなく上下一心、庶民に至るまで各々其の志を遂ぐべき體容へと進み、舊來の陋習は打破せられて天地の公道たる人類平等の大義は先づ二年六月「官武一途、上下協同の思召を以て自今公卿諸侯の

## 藩籍奉還

## 四民平等

## 奴隸解放

稱、廢せられ改めて華族と稱すべし」と達し「諸藩の一門以下の臣隸を士族と稱し、士族以下を悉く平民と稱すべし」と令し、翌三年九月には從來町人、百姓は特別の事情により苗字帶刀御免の者の外は名のみにて姓を許されなかつたのを改めて平民に苗字を許され、少し遅れて四年八月從來平民以下に置かれし階級の賤稱をも撤廢して悉く平民籍に編入せしめられ、同五年十二月には全國募兵の制を設け、從來武士階級のみの特權の如くに思惟せられし兵役のことを四民の男兒滿二十歳に達するものは悉く兵籍に編入する等、四民平等の取扱ひは我が社會機構を公明ならしめ、攘夷の陋習を打破すると共に、外、如何に國際の通義に基き天地の公道を明にすべく努めたるかは明治五年即ち西曆一千八百七十二年に南米秘魯のマリア・ルイズ號が清國澳門より二百餘人の支那人奴隸を購ひて國へ歸らんとして暴風に遇ひ、我が横濱に寄港した際、船中の支那人が虐待に耐えずして窃かに逃れて救ひを我が官憲に求めた時の處置によつて其の一例を見ることが出来る。當時の外務卿副島種臣、神奈縣權令大江卓は堅く人道の大義に據り同船を捕獲して支那人奴隸を解放し去るの英斷を執つた。これに對して秘魯政府は世界の大問題として損害賠償を要求し來りし

も、我は奴隸賣買を以て文明の行爲にあらすとして斷乎これを卻け、終に双方協議の上、露帝アレキサンドル三世の裁斷に托することとし、其の結果、露國皇帝は國際的なる裁斷を下して、

「日本政府の奴隸賣買を以て文明國の美風に背くとして解放を命じたるは正當なり、之れによつて受けたるマリア・ルイズ號の損害は日本政府の負擔すべきものにあらす。」

といひ、以て我が國際正義を中外に宣揚した。これ實に米合衆國が南北戰爭を経て奴隸解放に決した一千八百六十五年を距る僅に七年の後であつたのである。

若し其れ知識を世界に求むるの一事に至つては致々として之れを努め、幕末既に各藩の留學生を海外に送るあり、明治政府となりては續々之れを派遣し、更に外國の教師並に技師を雇ひ來り、多額の費を吝まらずして外國文化の移植に務め、文明の利器の應用に熱心なりしかば其の發明年代と傳來年代との比較によつても明知することが出来る。曾て拙著「現代思想の史的考察」に於て語りていふ。

世界知識  
の輸入

「蒸汽力の機械應用は第十八世紀の終りにゼームス・ワットの發明に基くことは今更ら申

すまでもありませんが、第十九世紀の初めに當りまして亞米利加人ロバート・フルトン之れを汽船に應用して從來の帆前船に代へ、英吉利人ジョルジ・スチブソン、之れを陸上に用ひて汽車を造り、一千八百十二年を以て機關車を完成して一千八百三十年パプーール・マンチエスター間に鐵道を布設して汽車を走らしたが始りですが、此の模型がベルリの來航によつて幕府に獻じ、それが實際に布設せられたるは明治三年三月に、東京横濱間の線路工事、同六月に大阪神戸間の線路工事に著手したのに始り、同五年五月横濱品川間十四哩餘竣工して運轉を開始したので、初めて西洋に行はれてより遅るゝこと僅かに四十二年であり、電信は一千八百三十七年、亞米利加人モールスが發明して同四十四年にはワシントンに架設し同五十一年には英吉利政府、海底電線を沈設して歐大陸との通信を便にしたのですが、此の電信も亦米使來航によつて其の模型を示され、濱御殿に於て其の通信状態を御覽に入れたるに始り、これを傳信機といひ、安政四年即ち西洋に於ける初めての架設より僅かに十三年の後に薩摩の島津侯は鹿兒島の本丸の休息所より二の丸へと架設を試みられたといふことでありますが、中央政府が實用的に架設

したのは明治二年、横濱辨天通りの燈臺官舎から同港本町通りの裁判所官舎に至る七町の間を架設したのが始りで、それから漸次全國に擴がつたので、海底電線は明治六年、長門下關より豊前小倉に沈設するといふ風に我が國の西洋文明を取入れるのは、さほど遅れては居らないのです。一千八百七十年、スコットランド人グラハム・ベルが電話機を發明すれば日本は其の翌年たる明治十年に之れを輸入して十一年六月よりは之れを諸官廳の間に應用し、一千八百九十六年、伊太利人マルコニーが無線電信を發明すれば、其の翌明治三十年には我が日本にも之れを使用して居るといふ風に、彼れに遅れじとして鋭意其の文明を輸入したる努力は實に多とすべきであります。」

日本は實に此の如くにして五ヶ條の聖旨を實現し、我が國容を新にすべく努めて來たのである。

## 二 神佛分離と基督教

國容を維れ新にして世界の文明國と伍して遜色なからしめんとすると共に、復古の精神

神佛の混  
淆を禁ず

宣教師

を徹底せしめて國體の尊嚴を知らしめんとしたのが維新政府當初の方策であつた。其の先づ第一に現はれたのは明治元年仁和寺法親王の歸俗を初めとし、從來宮門跡と稱して皇族方の出家法體して之れに住職せらるゝことを止め、悉く俗體に還らしむると共に一千年來融合し來れる神佛の混淆を禁じ、社僧別當職を廢し、八幡大菩薩、金毘羅大權現等の名稱を神號に改めしめ、神道を以て國民教化の大本となさんとする傾向は歴々指點すべく、明治二年には宣教使なるものを置いて維新の大旨を宣傳することとし、翌三年正月には「宜しく治教を明にし、以て惟神の道を宣揚すべきなり、因て新に宣教使を命じ天下に布教せしむ」と詔みことのらせ、同年六月には民部省より氏子改稱規則を發布し、

「華族より士族卒庶人に至るまで、其地の籍に編入する者は、都て其産土神社へ名簿を納め、神社の印證を受、所持可致事、生兒は都て産土神社へ社參爲致、名簿を納め産土神社の印證を受け可申事」

といひ、東京府の如きは

「今般諸神社改正に付自今出生の兒は勿論老幼とも其産土神の守札を受所持可致尤從前

の宗門改同様之儀に付等閑に相心得申間敷事」

と達して、徳川時代の寺請證の如くし、佛教に於ける寺檀の關係を轉じて神社と氏子との關係たらしめんとし其の勢ひは廢佛毀釋にまで出で、久しく國民の信仰を支配したる佛教は一掃せられんとするかの傾きを生じたが、其の信仰の容易に改む能はざるのみならず、國民生活に密接し來れる佛教の國家爲政上、閑却すべからざるを反省し來り、寧ろ之れを利用して教化を助けしむべく、明治五年に至りて從來の神祇省を廢して其の特に祭祀に關することは宮内省の式部寮に移し、新に教部省を置いて神佛兩道を支配せしめ、神官僧侶を教導職とし、

三條の教  
期

- 一 敬神愛國の旨を體すべき事、
  - 二 天理人道を明にすべき事、
  - 三 皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事、
- の三條の教則を出して之れを宣布せしむることとし、一たび排斥せられんとした僧侶も此に至つて重要視せらるゝこととなつたが、基督教に對しては

切支丹禁  
制の撤廢

「切支丹邪宗門の義は是迄の通り堅く禁制の事」

と徳川政府の遺策を傳襲し、其の外國公使より歐米文明國共通の宗教を邪宗門と稱するの不可を抗議せらるゝに及び、これを二分して

- 一 切支丹宗門の儀は是迄御禁制の通り固く相守るべき事、
- 一 邪宗門の儀は固く禁止の事

と改め、明治五年六月、教部省は出仕寺院に告諭を下して「既に異教駸々乎として將に入らんとするの勢ひあり、是れ我が教を主張して民心を維持し國恩を報ずるの秋なり」と激勵して基督教に對抗せしめんとし、一面外國文化の輸入を計りつゝ他面に基督教を排斥したが、これより先き四年十一月に條約改正の目的を以て特別全權公使として歐米各國に赴いた岩倉具視の一行は、到る所で切支丹國禁を論難せられ、「苟くも文明國と對等の條約を締結せんと望む日本が、何が故に文明國の宗教を禁ずるか、かゝる高札の掲げある間は條約の改正思ひも寄らず」といはれ、直に本國に打電して其の撤廢を懇懇し、終に六年二月を以て他の高札と共に之れを撤し去るに至り、從來隱密の間に傳播し來れる基督教は公々



舊宗教の  
權威失墜

然として宣傳せらるゝに至つた。一方これに對應すべき神佛合併の布教は其の實佛教をして神道の下に服して敬神愛國を説かしめんとしたるものなるを以て、佛教徒の反抗漸く生じ、神道も亦佛教と事を共にするを潔いさよしとせず、兩者の紛糾は終に八年四月に至り「神佛合併布教差止められ候事」と達せられ、歐米信教自由の思想は我が國を訪れ來り、自由に各宗教を批判の俎上に置くこととなつて、信仰の光は次第に影を薄くするの傾向を生じ來るに至つた。

從來日本に於ても宗派上の争ひはあつた。しかしそは共に同一佛教上の分派なるを以てこれを裁斷するものは何れが教祖釋迦の本旨に適するや否やであつて、其の勝敗の何れに歸するも佛教上の損益には關せなかつたが、今、教祖を異にする基督教に對しては教祖の教義を以て批判する能はずして勢ひ之れを第三者たる科學哲學の力に待ち、何れが科學的であり哲學的であるかを以て標準とせなければならぬ。當時新進の勢ひを以て歐米の思想界を風靡したるは第十九世紀の思潮の本流たる唯物主義であり、其の科學哲學の體系として認容せられたるはダーウインの生物進化論に端を發して各種科學に應用せられたる進化

學說にして、既に西洋に於て基督教の教義たる神の天地人類を創造せりとの説を根本的に顛覆し、各般の信條に對して批判を與へ來れるものであつたから此學說の檢討は偶ま以て基督教攻撃の好資料となり、佛教徒は多く之れを應用して其の批判の標準とし、自己の優越を示さんとした。しかしながら其の優越は科學的なり哲學的なりとの立證となると共に宗教の權威を科學哲學の下に服せしめ、宗教本來の面目を發揮するに於ては頗る力弱きものあるを免れず。却て當時の流行思潮たる科學萬能を煽り、唯物的傾向を助長せしむるものさへあつて、先きに神佛分離によつて一千年來の傳統的信仰を破壊せられたる我が國民は、今基督教の新來によつて、益々其の信仰は攪亂かくらんせられ、宗教の權威は日に失墜するを免れざるに至つた。

### 三 立憲政體の實現

日本が徳川三百年、「泣く兒と地頭とは勝てぬ」專制治下にある間に、西洋に於て發達したるものは民權思想であつた。由來西洋史の源頭は希臘の都市國家に於ける民主的政治

西洋に於  
ける憲政  
の發達

に其の端を發するも一たび羅馬の帝政となり、羅馬亡びて宗教上の支配者たる羅馬法皇各國帝王の上に位せしも、宗教改革と共に其の權力は失はれ、各國帝王は至上の權を以て國民に臨み、專制壓抑甚しきに至つて民權自由の聲勃然として起つて英國の革命となり、一千六百八十九年には權利表白令を發布して「國王は議會の協賛を経ずして法律を停止し又は實施するは不條理なり」として國王の權利を制限して議會の權力を擴大し、一時勢力を得たるトマス・ホッブスの「人間の本來は利己的なるものなるが故に相互に之れを制すべき契約の下に國家を造り、自己の權利を割きて君主に與へたるものであるから君主の權は絶對にして臣民は之れを服従せざるべからずとするの議論は其の影を潜め、同じく社會の起源を契約に置くといへども、それは自己の權利と自由とを保たんがため、苟くも其の權利を侵害し自由を剝奪するが如きは其の成立の本意にあらずとするジャン・ジャック・ルソーの民約論は一千七百年代には頗る力を得るに至り、英國の植民地として久しく其の國王の專制に苦める亞米利加は一千七百七十五年に本國と開戦し、翌七十六年には獨立を宣言して共和政體を實現し、最初に其の獨立を承認したる佛蘭西は、これ亦久しく國王の專

制に苦しみが、一千七百八十九年には革命を爆發して國王と對峙し、終に王政を廢し、一千七百九十二年の慘劇を経て民權の伸張を計り、此の大革命後、一時共和政治を行ひ、却て人民をして混亂に苦ましめ、次で英雄ナポレオン出でて此の混亂の佛蘭西を統一して大に國威を張り、内には有名なるナポレオン法典を編纂して近代法律に新紀元を開き、其の後、佛蘭西は又共和政治を布き、更に轉じて、ナポレオン三世の帝政となり、維新の當初は實に其の隆盛の絶頂であつたが、明治三年即ち西曆一千八百七十年普佛戰爭によつてナポレオン三世は其の位を失ふて佛蘭西は復た共和制となるといふ如き目まぐるしき變轉の中にも民權は次第に擴張せられて議會政治は次第に完備に赴いた。

これらの事情も早く蘭學者の手を経て我が國に傳へられ、文政十年青地林宗の和蘭陀語より譯せる「輿地誌略」の中に英國の條下に「政府を把爾列孟多ペルリヤメントといふ政臣會集の廳なり」とあつてパーリヤメント(Parliament)即ち議會なるもの紹介せられ、「其の後幕府の遣外使臣も亦其の狀況をも視察せられ、慶應二年、横井小楠が越前侯松平春嶽に上れる建白書の中にも「議事院を建てられ候筋尤も至極なり、上院は公武第一席、下院は廣く天下の人

把爾列孟多

材を御擧用」とあつて上下兩院の制も傳へられて居つたのである。されば明治維新となつて萬機公論に決すべき御聖旨の實現を期することゝなつては泰西の政治思想滔々として我が國を訪れ來り、七年一月、早くも民選議院設立の建白出で、八年には初めて地方官會議が開かれ、越えて十一年七月には府縣會が開かれ、翌十二年六月には區會町村會は開かれ、終に十四年十月十二日を以て、

## 國會開設の詔

「朕祖宗二千五百有餘年ノ鴻緒ヲ嗣キ、中古紐ヲ解クノ乾綱ヲ振張シ、大政ノ統一ヲ總攬シ、又夙ニ立憲ノ政體ヲ立テ、後世子孫繼クヘキノ業ヲ爲サンコトヲ期ス。嚮ニ明治八年ニ、元老院ヲ設ケ、十一年ニ府縣會ヲ開カシム。此皆漸次基ヲ創メ、序ニ循テ歩ヲ進ムルノ道ニ由ルニ非サルハ莫シ。爾有衆亦朕カ心ヲ諒トセン。顧ミルニ立國ノ體、國各宜キヲ殊ニス。非常ノ事業、實ニ輕舉ニ便ナラス。我祖、我宗照臨シテ上ニ在リ。遺烈ヲ揚ゲ、洪謨ヲ弘メ、古今ヲ變通シ、斷シテ之ヲ行フ、責朕カ躬ニ在リ、將ニ明治二十三年ヲ期シ、議員ヲ召シ國會ヲ開キ、以テ朕カ初志ヲ成サントス。今在廷臣僚ニ命シ、假スニ時日ヲ以テシ、經畫ノ責ニ當ラシム、其組織權限ニ至リテハ、朕親ラ衷ヲ裁シ、

時ニ及テ公布スル所アラムトス。

朕惟フニ、人心進ムニ偏シテ、時運速ナルヲ競フ、浮言相動カシ、竟ニ大計ヲ遺ル、是レ宜シク今ニ及テ、謨訓ヲ明徴ニシ、朝野臣民ニ公示スヘシ、若シ仍ホ故ラニ躁急ヲ爭ヒ、事變ヲ煽シ、國安ヲ害スル者アラハ、處スルニ國典ヲ以テスヘシ、特ニ茲ニ言明シ、爾有衆ニ諭ス。」

の勅語渙發となり、着々立憲政治への歩武を進め、政府に於ては憲法の制定其他各般の法規を定むべく伊藤博文等を歐米に派して各國の制度を取調べしむる等其の準備怠るなく、明治廿一年、帝國憲法の草案成るや、新に樞密院を置き國家の元老を顧問官とし、天皇親しく臨御したまひ、御前に於て各條を議定し、民間に於ては先きに國會期成同盟を標榜して起つたる板垣退助等は自由黨を組織し、主として佛蘭西流の民權思想に基き、ルソ一の民約論等を指導原理とするに對し、大隈重信は改進黨を組織して主として英國流の自由説に基き、ミル、スペンサー等の思想を中堅として、共に時の政府に反對せるに應じて起りたる政府黨若くは官僚派は専ら獨逸流の國家論を背景とする等、西洋の政治思想は我

## 政治と其の思想

が朝野を動かしたつゝあつたのである。會て當時の光景を「現代思想の史的考察」に述べて左の如く觀察した。

「更にこれを社會的に觀察いたしますと、自由黨の對象とした大衆は、昔の所謂百姓階級中の有力者、改進黨の對象としたのは、昔の所謂町人階級の先進者でありまして、自然に自由黨は農村に、改進黨は都市に勢力を張るに至りましたが、何れも其の指導者として立つものは昔の所謂武士階級に屬した士族の當代に不平なる連中であつたことは見逃すことの出来ない事實であり、之れに對抗した政府黨の官僚的なることは申すまでもありませんが、これ亦多くは維新の際に活躍したる雄藩の士族で特に薩長二藩が多かつたから所謂藩閥政府と罵られたのであります。即ち

自由黨……佛蘭西思想……農民……(土佐の板垣氏中心)

改進黨……英吉利思想……商人……(肥前の大隈氏中心)

政府黨……獨逸思想……官僚……(薩摩長州中心)

と見ることが出来まして、維新の大業を補佐した薩長土肥の四藩が政府黨と反對黨とに

別れたとも見ることが出来るのであります、しかし其の何れもが西洋思想を背景にしたのは當時の潮流然らざるを得ざるものがあつたのであります。」

かくして明治二十二年二月十一日を以て帝國憲法が發布せられたが、これ決して英吉利流のものでもなく、佛蘭西流のものでもなく、亦獨逸流のものでもない。純然たる日本獨自の憲法で、其の第一條に、

大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

と明確に我が國體の根本を明かにし、我が臣民には

一居所移轉の自由 (憲法二十二條)

二身體の自由 (同 二十三條)

三住所の侵されざる (同 二十五條)

四信書の秘密の侵されざる (同 二十六條)

五財産の侵されざる (同 二十七條)

六信教の自由 (同 二十八條)

七言論出版の自由 (同 二十九條)

八集會結社の自由 (同 條)

九請願の自由 (同 三十條)

の権利が保障せられ、此の中には法律にあらざれば侵し得ざるものと、命令を以てするも特別の理由ある以上は制限し得るものとあるが、兎に角法律の制限の下に自由を得て居るのである。其の他憲法二十四條によりて我が臣民は、法律に定めたる裁判官の裁判を受くることを請求するを得、且つ憲法十九條により日本臣民は法律命令の定むる所の資格に應じて門閥血統の如何を問はず均しく文武官及び其他の公務に就くことを得、尙又憲法三十五條の規定により衆議院は選舉法の定むる所によりて公選せられたる議員を以て組織するが故に、日本國民は選舉法の規定に従ひ議員を選舉するの權を有す、而して法律の制定改廢并に國家歳出入の豫算は議會の議決を俟たざるべからざるを以て、國民は自ら自己の守るべき法律を定め、自己の負擔すべき租税を定むるを得るに至つたのである。

これを武家時代の壓抑に見よ。如何に其の自由が獲得せられたるか。之れを中世の專制に見よ。如何に權利が伸長せられたるか。歐米諸國に於ては此の自由を得、此の權利を伸ぶるべく鮮血淋漓たる革命史を繰返し來つたのである。獨り我が國は、

憲法發布  
の大詔

「朕國家ノ隆昌ト、臣民ノ慶福トヲ以テ、中心ノ欣榮トシ、朕カ、祖宗ニ承クルノ大權ニ依リ、現在及將來ノ臣民ニ對シ、此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス。」

と仰せられ、國家の隆昌と臣民の慶福とを念としたまふ大御心に出で其の

「惟フニ、我カ宗ハ、臣民祖先ノ協力輔翼ニ倚リ、我帝國ヲ肇造シ、以テ無窮ニ垂レタリ。此レ我カ神聖ナル祖宗ノ威徳ト、竝ニ臣民ノ忠實勇武ニシテ、國ヲ愛シ、公ニ殉ヒ、以テ此ノ光輝アル國史ノ成跡ヲ貽シタルナリ。」

と國史の成跡に基き、

「朕我カ臣民ハ、即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ、其ノ朕カ意ヲ奉體シ、朕カ事ヲ獎順シ、相與ニ和衷協同シ、益々我帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ、祖宗ノ遺業ヲ、永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ、此ノ負擔ヲ別ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ。」との信賴の下に發布せられたので、全く他の國家と性質を異にして居るのである。若し其

れ單なる政治形式の上より見れば立憲代議の政體は他の國々に於ても之れを求むることが出来るが、其の裏面に君臣情誼を篤くし、天皇中心の思想と人民中心の政治とを以て經緯し來れる三千年の溫かき歴史を有して居る國は求むることが出来ない。我が帝國憲法は其の形式に於て泰西近代國家と相似たるものもあるも、其の精神は我が固有の忠君愛國の念によつて運用せらるべきものたるを忘れてはならぬ。

### 第三節 國民道德の基準

#### 一 西洋思想と日本精神

明治維新は根本に於て復古の思想の伏在するものゝ存したるを見得るも、其の外容に於ては一意西洋文明の輸入であり、追隨であつた。政治に於て西洋の思想並に形式が採用せらるゝのみならず、軍事に於ては明治三年十月十二日太政官布告に

「兵制之儀、海軍は英吉利式、陸軍は佛蘭西式を斟酌御編制相成候條、先づ藩々に於て陸

兵制改革

學制發布

軍は佛式を目的とし、漸を以て編制相改候様被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>候事」

とあり、教育に於ては明治五年學制を發布し、

「自今以後一般人民（華士族農工商及婦女子）をして均しく學に就かしめ、邑に不學の戸なく、家に不學の人なからしめんことを期す」

とて佛國の制度に倣ひ、全國を大中小の學區に分ちて、劃一的に教育を施し、其の後或は劃一を避けて自由主義を取る米國の制に倣ふ等幾變遷し、一時は殆んど西洋直譯の教科書をも採用せしほど萬事が西洋流で高等學府は外人の教師を主とし外國語を以て教授したほどで、勢ひの趣く所は我が國民精神をも冷却せしむるの傾向をも生ずるに至つた。

由來新輸入の西洋文明は物質的であり、先づ日本人の眼を驚かしたものは精緻なる機械工藝であり、其の源頭をなせる科學思想は唯物的のものであり、理智的のものであつたから滔々として日本を風靡し來つたものは皆な唯物的理智的なる近代思想であり、其の政治理論と共に入り來つたものは權利の主張を中心とするものであり、其の道德として傳へ來つたものは個人本位のものであつて、物質よりは寧ろ精神に、理智よりは寧ろ情意に、權

東西思想  
並に習俗  
の相違

利よりは寧ろ義務に、個人よりは寧ろ家庭に重きを置き來れる東洋古來の道德とは頗る趣を異にするを感じざるを得ず、人類平等に立脚し博愛を以て中心とせるものと、「君臣義あり、父子親あり、夫婦別あり、長幼序あり」と差別的に倫條を定めたるものとは其の説相を同うすることは出來ず、

「我れに自由を與へよ、然らずんば死を與へよ」

と絶叫したるパトリック・ヘンリーの愛國心と、

「臣敢て股肱の力を竭し、忠貞の節を効し、之れに繼ぐに死を以てせん」

といへる諸葛孔明の忠君とは全然其の態度を異にするを見ざるを得ない。夫婦を本位とする西洋の家庭と、親子を中心とする東洋の家庭、家名を重んじ祖先の祭祀を絶やさじとして家督相續を計る我が習俗と、單に死後の財産を指定の相續人に譲りて又家名の相續を云はざる西洋の習俗とは矛盾する所あるを感じざるを得ない。彼れを採つて我を捨つるか、我を存して彼れを捨つるか、理智は西洋思想によつて進んだが、情意を閑却し去つて果して人格の完成を期し得べきか。こゝに反省の期は來らざるを得ない。

二 軍人勅諭と教育勅語

西洋の藝  
術東洋の  
道德

西洋の藝術、東洋の道德、兼ね備へざるべからざるは幕末既に佐久間象山等の喝破せる所にして、横井小楠の「西洋器械の術を盡くし、堯舜孔子の道を行ふ、何ぞ富國に止らん、何ぞ強兵に止らん、大義を四海に布くのみ」といへるは維新改革の抱負であつた。されば明治政府も物質文明に於ては廣く之れを世界に求むるも精神的方面に於ては固有の精神を失はしめざるを以て其の方策とし、此態度の明かに軍隊の上に現はれたのが明治十五年一月四日の陸海軍人に下し賜りたる勅諭である。此勅諭に於て先づ我が固有の兵制を明にし、皇軍の精髓を示して、

「朕ハ汝等軍人ノ大元帥ナルソ、サレハ朕ハ汝等ヲ股肱ト頼ミ、汝等ハ朕ヲ頭首ト仰キテソ、其ノ親ミハ特ニ深カルヘキ、朕カ國家ヲ保護シテ、上天ノ惠ニ應シ、祖先ノ恩ニ報ヒマキラスル事ヲ得ルモ得サルモ、汝等軍人カ其職ヲ盡クスト盡ササルトニ由ルソカシ、我國ノ稜威振ハサルコトアラハ、汝等能ク朕ト憂ヲ共ニセヨ、我武維揚リテ其榮ヲ輝サ

皇軍の精  
神

ハ朕汝等ト其譽ヲ俱ニスヘシ」

と仰せられ、忠節、禮儀、武勇、信義、質素の五ヶ條を擧げ、

一誠之れ  
を貫く

「右ノ五ヶ條ハ、軍人タランモノ暫モ忽ニスヘカラス。サテ之ヲ行ハンニハ、一ノ誠心<sup>まことこころ</sup>コソ大切ナレ。抑此五ヶ條ハ我軍人ノ精神ニシテ、一ノ誠心ハ、又五ヶ條ノ精神ナリ、心誠ナラサレハ、如何ナル嘉言モ、善行モ、皆ウハヘノ裝飾<sup>かざり</sup>ニテ、何ノ用ニカハ立ツヘキ、心タニ誠アレハ、何事モ成ルモノソカシ。況シテヤ、此五ヶ條ハ、天地ノ公道、人倫ノ常經ナリ。行ヒ易ク守リ易シ。汝等軍人能ク朕カ訓ニ遵ヒテ、此道ヲ守リ行ヒ國ニ報ユルノ務ヲ盡サハ、日本國ノ蒼生舉リテ之ヲ悦ヒナン。朕一人ノ懌<sup>よろこび</sup>ノミナランヤ。」

と示して一誠國に盡くすべき軍人精神を鼓舞したまひ、教育方面に於ては同年十二月専ら東洋道德の典範を示したる「幼學綱要」を頒賜したまひ、

「幼學綱  
要」の頒  
賜

「彝倫道德ハ教育ノ主本、我朝支那ノ専ラ崇尚スル所、歐米各國モ亦修身ノ學アリト雖モ、之ヲ本邦ニ採用スル、未タ其要ヲ得ス方今學科多端本末ヲ謬ル者鮮<sup>すくな</sup>カラス、年少就學最モ當ニ忠孝ヲ本トシ、仁義ヲ先ニスヘシ。因テ儒臣ニ命シテ、此書（幼學綱要）ヲ編纂

シ、群下ニ頒賜シ、明倫修徳ノ要、茲ニ在ルコトヲ知ラシム」

と仰せられたる我が朝支那の専ら崇尚する所の道德を擧揚したまひ、かくて帝國憲法發布せられ我が政治形式は一變して帝國議會初めて開かれんとするに先きだつこと二十五日なる明治二十三年十月三十日を以て國民道德の大典たる教育勅語渙發せられて、維新以來廣く智識を世界に求め來りし我が國も其の道德の大本を國體の精華に置くべきを示し、西洋の智識、東洋の道德、經となり緯となつて國民向上の大道を辿るべき方途を明にせられたので、第一段には君徳臣道を明して國體の精華と教育の淵源とを示して、

國體の精  
華、教育  
の淵源

「朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇<sup>はじ</sup>ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥<sup>そ</sup>ノ美ヲ濟<sup>な</sup>セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」

とのたまひ、第二段には臣民の大道たる家庭並に社會道德より國民として直接國家に對する本務に及び、悉くこれを皇運扶翼に歸して國體の精華と相應じ、

「爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學



ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン」

第三段に於て斯の道の普遍にして且つ永遠の眞理たるを示し

「斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」

とのたまひ、獨り汝臣民に服膺せしむるのみならず、陛下自ら服膺して其徳を一にせんと庶幾ひたまふ。君臣一徳、上下心を一にする此の徳は直にこれ軍人勅諭に示された一誠と相互一貫したる日本精神の基準となり、維新以來動搖したりし我が國民思想はこゝに其の歸趨を得、更に新たなる意氣を以て世界の舞臺に躍進したので此時に當りて日本は最早、西洋の模倣者でも追隨者でもない、寧ろ東西文明融合の先覺者として世界に立たんとしたのである。

#### 第四節 世界的發展と國民精神

##### 一 日本の日本より東洋の日本へ

明治の功臣、伊藤博文、曾て「帝國憲法の由來」に於て、明治天皇が終始一貫の御政策を擧げていふ。

- 一、國民を教育して立憲國の必要に應ぜしむる事。
- 二、國民をして近代文明の精華を收めて其用に供せしむる事。
- 三、斯くして國家の富強、人文の進歩を圖り、世界最強の文明國と伍して同等の位置を得せしむる事。

と。日本は實に此方途を辿りて進み來つたので、其の第一に目標としたものは安政年間に各國と締結したる不對等なる條約を改正して文明諸國と對等なる條約を締結せんとする所謂條約改正にあつた。安政條約は西洋諸國が日本を東洋の弱小國と見て自己に有利に締結

終始一貫  
の御政策

條約改正

せしめたもので日本の國威を損すること尠少でなかつたから、維新の業、緒に就くや先づ之れが改正を計らんとしたが、西洋諸國は日本の文化未だ進まざるを名として容易に應ぜず、依然として安政の舊條約により外國人は我が日本に居留しても我が法律に服せざる治外法權を有して居つたのである。しかも其の間に於ける我が文化は全く異數の發達にして、我が國家の進歩に對しては彼等も亦之れを認識せざるを得ざるに至り、樽俎折衝幾回かを重ね、終に明治二十七年七月に至り英國先づ新條約の締結に調印し、各國も亦續々其の例に倣ひ、こゝに久しく汚損せられたる國權は恢復せられ歐米文明國と對等の位置にまで進み得たのである。

## 日清戰爭

此日本の興隆に對し、快からざる感情を有し其の中間に介在する朝鮮半島を中心として事毎に衝突し來つたものは支那であつた。當時清廷の威未だ衰へず、歐米列強も亦之れを「眠れる獅子」として之れを重視し、支那も亦西洋文化の採用に於ても我が先進國として新式軍艦定遠、鎮遠などを率ゐ來つて我れを脅威するものがあつたので、我が獨立を認めたる朝鮮を見ること屬國の如く、其の暴狀は實に東洋の禍根たらざるを得ざるものあり、終

## 三國干涉

に東洋永遠の平和を計るべく敢然兵を構へて支那に對するに至つた。支那は世界の大國であり、日本は蕞爾たる小國である。此小國日本が尨大なる支那に對するを見て、世界は其の勇氣に驚くと共に、頗る疑懼の眼を以て其の勝敗を見たのであるが、我が忠勇なる皇軍將士の連戦連勝、之れを屈服せしむるに至つて、世界は實に我が新興の國力を驚歎したのである。されど其の驚歎はやがて嫉視となり、こゝに世界の強國たる露、獨、佛三國の聯合して我れに干涉し來り、極東永遠の平和に害ありとし、我が日本が清國との媾和條約によつて割讓せしめたる遼東半島を還付せしむべく強要するに至つた。

## 歐洲列強の大勢

これもとより巧みなる支那外交の操縦にも由るのであるが、又實に世界の大勢が三國をして眼を極東日本に注ぎ來らしめたるものあるを逸却することが出来ない。維新以來致々として我が日本が國家興隆に力を盡くしつゝある間、歐洲列強は其の國內の整理と近接國家との利害衝突の爲め遠く極東に事を構ふる能はざる時代であつた。我が明治元年たる西曆一千八百六十八年は獨逸も伊太利も漸く統一の緒に就いた頃で、伊太利が羅馬を併せて統一を完成したのは明治三年であり、此年佛蘭西は普魯西の爲めに破られナポレオン三世

失脚して共和政治となり、翌四年には普魯西王ウイリヤム一世、獨逸帝國を創建し各々新興の氣分を湛へて國力を充實し、其の外交政策に於ては英吉利は重點を世界の寶庫と目せらるゝ印度に置き、一千八百六十九年(明治二年)佛蘭西人レセブスがスエズの運河を開鑿するや、これを印度への通路を脅かすものとして巧みに運河會社の大株主たる埃及王の持株を買ひ取つて埃及並にスーダンに於ける佛蘭西の勢力を驅逐し、しばしば土耳其を窮迫して、中央亞細亞より印度を窺はんとする露西亞を牽制し、露西亞は又バルカン半島に南下せんとして澳大利と反目し、土耳其と衝突するといふ狀勢で、漸く獨、澳を中心として伊太利を加へたる三國同盟と露佛二國の協商と相對して略ぼ均衡を得て平和を裝ひ得るに至り、眼は遠く海外に向はざるを得ない。これより先き歐洲列強は略ぼ亞弗利加を分割し終りて其の植民の手を太平洋方面に伸し、曩きに一千七百六十九年、ジェームス・クックの探檢以後領有したる太平洋洲たるオーストラリヤに金鑛の發見せられたるを機會とし一千八百五十一年以來植民に着手し、ニュージラランド、ファイジー等の諸島を占領し、佛蘭西は一千八百四十二年以後ソサイエチー諸島を取り、獨逸は英吉利、和蘭陀等と共にバプア島を分

割し更にビスマーク、マーシャル等の群島を得、カロリン、バラフの諸島を西班牙より買收し刻々勢力を太平洋上に張つて居つたので、其の太平洋上に最も近き大陸に於ける日本の連戰連勝を見て「黃禍來るべし」と絶叫し、一は北より一は南よりして此大陸の利害に關係ある露、佛兩國を動かして我れに抗議を持込んだのは獨逸皇帝ウイリヤム二世であつた。

## 二 東洋の日本より世界の日本へ

日本は如何に興隆したりといへども未だ三國を敵として更に支那と戰ふの餘力を有せなかつたばかりでなく、假令表面の辭令なりとも其の云ふ所の「極東永遠の平和」にあるに於てはこれを忍從せざるを得ない。しかも、此忍從は國民精神を激勵し臥薪嘗膽の聲は戰捷に醉へる國民の心を緊張せしめ、國力充實に獎むべき精神は國內に横溢し、發憤努力の氣宇は大に養はるゝものがあつたのである。しかしながら此日本の忍從は決して永遠の平和を保障する所以ではなかつた。巧みなる外交手段を以て日本を忍從せしめたりと思惟した

りし清廷の政策は却つて其の國を衰弱へと導く一步であつた。即ち露西亞は其の干涉の報酬として滿洲鐵道の敷設權を得、更に旅順、大連を占領して其の租借權を得、佛蘭西は廣東、廣西、雲南三省に於ける鑛山採掘權並に雲南鐵道の敷設權、廣州灣の租借權等を得、獨逸は宣教師殺害を口實とし膠州灣の租借權並に山東省内の鐵道敷設權を得たが、此形勢を看取した英吉利は自國に利害關係深き楊子江沿岸の不割讓を約せしめ、且つ露西亞との均衡を名として威海衛を租借することとなつて極東の禍亂は却つて此間より生ぜんとするの傾向を有するに至つた。此間米國の太平洋發展も亦看過することが出来ない、即ち米合衆國は一千八百九十八年布哇國を併合し、フィリッピン群島を西班牙より得て歩々支那大陸に近づき來つた。

果然、禍機は熟して日、英、米、佛、伊、露、獨の七國をして支那と兵端を開かしむる一千九百年の北清事變なるもの起り、一時清國をして危殆に瀕せしめ、幸に媾和成つて各國其の駐兵を撤せるにも拘はらず、獨り露西亞は滿洲に駐兵して着々占領の實を示し、更に手を朝鮮の内政に下して其の獨立を妨げ以て我が國を脅威せんとす。これ明かに極東平

和の攪亂であり、彼等の曾て我れに干涉し來れる提議を自ら破るの暴横は我が忍ぶる所ではない、暴横はよし忍ぶべしとするも平和の攪亂は忍ぶことが出来ない。此に於て我が日本は敢然國運を賭して露國と砲火相見ゆるに至つた。

當時露國は歐亞に跨る大領土を擁し、其の勢ひ眞に旺盛なるものあり、特に其の陸軍の精銳は世界第一と稱せられたのであるから世界各国は我が日本の爲めに之れを危ぶむものが多かつたが、緊張したる國民精神は眞に舉國一致を實現し海に陸に大捷を博して終に和を講ぜしむるに至り、世界は之れを驚異して全く國民精神の旺盛なるものあるに基くとし、日本武士道の研究をして一時歐米の流行たらしめたほどである。そはたゞ日本が小國を以て大國露西亞に打ち勝たる勇敢なる國民精神のみでなく、能く國際法規を遵守し、且つ仁慈博愛を體し、ロンドン・タイムスの通信員をして「日本の敵國捕虜を優遇すること我が負傷兵に過ぎたり」とまで激賞せしめたるに由るので、明治天皇の

四方の海みな兄弟と思ふ世に  
など波風のたち騒ぐらむ

の御製は我が理想を體現し、

國のため仇なす敵は碎くとも

いつくしむべきことな忘れそ

の御製は、我が勇敢にして仁慈なる軍隊精神の根柢として歐米にまで傳誦せられたのである。

日英同盟

これより先き日本は日英同盟を結びて西に英吉利、東に日本と併稱せらるゝまでに其の國位を進め、更に此戰勝によつて押しも押されもせぬ世界の日本たる地歩を確保するに至つたのである。しかも國民緊張の精神は之れを一區劃として漸く弛緩を生じ戰後より發生したる成金氣分は滔々として上下を風靡し、終に明治四十一年十月十三日を以て戊申詔書を下して之れを戒飾したまふに至る。戊申詔書は其の劈頭に我が平和の理想を明にし、

國民精神  
への戒飾

「方今人文日ニ就リ、月ニ將ミ、東西相倚リ、彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス、朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ、友誼ヲ惇シ、列國ト與ニ永ク其慶ニ賴ランコトヲ期ス」

次ぎに戰後日尙ほ淺く、庶政益々更張を要すべくして、斷じて華美に流れ荒怠を事とすべき

時にあらざるを示し、

「願ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセントスル、固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ、戰後日尙淺ク庶政益々更張ヲ要ス、宜ク上下心ヲ一ニシ、忠實業ニ服シ、勤儉産ヲ治メ、惟信惟義、醇厚俗ヲ成シ、華ヲ去リ實ニ就キ、荒怠相誠メ、自彊息マサルヘシ」

更に

「抑々我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト、我カ光輝アル國史ノ成跡トハ、炳トシテ日星ノ如シ、寔ニ克ク恪守シ、淬礪ノ誠ヲ輸サハ、國運發展ノ本近ク斯ニ在リ、朕ハ方今ノ世局ニ處シ、我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ、維新ノ皇猷ヲ恢弘シ、祖宗ノ威德ヲ對揚セシムコトヲ庶幾フ、爾臣民、其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ。」

と示して國運發展の本を國民が淬礪の誠を致すにありとし、軍人勅諭の一誠、教育勅語の一徳と應ずべき國民精神の基調を説き以て國民を激勵したまひ、國民も亦漸く反省し來つて國運次第に發展し、庶政益々更張して光輝ある明治の御代を送り、大正に入るの初めに當つて、從來僅に均衡を保つて大動亂を避け來りし歐洲の天地は世界の通商貿易に於ける

世界大戦  
と日本

英獨の衝突、普佛戰爭以來の獨佛の反目、バルカン半島に於ける露澳の軋轢はセルビヤ一青年のボスニヤの首府セラエヴォに於ける澳國太子フェルヂナンド狙撃に勃發して終に全歐の大動亂となり、英、佛、露、伊等を中心とする聯合軍と、獨、澳等を中心とする同盟軍とは相對峙し、自餘の諸國も亦其の何れかに屬し、更に戦線の擴大に伴ひ歐羅巴以外の各國も亦之れに参加し、其の終期に近く米國新に聯合軍に参加し、露國は脱退したが、同盟軍四國に對して聯合軍實に二十四國、其の參加國の面積は全地球の約七割に該當し一千九百十四年より同十九年に至る五ケ年間歐羅巴をして全く戦亂の巷たらしめ、双方召集總員約六千萬、死者のみを算するも約七百萬、戦費双方合計二千三百二十億萬弗を越ゆるといはるゝ人類歴史あつてより未だ曾て見ざるの慘禍を現はし歐洲の文化を破壊し去つた。

日本は遠く戦地を離るといへども、獨逸の所領は近く太平洋上に點在す、此に於て日本も亦聯合軍に参加して早く極東に於ける獨逸の根據地たる膠州灣より其の勢力を一掃し、進んで南洋に於ける獨逸所領の群島を占領し、英吉利と協力して印度洋並に太平洋上の監視に當り世界の海上交通を安全ならしめ、戦争の進展につれ英吉利の専ら力を北歐海上に

大戦と國  
民精神

注がざるを得ざるに至るや、太平洋上の平和は全く日本のみにて維持せられ、日本の此方面に於ける貢獻は何人も看過するを得ざるに至らしめ、將來太平洋上の問題日本を閑却しては解決する能はざるの實力を世界に示し、日本の世界的地位は更に一段の向上を見るに至つた。しかも歐洲が戦争に専心して全産業を其の方面に向け通商貿易の全く閑却せられ且つ物資の缺乏に惱める間、遠く戦地を離るゝ我が日本の産業は非常に發展し、貿易も亦頗る好況を呈し國民の生活は向上して奢侈の風、浮華の俗、都鄙に浸染し、緊張の精神こゝに弛緩を來し、戦時の好況漸く去るも尙ほ顧みるなく、終に現代にまで傳承し來つた。

## 第五章 近代思想の動向

## 第一節 社會思想と民衆運動

## 一 資本主義と帝國主義

日本が世界へと進出しつゝある間に、世界の思潮は幾變轉し、我が日本も亦其の影響を受けつゝ現代に至つた。

明治以來日本の受けたる西洋思潮は宗教萬能の中世思想より放たれたる科學萬能の思想であり、精神文化より別れたる物質文明の思想であり、傳統より脱却し來れる自由の思想であつた。而して其の社會形態に現はれたるものは壓抑に抗する自由の叫びであり、差別に對する平等の要求であつた。此の叫びと此の要求とは先づ政治上法律上に現はれて民權擴張の運動となり、立憲政治の實現となつた。しかしながら此の自由と平等とは完全に兩

自由と平等

立し得べきものであらうか。近代思想は此の二個の矛盾しつゝ而も一脈相通する思想を以て擡頭し、科學の發達や物質文明の進歩に伴ふて、こゝに幾多の紛糾葛藤を生じ來つたのである。

先づ最初に起りたるものは個人の自由が識認せられて法律上平等の地位に立たせられたる人類間の自由競争であり、其の競争して得んとする所のものは物質的な財貨であり、富であつた。アダム・スミスが「富國論」を著はして國を富ますの道は保護干渉を一掃して自由競争に任せねばならぬといふたのも其の思想徑路を示すものであり、十六世紀以後歐洲各國が重商主義を取つて通商貿易の發達を計り植民地の獲得にこれ日も足らなかつたのも其の爲めであり、機械工業の進歩を促し、個人の發明發見を刺戟したのも其の爲めであつた。而して其の結果として生じ來つたものは貧富の著るしき懸隔である。蓋し自由競争の結果は勝ち劣者は敗る。敗れたるものは社會の落伍者であり、勝ちたるものは社會の前面に立つて益々落伍者をして上るに途なからしめ、富者は益々富み、貧者はいよいよ貧しく、終には此の世相を裏書すべき哲學をさへ生じ、「劣者の敗れ優者の勝つは生物界

「富國論」

貧富の懸隔

強者の權  
利

の常理、いづれの人類か劣者の建てたる文明あり文化あるか。世界の歴史は英雄の歴史である。劣者亡び優者存して社會は進歩し發達する。愛を説き慈悲を語るが如きは舊時代の舊道德にして現代は愛の福音を説くべき時代ではない。現代に活躍すべきはたゞ力あるのみ」といへるニイチエ一派の主張には此の色彩をも認め得るに至り、國家の上には帝國主義となり、經濟上には資本主義となり、此の資本主義と帝國主義とは相關聯し相提携して益々強者の地位を確立した。

特に此の資本主義を跳梁跋扈せしむるに至つたのは科學の進歩に伴ふ諸種の發明發見であり、中にも機械の發明が漸次に従來の手工業を奪ひ來たことは人類生活の革命への一過程であつた。一千七百六十四年に英吉利のジェームス・ハーグリーの發明したものは従來と大差なき手の力を以て糸を紡ぐのであつたが、同六十九年にリチャード・アーングライが水車を原動力とする紡績機械を發明したが、同年ジェームス・ワットが蒸汽機關に大改良を加へてこれを工業に應用せしむるに及びて工業の規模は擴大し、其の生産は非常に増加し、到底手工業の企及し能はざる所となり、相競ふて大工場に於て大なる機械を据え付け

## 機械文明

## 産業革命

多量の生産を計ることとなつたが、これには大なる資本を要し、資本なきものは手工業に甘んぜなければならぬが、人間の力は到底機械に及ばないのであるから勢ひ手工業者は其の職業を機械に奪はれ、家内工業は工場へと進出せなければならぬこととなつて産業形態は全く一變するに至つた。

此の産業革命によつて生じ來つたものは大資本を擁して工場主となつたる資本家と、機械の爲めに其の業を奪はれ、已むなく工場へと進出せなければならぬ労働者との對立である。家内工業に於ても親方子方はあり弟子師匠の關係はあつて初めは徒弟となつて學び、技熟すれば獨立して親方となることも出來たが、今は全く趣を異にした資本主と労働者との關係となり、此兩者の間も亦近代的なる人類平等の立場に於て自由契約を以て雇傭を定むるに至つたから、雇主たる資本家は成るべく多く働かして少しく與へんとし、雇傭者たる労働者は成るべく多く得て少しく働かんことを望み、全く利害關係を異にし、各自其の自由を主張しては此契約は成立するものでないが、此對立に於て最初に敗るゝものは労働者であつた。何となれば資本家に於ては儲かるか儲からぬかの利益問題であるが、労働者

資本家と  
労働者との  
對立



有産と無産

にあつては食ふか食はぬかの生活問題であるから終に食ふだけ貰へば辛抱するといふことになつて自由とはいひながら其の實不自由なる契約の下に食ふだけ貰つて働いて食ふ、食ふては働き働いては食ひ、終に何の残す所なき無産階級即ちプロレタリア (Proletaria) となり、之れに對して資本家の方は益々多くの利を得んとして工場設備とか労働者の衛生などには留意せず、働けるだけ働かさんとして長時間の労働を強い、賃金の低廉なることを望みて婦人子供をも使役して労働に従事せしめ、搾取これ努めて自己の富を増さんとし、人類平等を標榜して舊社會の階級を打破し來つた近代思想は端なくもこゝに有産無産の不平等なる對立を見るに至つた。勿論資本家は悉く不人情なる冷血漢であり、有産階級は皆な搾取をのみ事とする我利／＼主義者であるとするのは反抗者流の妄斷であり酷評であつて、資本家にも血もあれば有産階級にも涙はある。しかも次第に大資本に成り大經營を要するに至つては、個人の資力これに及ばず且つ損害の負擔をも少くせんとする要求は勢ひ資本の結合に成る株式會社の組織となつて、法律づくめ規則づくめで組立られたる此會社を以て人間と同じく權利義務の主體となるべき法律上の人とし、此法人を以て他に

法人組織

對する時、そこに血もなく涙もなく、此關係をして益々惡化せしむるの狀勢を馴致した。蓋し此の法人なるものも亦理智的なる近代人が其の生活に不必要なる情實なるものを自然人より除却して造り上げたる一大發明として算すべきものである。

大規模なる組織、大規模なる經營によつて大規模に生産せられたる作品は從來の需要を充たすには過剰を生じて勢ひ國外に其の販路を求めざるを得ざると共に、其の原料の供給も之れを國外に仰がざるべからざるものを生じ來り、加ふるに人口の増加に伴ふ食料の不足は一時植民地の開拓によつて其の補給を得たるも世界の植民地の領域略ぼ確立したる今日に至りては、勢ひ通商貿易を以て之れを補給せざるを得ず、これと販路の擴張原料の需要とは相待つて、何れの國も國外への發展を餘儀なくせられ、強きものは弱きものを併せ、進んで伸びんとする世界政策は此資本主義と呼應して東印度會社を基調として終に印度を手中に收めたる英吉利帝國の地球上に散布せられたる其の領土は太陽の没する時なしとまで云はれ、之れに對する露西亞帝國は歐亞に跨る大領土を擁しつゝ更に南下せんとして英國と反目し、東進せんとして極東日本と衝突し、新興獨逸の帝國は一方東方政策によつて

世界政策  
と資本主義

ABCの  
三政策

土耳其より小亞細亞、進んでは亞刺比亞方面に出で、他方に於ては海軍を擴張して覇を英吉利と争はんとし、これら帝國と全く趣を異にせる共和政體を以て立つ米合衆國は從來大統領モンローによつて主張せられた米大陸の事は米大陸で處分し、他の大陸の干渉を受けざる代りに、自國も亦他の大陸のことに干渉せずとのモンロー主義なるものを抱持して居つたが、國內資本の横溢は次第に海外發展を企て先きに布哇を併せフィリッピンを得て力を亞細亞に伸べんとし、これら帝國と異ならざる態度を示し來り、世界大戰以前に於ける形勢は識者をして米合衆國は亞米利加(America)よりアラスカ(Alaska)を経て亞細亞(Asia)に出る三A政策を執り、獨逸は首府伯林(Berlin)より土耳其即ちビザンチン帝國(Bizantium)を経て西亞細亞なるバックダット(Backdutt)に進まんとする三B政策を有し、英吉利は亞弗利加の南端ケープ(Cape)より埃及のカイロ(Cairo)に出で印度のカルカッタ(Carucass)と連絡せんとする三C政策によるとまで評せしめたのである。世界大戰によつて獨逸の三B政策は霧消した。しかし米の三Aや英の三Cは雲散したといひ得るであらうか。其の形は變へ姿は改むるであらうが、各國が國外への發展を望むは其の國家存立に於ける己む

を得ざるの要求の之れに伴ふものあるを看逃すことは出来ない。

## 二 社會主義の發生

自由競争に任されたる貧富の懸隔は實に甚しきものあり、資本主義の隆盛に伴ふ労働者の苦境は眞に見るに忍びざるものを生じた、最初に此の悲境に同情し、愛憐の眼を之れに垂れたものは宗教家であり、慈善家であつたが宗教家の救済は個人的であり、慈善家の賑恤も亦斷片的たるを免れなかつたが、此懸隔此不平等を以て自由競争に任されたる近代資本主義社會の缺陷とし、此社會組織を改造して一定の計畫に基きて、集中化せられた統一經濟を立て、此缺陷を除却せんとする社會主義即ちソーシヤリズム(Socialism)なるものが發生するに至つた。此語は一千八百〇三年、伊太利で書かれたに初り、此主義の先驅といはるゝ英吉利のロバート・オーエンが一千八百二十七年に其の主宰せる雜誌に用ひ、同じく此主義の先驅といはるゝ佛蘭西のサン・シモンの弟子ジョン・シェール同三十二年に同派の雜誌に此語を用ひたのを初めとするので、ロバート・オーエンを出した英吉利は産

社會主義  
の提唱

サン・シ  
モン

業革命以後、最も激烈に資本主義の發達した所であり、サン・シモンを出した佛蘭西は夙に個人の自由、人類の平等を標榜して政治革命を成し遂げた所であり、現にサン・シモンの如きは亞米利加の獨立戰爭に加はり、佛蘭西の大革命を目撃し、其の政治的改造を以て寧ろ末なりとし、其の根本は經濟的改造で「各人は其の能力に應じて用ひられ、其の勞働に應じて報酬を受くべし」といふ原則を理想とし、非生産的な貴族等が生産的な農商の徒を支配するを不當とし、此遊惰な支配階級を追ひ、人に由る人の搾取を除いて、新らしき基督の精神を以て萬人が協力して、地球を搾取するの新社會を建設せねばならぬといひ、其の理想とする所は神の心を以て協同せよといふ。次で現はれたフリーエも、亦元來人間は神の造られたものであるから、人間の生れつき持つて居る欲望も其の儘に放任して置けば、人類の幸福は得らるべきであるのに、強て此欲望を抑へるやうな社會組織を造つたから此社會が混亂するのである。凡ての欲望を解放した社會、それが最も幸福なる社會であるとし、一種の社會組織を案出し、これによれば軍隊も警察もいらぬばかりでなく、罪人といふものもない幸福な社會が出来るといふ至極空想的なもので、彼が一千八百三十七年

フリーエ

に死ぬまで、何人も顧みるものなく、其の死後ヴィクトル・コンデランなる人によつて、其の實現を企てられたが、幸福どころか、紛争相續いで起り、終に失敗に歸した。

ロバート・オー  
エン

英吉利のロバート・オーエンはそんな空想ではなく、其の初めに於ては大紡績工場の經營者として實際的に愛の精神を以て勞働者の待遇を改良して着々其の効を擧げて居つたが一千八百十七年英吉利は産業革命後、最初の恐慌に襲はれ、製品は山と積まれて其の賣れ行きは全く途絶し、爲めに解雇せられたる勞働者は失業者となつて殆ど餓死に瀕するの狀態に陥りしを目撃して人間生活の幸福は生産と消費とが完全に調和せらるゝにある。然るに機械の發明以來生産力は増加したが勞働者の賃金は低下して之を消費するの力を減じ、こゝに生産過剰の恐慌を生ずるに至つたのであるから、機械を資本家の利益のために使用せず、社會全體の利益のために使用して共に勞働し、共に消費する社會組織に改めねばならぬの建白を出したが、政府も議院もこれを顧みざりしを以て實例を示して世人に教ふるに如かずとし、自國に於ては諸種の習慣や傳統が之を妨ぐるものあつて功を收め難しとし、一千八百二十四年に新大陸たる亞米利加に赴き、インヂャナ州に於て理想の村を

建設し、共同に働き、共同に生活することとしたが人がみな共同の利益を目標として共同の労働共同の生活を営めば其の理想も實現出来るが共同の利益より自己の利益を自分勝手に振舞ふが爲めに、彼れが殆ど全財産を蕩盡した計畫も亦失敗に終り、彼れをして徒らに「おれの計畫が悪いのぢやない、人間が悪いから仕方がない」と慨嘆せしむるに至つた。

人が皆神であつたならば、サン・シモンやフリーエの理想も實現出来たかも知れず、人間皆善人ばかりであつたならロバート・オーエンも失敗に終らなかつたであらうが、人は神ではなく、世の中は善人のみではない。然るに此人を以て此の世の中に此理想を實現せんとするは無理なる注文たるを免れない。此に於て是等の社會主義を一括して空想的社會主義と評し去つて、新たなる研究によつて此主義を立てたのが獨逸のカール・マルクスで、今日社會主義と云はれ、共產主義と云はれて居るのは此マルクスの思想から流れ出て居るのを主流とする。

### 三 マルクス主義と其の運動

人間の實相を充分に認識せず、社會に果して其の理想を實現すべき條件の存在するや否やも考慮の中に加へざりし空想的社會主義の人間を神に近きものと見たるに反し、これは又人間は獸にも近き搾取と反抗との斷えざる鬭争過程を辿りつゝ來りしものと見、其の進化必然の法則として科學的に立證せらるべき社會の實現を目標とし立論したるものとして、これに理論的基礎を與へて其の體系を整へたものは一千八百十八年ライン河畔のレットフェスに猶太人を父とし、猶太系の和蘭陀人を母として生れたるカール・マルクスである。彼れが一千八百四十八年、其の友エンゲルスとの共同執筆になる共產黨宣言(Communist Manifesto)は彼れの思想を最も端的に示されたるもので其の

「過去の歴史は總て階級鬭争の歴史なり」と筆を起し最後に、

「資本家をして共產主義革命の前に戦慄せしめよ。労働者の失ふ所は鐵鎖のみ。而して其の得る所は全世界である。萬國の労働者よ團結せよ」

と結びたる四章數項にわたる文章ほど、其の主義を明確にし、無産大衆を動かしたものは

空想的社會主義

「共產黨宣言」

ない。

此共産黨宣言に刺戟せられて労働者の國際的提携の運動起り、一千八百六十四年にロンドンに萬國労働者協會なるもの成り、これは更に一地方や一國だけの運動としてなすべきものでなく、各國の労働者が強く團結せねばならぬと一致して、一千八百六十六年にジュネーブに第一回の大會を開き、こゝに其の組織は完成し、マルクスは名目は獨逸の幹事となつて居るが、實際は此運動を指導して居つたのであり、これを第一インターナショナルの最初の大會として國際的に進出を企てたのである。

此マルクス主義の根本理論は唯物史觀の上に立つて居るので、彼れは人類社會に行はるゝ諸種の變化の原因を唯心的なる思想の變化によるものにあらずして唯物的なる經濟的關係に基くとし、特に生産關係の變化が諸種の原動力となり、これによつて組織せられたる社會制度も亦其の生産關係の變化によつて崩壊せられ、こゝに社會革命を醸成して新なる社會組織へと進むので、雛が卵を破つて出るまでは卵の殻は雛にとつて必要なものであるやうに舊時代の社會組織も其の生産力の發達するまでには必要であつたが、卵が雛となる

第一イン  
ターナシ  
ヨナル

唯物史觀

社會制度  
打破

如く生産力が次第に發達しては、これまで生命を保護した殻は却て邪魔物となつてこれを打ち破らねば、其の雛が發育しない如く、資本制度は曾ては雛を育つる殻であつたが今は生産力を妨ぐる邪魔物となつて居るので、此殻を破らねばならぬ、これを破るには資本階級の有する政治的權力を奪ひ取らねばならぬ、それには現下資本階級と握手せる支配力を奪ふ直接行動をも許容するので、此點は頗る無政府主義と一致せるものがあるが、其の理論的根據に於ても、其の目的とする所に於ても、マルクス主義と無政府主義とは全然相容るゝことは出来ないものであるが、現在の社會制度を打破するといふ一點に於ては互に共通する所を存したのである。

此に於て此第一インターナショナル運動に投じ來つたものに、マルクスより四歳の年長者として、一千八百十四年露西亞に生れた、ミハエル・バクーニンがある。バクーニンは個人の自由を高調すると共に社會の協同を貴び、人は此共同によつてのみ自由を認め得るが、國家の支配權力は少數者のために多數者を犠牲に供し、人の自由を無視して盲目的服従を強制するものであるから、斷然之れを否定し、少しも權力の加味せられざる自由契約

無政府主  
義

によつてのみ組織せらるべき社會を理想とし、私有財産制度を是認する現社會を破壊せんとし、一度びは露國官憲によつて、シベリヤに追放せられ、後、歐羅巴に還り來つて此運動に参加したが、もとゞマルクスとは思想的根據を異にしたるを以て、同一インターナショナルの中にマルクス派とバクレーニン派との二派を生じ、マルクス派はバクレーニン派の無政府主義を排斥し、其の結果内部の破綻を來して、こゝに第一回インターナショナルは創立後十有餘年一千八百七十六年に至つて消滅するに至つた。

第一インターナショナルは崩壊したが、マルクス主義は、これを契機として世界を風靡した。しかし、それはマルクスの理論が正當であり、確實であるといふためではなく、現在資本制度の暴横を指摘し、勞働階級の窮迫を縷述せる點に於て何人をも首肯せしむる事實が存在したからで、其の理論に對しては自らマルクスの學徒を以て任するベルンシュタインさへも、漸次、其の學說に疑義を挿み、其の主義に對して幾多の修正點あるを主張するに至つた。

## 修正主義

彼れは第一にマルクスが社會進化の根本要素を經濟關係であるといふに對して、それは

從來の傳統的觀察を一轉せしめた卓見ではあるが、これのみを以て、一切を規定せんとし精神的方面を閑却するを不十分なりとし、社會は生産關係といふ如き經濟的條件によつてのみ進展するものではなくして、法律、道德、或は宗教、藝術の如き精神的要素が働いて進歩向上するもので、これら精神的要素は、文明の發達に伴ふて、ますます重大性を帯び來るのであるといひ、又マルクスが資本主義が發達すれば資本は集中せられ、其の極少數資本家と多數勞働者との對立となつて中産階級は其の存在を失ふといふが、事實は之れを裏切つて社會の進歩に伴ふて更に新たな小工業や中工業が起つて中産階級も亦其の存在を失ふものではなく、マルクスは資本主義が極度に發達すれば恐慌が頻出して資本家も勞働者も共に倒れる時期が必然的に來るといふが銀行等の金融制度の發達によつて巧みに此恐慌が調節緩和せられて、之れが爲に階級闘争を激成して共倒れになるといふやうなことはないから、マルクスのいふ如く急進的に社會革命を起す如きは、決して完全な結果を得るものではない、寧ろ漸進的に議會政策により、其の理想を行ふべく進まんとし、社會民主黨なる政治團體によつて合法的に其の理想を實現せんとするので、獨逸社會民主黨は此の

立脚地の上に行動を進めたのである。

此ベルンシュタインの修正的思想と趣を同うするものは英國の社會主義たるフェビヤン協會の主張で、此フェビヤン協會は一千八百八十三年にシドニー・ウエップやバーナード・ショールによつて創設せられ、今日の資本主義を否認し、國家或ひは自治團體があらゆる生産手段を保有し、且つ其の管理運用をなすべしとする點に於てはマルクス等の主張と大差なきも、これを達成する手段は急進主義を排斥して、羅馬の勇將フェビウスが最後の日を待つた如く、靜かに資本主義最後の日を待つといふ至極穩和なもので、積極的に労働運動などを起さず、研究と批判と教化との力で漸進的に社會主義を實行するを信條とし、議會政策即ち立法の手段によつて、其の主張の貫徹を期するので、ベルンシュタインは此フェビヤンの主張によつて修正を唱へたのでなく、全くマルクス主義研究の結果、其の資本主義發展の經過に於てマルクスの豫言と一致せぬ點があるから、事實に關する認定を訂正したのでと主張せらるゝが多少影響する所がなかつたとは思はれないのである。

此のベルンシュタイン等が中堅となれる獨逸社會民主黨の斡旋によつて一千八百八十九

フェビヤン協會

第二インターナショナル

年に佛蘭西の巴里に於て、各國社會黨代表者が開きたる大會を第二インターナショナルといひ、第一とは全く態度を異にし、第一の時には加盟國も僅かに九ヶ國にして、其の代表者も労働組合とは直接關係を有せざるものが多かつたが、第二に至りては全歐羅巴の各國は勿論、濠洲、南阿、アルゼチンも加はり、一千九百十四年世界大戰の初まるまでには、加盟國は二十七、會員總數一千二百萬、其の代表者は皆な有力なる労働組合の代表者にして、徒らに空疎なる社會主義理論を論ずるのではなく、労働者團結の力によつて資本家に對抗すべき戰術が寧ろ實際問題として取扱はれたので、其の中に於て特に留意すべきは國際間に於ける戰爭は畢竟資本家の欲望のために行はれ、一般國民は其の犠牲となつて從軍を餘儀なくせらるゝのであるから、労働者は全然戰爭に反對すべしとの議論で、これは殆ど一致せられて居つたのであるが、世界戰亂が勃發した一千九百十年、コッペンハーゲンで開かれた大會に於て此非戰論を掲げて、總同盟罷工を執行して、各國家をして戰爭を停止せしむべしといふ主張を提示せられたが、戰端既に開け、各自の本國は國力を賭して戦ふて居るので、我れ労働者なるが故にとの理由を以て之れを傍觀し、其の反對を唱ふる如きこと

其の崩壊

は到底忍ぶ能はざる所なれば、此主張は全然否決せられて、各國の勞働者は各自其の祖國のために努力すべしといふことになつて、インターナショナルはナショナルリズム即ち國民主義となり、こゝに第二インターナショナルは崩壊するに至つたのである。理論は理論、實際は實際、祖國擁護の精神は無産大衆といへども、斷じて喪失せらるべきものではないといふ人心の機微を示した。

#### 四 社會事業と社會政策

社會主義論には多くの缺陷があり、其の社會事象の認識にも多くの誤謬があり、其の運動には幾多の危険性を有して其の社會的効果に對しては遽かに首肯し難きものあるは云ふまでもないが、彼等が指摘する所の社會的疾患は明かに現實生活の上に暴露せられ、無産階級の窮迫は目前に展開せられて居るのであるから、社會は決して袖手傍觀すべきではない。まことにルドルフ・オイケンが其の著「社會主義批判」の中にいへる如く、社會主義の唱道によつて、

社會主義  
の效果

- 一 人類社會に正當なる批判が喚び起され、
- 二 經濟問題の重要意義を有することが明白にせられ、
- 三 社會に於ける勞働者の地位が認められ、

たことは多とせざるを得ないので、其の理論に賛成する能はず、其の運動に同意する能はずとも、社會がこれらの窮迫を救ひ、これらの不均衡を公正にすべき方途を策すべきは當然の施設で、此事業は早く慈善家宗教家等によつて當面の窮迫を救ふべき個人的若くは團體的なる慈善事業が營まれ、専ら社會の一大疾患と見らるゝ救貧的施設が行はれ、更に一歩を進めて其の貧困を防止する方途まで講ぜられて居つたが、これらは主として<sup>くわんこやく</sup>鰥寡孤獨、疾病、不具等の個人的原因に基き其の救済も亦小規模たるを免れなかつたが、これを社會的施設として大規模に發展せしむることゝなつて社會事業(Social work)の名初めて亞米利加合衆國に於て用ひられ、從來の慈善事業其他一切の施設を包容し社會的疾患たる防貧救貧はもとより遍く感化救済に及び、特に是等の事業を一括し、進んで不幸なる市民の友となり相互に理解して社會理想を高めんとするセツルメント事業は早く一千八百八十五年英

慈善事業  
と社會事  
業



京ロンドンの東に設けられたるを初めとして各國に及び、特に米國に於て最も盛なるを見るに至つた。

しかしながら一種偏僻なる眼光を以て時代を観察する社會主義者は決して是等社會事業の完備を以て満足するものではない、彼等は之れを以て現代社會疾患の病源に觸れざる對症療法に過ぎずして僅に目前の苦痛を去るべきも、永遠の健康を復すべき根本對策にあらずとし、甚しきは有産階級の無産階級に對する欺瞞手段とまで罵倒し、現代社會疾患の根本病源は現代資本主義なる社會機構に存するので、之れを更改し去るにあらずんば到底社會を健康體に復することは出来るものではないとするので、其の極端なるものに至つては、現状打破を以て究竟目的とし、それ以外は問ふ所にあらずとするものをさへ生じた。其の最も代表的なるものは自らはマルクスの正統なりと稱して居る佛蘭西のソレル一派の唱へたサンジカリズム(Sandicalism)の主張であり、彼等は他の社會主義者が未來の理想を説くに反し、これを以て全く想像に過ぎない、我等はかゝる想像に依頼することは出来な

## 破壊主義

いが、現代資本主義社會の不合理なるは彼等の説く通りであるから之れを破壊せねばならぬといふので全く破壊主義である。これと共鳴したアイ、ダブリュー、ダブリュー(I.W.W.)詳しくはインダストリアル、ウオーカー、オブ、ザ、ウオード (Industrial Workers of the World) と云ふ組合があつて同じく破壊主義を主張して一時は頗る勢威を振つたものである。

しかも彼等の主張では當面の窮乏は救へない。よし對症療法といふとても、それを施さずしては社會の救済は出来ない。しかも社會事業は決して彼等の見る如く根本病源に目を閉ちて居るのではない。これと相提携すべき社會政策は各國に於て企圖せられて居る。社會政策主義(Social Politic)は又社會改良主義(Social reform)とも見るべく社會主義者の如く一意資本主義社會の打倒を策せずして、しかも彼等の指摘せる疾患を診察し、現代社會の根柢を破壊せずして、其の疾患たる社會下層の生活の不安を除き其の福利を増進し、其の地位を向上せしめんとするので、社會主義の如く破壊的なる主張や其の運動によつては決して彼等の目標たる無産階級の幸福増進や位置向上の計れるものではなく、却て社會を不安に導くのみであるとし、此闘争を離脱し一階級のみでなく全社會の福利を増進すべく

## 社會改良主義

講壇社會主義

一面に資本家の反省を促すと共に労働者の地位向上を計るべく、従来の如く個人の自由競争に任すことなく、社會全體の統制機關たる國家は宜しく之れに手を下すべしと主張するもので、一千八百七十一年獨逸のワグナーは土地所有の制限、租税賦課の公平、勞資兩者の協定、労働者保護法の制定、寡婦孤兒の救護、住宅の改良等の綱領を示し、翌七十一年には、此ワグナー並にシュモラー其他大學の教授連によつて社會政策學會なるものが設けられ、従来の民衆の聲として唱へられたる社會問題が大學の學者によつて取扱はるゝに至り、これを字して講壇社會主義(Catheder Socialism)と呼ぶが、其の根柢に於て現状打倒を主とする破壊的なる社會主義と異り、之れは現状の上に改良を施さんとする穩健なる主張として時の獨逸宰相ビスマルクも亦之れを採用して漸次これを政策の上に加味し來り、下より叫ばれたる社會主義が、政策として上より行はれ各國も亦茲に着眼し社會改良は着々其の歩を進むるに至つた。

獨逸に於ける社會政策の主張と呼應して佛蘭西に於て唱へられたるものに社會連帶主義(Social Solidarity)がある。ソリダリテイは連帶責任と譯し、もと債權債務等に應用せらる

る法律上の語であつたが、これを以て社會相互の關係を説くことは早く佛蘭西の社會學者コントによつて始り、これを繼承したる學者によつて夙に社會相互依存の連帶關係を主張せられて居つたが、レオン・ブルジョアは之れを社會政策の原理として高調し、社會主義者が階級闘争を事としてオイケンの評して「彼等自身一個の黨派を組織する結果として全體といふ觀念を狹隘にし、實行上却て分離抗争する傾向を有す」といへる如き状態を持續せる間に社會を全體として連帶關係の上に立つ相互依存なりとの思想は次第に社會を動かした來つたのである。

## 第二節 國際運動と國民運動

### 一 世界大戰の思想的影響

獨逸のゾンバルト教授がいへる如く近代思想の主流をなせるものは、一は人口の過剰に伴ひ食物の場所を得んとする海外發展の問題であり、他は其の分配を得んとする社會問題

で、其の海外發展は夙に植民地の争奪、販路の擴張、原料供給地の獲得となつて所謂資本主義と相呼應せる帝國主義となり、終に世界大戰にまで誘致し來り、社會問題は社會主義の運動、社會政策の提唱となつて現代に至れるのであるが、これらの思想に一期劃を與へたものは一千九百十四年より同十九年に亘れる世界大戰で、何しろ過去一百年間の戦死者に倍加せる戦死者を約五年間に出し世界の大国といはるゝ國々が皆な參加したのであるから過去の問題が、すべて總決算せらるゝと思ひきや、問題は依然として今後に残り、却つて其の紛糾を大ならしめんとする傾向をも生じた。

世界大戰  
の禍機を  
一掃せる  
か

試に見よ、此大戰に於て果して世界永遠の平和を計るべき企圖は畫せられたか。戦勝國の壓迫が戦敗國をして深き怨恨を懷かしめなかつたか。戦後の地圖の塗り更へが公平を得たといひ得るであらうか。食物の場所を得んとする各國の要求は此の爲めに何の解決をも得ず、地理上に於ける人口分布の不公平は何の調節せらるゝなく遺されて居るのではなからうか。殊に沉んや民族自決の名に於て戦敗國の領土を削減して小國を林立せしめたる新歐羅巴に禍機の伏在するなしといひ得るであらうか。抑も亦此原則を提出せる戦勝側の大

國特に英吉利の如き多くの異民族を包有せる國が其の爲めに自ら苦むの状勢を招きつゝ禍機を更に擴大するの傾向を有せないであらうか、かくて前古無比なる戦禍に驚き國際平和を企圖すべき聯盟の提唱せらるゝ裏面には、各國、戦前にも増して關稅の障壁を築きて互に自國の國力を充實せんとする國家主義は強調せられて居らぬだらうか。大戰の教訓は確かに一面に平和主義を擡頭せしめたと共に他面には各國をして國力の充實を痛感せしめた。

平和主義の提唱者たるウイルソンを出せる亞米利加合衆國でさへも參加を拒める國際聯盟の何時まで續けらるゝものなるやは不明であるが、戦後に於ける戦争回避の運動は諸種の協商に於ても行はれ、國際關係が非常に緊密となり、平和促進の方途を策しつゝあるの事實は看過することは出来ないが、戦敗國が其の賠償に苦み銳意産業の發達を計つて國力恢復を計りつゝあるはいふ迄もなく、戦勝國も亦多大の戦債に惱みて經濟的復興を計りつゝある事實は勢ひ國家本位に傾きつゝあるも亦否むことが出来ない。而して彼等特に大國と目せらるゝ國々の眼が疲弊せる歐洲より轉じて多大の資源と購賣力を有する東洋方面に向ひ、世界の問題が漸次太平洋岸より太平洋岸へと移り來れるも亦戦後に於ける著るしき

大戰と日  
本の地位

現象と見るべく、此大戦を契機として我が日本が押しも押されぬ世界の一大勢力となり、英吉利、佛蘭西、伊太利と共に國際聯盟の常任理事國となり、太平洋問題に關して英、米二國と共に三大勢力として認めらるゝに至つた事實も閑却することは出来ない。

更に世界大戦によつて激發せられたるものは民主主義の勢力で、今回の戦争が從來の如く單に軍人軍屬や爲政者のみの戦争でなく國民總動員を以て國家資源の枯渴を防がねばならぬ大仕掛のものであつた結果、國民の大多數を占むる労働者無産階級の活動を必要としたが爲めに、これら階級の擡頭を促し、政治上に於ては普通選挙の實施となり、之れに伴ふ無産者の政治的進出は、これらを地盤とする各國の社會黨若くは労働黨をして活躍の機會を與へた。しかしながら戦時中不自然に膨脹せられたる生産、戦後の世界を襲ふた財界不況特に大戦中に勃發したる露西亞革命を契機として獨、澳二國を共和政體たらしめ次で土耳其、希臘も共和國となり戦後新に獨立を認められた新興國家は悉く共和制を採用するに至らしめ、舊來の君主制を維持する英吉利、伊太利の如きも著るしく民主的傾向を増大し來つた。しかも其の反面に有力なる個人の獨裁政治が行はるゝに至つた事實も亦大戦の影

民主主義

獨裁的傾向

響として頗る注目を要する。舉國一致を要する戦争の常に絶對の統一者を求め、特に事の迅速を要する決戦に於て獨裁者を要し來つた事實は戦後民論の分裂し議會政治の頗る一致し難きを看取するや、こゝに獨裁的傾向を生じ、伊太利、土耳其、西班牙を初め葡萄牙、希臘、勃牙利、波蘭、匈牙利等に其の傾向を見、勞農露西亞も亦一種の獨裁政治なりと目することが出来るやうに世界戦亂は多くの矛盾せる思想を世界の舞臺へ展開せしめた。

## 二 赤化宣傳と愛國運動

世界大戦が齎らしたる思想的影響の最も大なるものは露西亞の革命と之れに關聯して世界的宣傳を企てられたる第三インターナショナルの計圖であつた。由來露西亞は極端なる專制政治を行ひ其の帝政の下に詭激なる反抗思想の醞釀せられて一千八百六十年代から一切の權力を否定する虛無主義(Nihilism)の運動行はれ、しばしば非常手段を以て帝王並に顯官を襲撃し、近くはアレキサンドル二世を暗殺したる如き歴史を有したるも、一般には文化の程度低く、其の近代的産業制度に進みたるも漸く十九世紀の末葉に屬し、従つて中歐

露國革命

に於て盛んに唱へらるゝマルクス一派の社會主義の思想も亦其の頃より一千八百九十八年ブレハノフによつて社會民主黨が組織せられて初めて其の思想の洗禮を受けたが、此ブレハノフ一派の漸進的にして漸次有産階級の政黨の諒解の下に社會革命へと誘致せんとするに對し、これを以てマルクス本來の主義に反するものとし、農民や労働者の直接行動によつて速に資本主義社會を轉覆すべしとするレーニン一派の急進的なる主張出で、先きに組織せられたる社會民主黨の第三回大會に際し、賛否を投票に計りし際、急進的なるレーニン一派が僅かに多數を得しを以て、これを多數派即ちボルシヴィキ (Bolshevik) といひ、ブレハノフ一派を少數派即ちメンシヴィキ (Menshevik) といひ、此多數派を英米に於て過激派即ちラヂイカリスト (Radicalist) の名を以て呼びしより一般にこれを過激派と稱しレーニン其の首領たりしが、露國官憲の壓迫甚しきを以て西歐に遁れて斷えず新聞雜誌に寄稿して同志を勵まし時機の到るを待ちし間に、世界大戰は勃發し、其の開戦當時に於て學國一致の狀勢を以て獨、澳に對せしも、戦後第二年の初夏以來の大敗は悲惨なる結果を國民の心裡に與へ、流言蜚語、頻々として起り、終に一千九百十七年三月の革命となり、こゝ

## 過激派

第三イン  
ターナシ  
ヨナル

に皇帝の退位を要求し、ケレンスキー等實權を掌握するの大革命を現出し、尙ほ戰爭を繼續せしが此の革命と同時に大赦令を發して亡命の社會主義者をして故國に歸らしめしを以てレーニン並にトロツキーの如き過激派も歸り來つて盛んに非戰論を唱へ、且つ此革命をして更に労働者の革命に發展せしむべく主張せしを以て、革命政府も亦之れを彈壓し、檢擧の手其の身邊に及びしを以て一時フィンランドに逃れて風雲を望み、着々準備を進め労働者並に兵卒を集めて赤衛軍を編成し、ケレンスキー等の漸次人望を失へるに乗じ、同十一月七日、此勞兵會即ちソヴェット (Soviet) を背景として一舉にしてケレンスキー等を追ひ、終に暴力を以て政權を掌握し、こゝに大革命を成就して「露西亞社會主義聯邦ソヴェット共和國」を建設し、其の憲法の第一條には「露西亞は労働者、兵卒、農民の代表者より成るソヴェットの共和國として宣言せらる、従つて一切の中央並に地方の權力は此ソヴェットより出づ」と規定し、マルクス思想の實現を其の國に計るのみならず、一千九百十九年、世界の過激分子をモスクバに集め、こゝに第二インターナショナルとは全く趣を異にする破壊的革命的なる共產主義的國際運動コムニニスト・インターナショナル (Comm-

minist International)略してコンミンテルン(Comintern)普通に第三インターナショナルなるものを組織し、世界の共産化を計るべき社會革命の氣運を促進すべく大規模なる世界的宣傳を企つるに至つたので、世界の思想的脅威これより甚しきはない。

既にいへる如く第二インターナショナルは世界大戰と共に崩壊し、各國の労働者おのの敵味方となつて其の祖國の爲めに盡くしたるを以て媾和成立と共に國際的に労働者の福利増進を計るべく毎年一回之れに加盟せる世界四十有餘國の政府代表者二名、使用者即ち資本家代表者一名、労働者の代表者一名を出して労働者保護を目的とする法規並に施設を國際的に協定する國際労働會議を開き、其の常設機關たる國際労働理事會は三年の任期によつて二十四名の理事より成立し、内十二名は政府代表、他の十二名は勞資双方より各六名を出さしめ國際労働事務局を置いて國際的に勞資の協調を畫し各國政府も亦社會政策を執り社會事業を奨励して労働者並に無産階級の福利増進を計りしも、時恰も戰時に於て不自然に膨脹したる生産設備を急激に縮少せざるを得ざる時機に際し勢ひ多大失業を生じ、加ふるに戰線より歸還せる兵士の就職難は人心の不安を招き、社會の現狀に不平を抱

國際労働會議

赤化宣傳の機

英米の反對運動

く徒漸く生ずるに乗じて社會革命を鼓吹する赤化宣傳は各國をして銳意其の防止に努めしめざるを得なかつたので、思想に對應するに思想を以てするといふ手ぬるき對策では、直に間隙に乗じて行動に移らんとする此宣傳を防止し得ざるを以て各國政府は各々法規を設けて之れが取締りの方途を劃し特に資本主義の最も旺盛なりと看做さるゝ米合衆國並に英吉利帝國の如きは嚴罰を以て之れに臨み、民間に於ても常に労働團體の中に潜入し來る露國共産主義を除却すべく、亞米利加に於ては一千九百二十五年ニューヨークに合衆國愛國協會(United State Patriotic Society)同二十六年には殆んど全國より代表者を出せる労働組合擁護委員會(The Committee for the preservation of the United State)を組織して盛んに反共産運動を起し、其の各國人種の寄合たる此國をして舉國一致の愛國精神を喚起すべく頻りに米國化(Americanization)の方途を立て政治、教育並に軍事教練に於て其の實現を期し、英吉利に於ても亦多くの反共産團體を生じ、中にも一千九百二十五年に創設せられた略してオー・エフ・エス(O.F.S.—The Organization for the Maintenance of Supplies)は労働者の生活支持の團體を以て労働團體に入り來らんとする共産分子を防ぎ、更に國民聯合

## 反對聯盟

其の他の團體を以て英國憲法を擁護して其の破壊を防衛するの運動は戦後に於て拍車をかけ來れる國家主義運動と呼應して愛國精神を煽り、國際聯盟の置かるゝ瑞西のジュネーブには第三インターナショナル反對聯盟 (Futurite International Center La Som International) なるもの設けられ歐米各國より代表者を出して各國共通の敵たる共產黨に當り、中にも佛蘭西に於ける其の支部は大に活躍し、其の愛國運動としては對獨逸の關係上戦時中より佛蘭西最も盛んにして、特に青シヤツ組シュミツブツグと稱せらるゝ愛國主義の一團の如きは共產主義を當面の敵として躍動して、赤化宣傳は却つて各國の愛國運動を激發したとも看取せらるゝのである。

## 三 ファッシヨとナチス

此愛國運動の最も熾烈にして終に全面に勝利を得るにまで至つたものは伊太利のファッシヨである。ファッシヨ運動は舊に反共産的の反動團體たるのみならず、民主主義の弊害、露骨に暴露せられ、其の代表機關たる議會は私黨私派の利權爭奪場となつて、國內の統一、

## 議會政治の腐敗

## 黒シヤツ

終に期し難きに至れるを看取し、獨裁的傾向を以て出現したもので、初めは社會主義を奉じて活躍して居つたムツソリーニが伊太利の世界大戰に参加すると共に非戦論を唱ふる社會黨を脱して國家主義に轉向し、戦後、社會状態の不安に乘じ急速の勢を以て社會を攪亂し來る社會主義特に共產系の活躍防止の必要を痛感し、一千九百十九年三月ミラノに、ファッシスト (Fascisti) なる團體を組織し、在郷軍人を黨の中樞とし、團員には悉く黒シヤツを着せしめ、軍隊的訓練を以て軍隊的行動を開始し、當時各所に勢威を擅にせし労働者の氣勢漸く挫くるに乘じ、政府並に資本家と呼應して社會主義防止に努力し、ソヴェット露西亞労働政府の慣用手段を逆用し、暴力を以て共產主義者を威壓し、終に社會黨に代る一大勢力となり、一千九百二十二年、時の政府が禁壓方針を此ファッシストに加へんとするの傾向を示すや、全國のファッシストは一齊に蹶起して羅馬に進軍し、時の内閣に迫りて之れを退職せしめ、終にムツソリーニを首班とするファッシスト内閣を出現し、ムツソリーニは長く一人を以て八大臣を兼ねて一切の權力を掌握し、國內にはファッシスト以外の社會運動並に政治運動を禁じ、且つ選舉法を改正して議會をしてファッシストの委員會の

## ムツソリ

如くならしめ鋭意國內の統一を計り、我等は國家あつて他あるを知らぬ、各個人の利害は全國民の最高利害たる國家の利害に隸屬すべきもので、資本家に權利もなければ、労働者に權利もない、唯だ有る所のものは國家に従ふの義務あるのみと絶叫して、國家なる絶對力を以て一切の統制を計る主義とし、且つ我等には實行あつて議論なしと稱し、徒らに議論によつて國家の主義方針を迷路に導くを拒み、獨裁的に處理して以て現代に於ける議會政治の行詰りを打開せんとして居るのである。

其の力を以て反對黨を壓服し、獨裁的に萬事を敢行せんとする點に於ては、此れは資本主義の現状の上に立ち、彼れは之れを打倒せる共產主義の上に立つの差こそあれ。勞農露西亞の手法と一脈の類似を看取することが出来る。即ち露西亞には共產黨以外の政治結社を許さず、苟くも共產黨の政策に反對を抱くものは之れを彈壓して剩す所なく、國民議會を解散して勞兵會總會を開いて新憲法を議決し中央執行委員會を中心として無産者獨裁の政治を行ひ、一方の右に傾かんとするに對し、一方は左に傾き、世界をして羅馬か、莫斯科かムツソリーニ流か、レーニン流かを想はしむるも其の共に獨裁的なるに於て揆を一に

獨裁的

レーニン

し、特に露西亞が次第に國家資本主義的に轉向し、世界革命を主張したるトロツキー一派を追ひ、専ら國內産業の興隆に力を注ぎ來たるに於て益々其の類似的色彩を濃厚にし、其の根本主義の一方の國家全體へ着眼せるに對し、他方が飽くまでも階級思想を把持し無産者獨裁を標榜するに於て大なる相異を見るのみとなつた。

伊太利のファッショと頗る相類似し、しかも其の立脚地に於て異なるものに獨逸のヒットラーのナチス運動がある。これは國粹社會勞働黨の主張として掲げられ、一時直接行動に出たことはあるが未だ伊太利の如く實現せられたのではないが、近代思想の一傾向として見逃すことは出来ない、特に此運動に就て注目すべきは猶太人排斥を出發點とすること、元來歐羅巴には猶太人に世界攪亂の陰謀ありとする思想の傳へられて、猶太人の秘密結社によつて定められた「シオン長老の議定書」なるものによつて明白なりとせられセミチツク人種たる猶太人排斥の浸徹せるに基き、ナチス運動は其の第一眼目として獨逸民族の結合をいふと共に猶太人を排斥し、猶太人は公民たるの資格なく、國政に參與し、又は國法決定の權利なしとし、且つ國家は公民の生活の安定を計るの義務あるを以て、若し全國民をし

猶太人排斥



民族的社  
會的獨裁  
的

て生活せしめ得ざる時は公民にあらざるものを國外に追放すべしとまで叫び、民族的には全公民は平等の權利義務を有するも、個人の行動は全體と衝突すること得ず、常に之れに束縛せられ、從屬せねばならぬとし、猶太人に最も多く見得る行動たる全體の利益を害する高利貸奸商並に國事犯に對しては嚴罰を以て向はざるべからずと宣し、更に勞働なき所得の廢棄、利子制の廢止等を提唱し、其の政治形態に於ては、今日の如き多數決制度を以て猶太人の攪亂的意圖に外ならずとして其の必要を見ず、軍隊の如く權威を下部に及ぼし、責任を上部に歸し、多數の議定によらずして全責任を負へる最も卓越せる少數人物の協議に基きしかも其の最後の決定は一人に任すべしとする獨裁的、民族的社會的の主張を有すると共に其の行動的なる所に濃厚なるファッショ的色彩を有するのである。

### 第三節 國民精神の動搖

#### 一 モタニズムと頽廢氣分

外國模倣

當時に於て必要なりし明治初期の西洋文化の輸入は、最早、其の必要の考慮せらるべき今日にまで傳統的に繼承し來り、特に一國の學府が外國語を以て教授し、外國語を以て學習したる當初の風は改められても、外國崇拜の學風は長く改められず、事實、明治初期に於ては銳意知識を世界に求むべく外國の學藝を移植するを要し、これによつて今日の進歩を見るに至つたのであるが、其の爲めに歐米に於て行はるゝ思想は悉く我が國に輸入せられ、善惡邪正を問はず、殆んど主義主張の展覽會の如く、我が國民思想の前に陳列せられ、資本主義も、帝國主義も、社會主義も、無政府主義も、共產主義も、ファッショも、猶太禍の思想さへも、我が國には其の見本を提供して居るので、歐米に發達したる物質文明の精華たる諸器械、諸用具の悉く我が國に輸入せられて日本は世界の百貨店、日本文明はサンプル文明、見本文明なりと評せらるゝと同じく、思想界に於ても其の傾向を有し、多大の動搖を國民精神に及ぼし、戦後、歐米各國を脅威したる第三インターナショナルの赤化の手は我が國にも潜入して前古未曾有の不祥事をも現出せんとするに至り國民精神の危機刻々に迫るを感じしむるに至つた。

サンプル  
文明

此憂患を更に痛切ならしむるものは大戦の慘禍を受くることなく、却て之れによつて黄金の雨獨り此國に降るにあらずやと思はしめたる北米合衆國の成金振りで、大戦に於て破壊せられたる歐羅巴の物質文明は悉く轉じて米合衆國に入り、世界の經濟の中心は英京ロンドンより亞米利加のニューヨークに移つたといはれ、亞米利加第一は即ち世界第一なりとの豪華は宏壯なる建築、整備せる道路となつて旅客を驚かすのみならず、其の大仕掛なる機械の利用による大規模なる資源の開發は大規模なる生産の發達、大規模なる運輸の進歩を促し、一千九百十七年即ち世界戦亂の當時に於て鐵道貨物の滯滞を緩和するため用ひたる自動車のみにても實に四十三萬五千臺、全國自動車數、實に五百萬臺と呼號せられ、石油王ロックフェラー一人の富にても二十四億萬弗以上と算せられ、其の他カーネギー・バスタード・ビルト等皆な巨富を要し、國民一人宛の富力も亦世界に冠絶し、殆んど物質文明に飽滿し、此物質以上心靈の問題を閑却したる近代思想は唯だ物質的に人生を享樂することを知つて、一切の物質に交換し得べき黄金に萬能の力を賦與し、之れの多少を以て直に人格評價の標準とし、人は外見を衡つて華美を競ひ、世は功利に走つて其の手段を選ばず、

物質文明  
の集大成

物質文明の盛觀を裝ふ裏面には大犯罪團の横行を見るも亦近代的なる亞米利加の世相である。

近代物質文明の精華は悉く亞米利加に集大成せられ、更に次ぎから次ぎへと人生を利便ならしめんとする發明の續出は現代人の生活を繁劇ならしめ、毫も靜思熟慮の餘裕を與へず、變轉極りなきスピード時代に處しては強烈なる刺戟にあらずんば感應せず、誇大の宣傳、俗惡の趣味は益々人心を咬り、一時の感興を貪り、刹那の享樂に耽らんとする氣運は、其の告白を露骨にし其の行動を脱白にし、特に男女關係に於て淫蕩の風は公々然として或は解放の名の下に、或は合理の假面を冠して青年子女を誘惑し去らんとし、曰く友愛結婚、曰く自由戀愛と、而して友愛は亂倫となり、自由は放縱となる。

此弊風は滔々として流れ來り、大戦當時歐羅巴諸國の産業衰微の餘澤を受けて、一時好景氣時代を現出せる我が國民に感染し、浮華の風、放縱の俗、遍く都鄙に浸徹し戦後世界的なる不況時代の襲來に接しても毫も警覺するなく、頼むべからざる景氣の恢復を夢想して依然として其の弊を持續す。此時に當りて、たとひ一時的なりとはいへ、國民を警告

## 浮華放縱

したものは大正十二年に於ける關東の大震火災であつた。此慘禍に直面しては浮華に慣れ、輕佻に忸<sup>ち</sup>みたる我が國民も一大戒飾を覺悟せざるを得なかつた。しかも大多數は茫然自失、其の方途に迷ひ更生の計を立つる能はざりし時、畏くも大正天皇は精神作興の詔書を下して、

「輓近學術益開ケ人智日ニ進ム、然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ、輕佻詭激ノ風亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ改メスンハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル」

とまで仰せて更生の方途を示され、國民も亦感奮して彼の歐洲各國が戰禍の中より振ひ立たとするが如く、更生の意氣盛んなるものあつたが、災後僅に數年、復興の事、漸く緒に就く頃より頹廢の氣分も亦復興し、所謂「咽喉元過ぐれば熱<sup>あつ</sup>さ忘るる」の諺の如く、時弊は益々増長し、利那享樂の風は深く青年子女の心を捉へ、ダンス・ホールに舞ふ蝶の如き痴態、カフェーに酔ふ泥の如きの醜狀、文藝に、映畫に、演劇に、繪畫に強烈なる刺戟を以て獵奇的本能充足の氣分を煽り、精神上の危機をして一層深刻ならしむるに至つた。

## 二 現代世相と思想の混亂

外來思想が浮雲の去來するが如く、單に我が國民精神の表面を出沒するならば、別段に心を勞するに至らないが、それが國民精神に浸徹し、國民生活を脅威するに至つては決して看過することが出来ない。社會主義の思想は早く明治の中期より我が日本に紹介せられ、其の末期に於ては直接行動にさへ移らんとするべきものもあつたのであるが、もとこれ外來思想に基く一時の幻影、去つて跡なきに至ると思惟せられたが、事實は之れに反して刻々其の禍害を深刻ならしむるに至つては、一面嚴重なる取締を要すると共に他面に於ては、これを我が社會事情に反省して之れが對策を講ぜねばならぬ。我が國の社會事情には果して社會主義を激發せしむるの傾向なきか。現代經濟組織は社會主義の主張を風馬牛相關せずとして聞き得べきか。予が其の委員の一人として調査したる中央教化團體聯合會の「教化事業調査會」は其の現代經濟組織より生ずる弊害を見て、

### 一 生産機關の私有と自由競争

(1)、資本家の優越

イ、産業獨裁（創業、擴張、縮少、閉鎖の任意決定）  
ロ、生産、販賣の獨占。  
ハ、利潤の搾取。  
ニ、金權の濫用。

(2)、労働者の窮迫

イ、賃銀の低下。  
ロ、労働時間の延長。  
ハ、労働の商品化。  
ニ、高度の分業と個性の没却。  
ホ、教養の缺乏と創造性無視。  
ヘ、失業の不安。

二 貧富の隔絶と階級的反目

(1)、貧富の隔絶

イ、少數資本家の富力集注。  
ロ、多數民衆の無産化。

(2)、資本家の利益擁護

イ、資本家の結合。  
ロ、株主と企業家との分離。  
ハ、金融と政權との結合。  
ニ、資本家の損失の民衆への轉嫁。

(3)、無産者の反抗

イ、大衆運動による示威強要。  
ロ、同盟罷業、怠業。  
ハ、國際的結合。  
ニ、社會組織に於ける疑惑、呪咀。

三 商工業の發達と都會集注

(1)、都會への憧憬

イ、都會の發達と農村の疲弊。  
ロ、文化の發展と農民生活の向上。

(2)、農村の生活難

イ、都會文化の農村への侵入。  
ロ、商工の利得と農村收入の不權衡。

(3)、労働豫備群の激増

イ、農村よりの都會集注者。  
ロ、失業者、其他。

と數へ擧げた。これ世界各國が近代産業の發達に伴ふ現代經濟機構によつて生じたる社會的缺陷にして我が日本も亦維新後、範を歐米に採りて産業の發達を計り、日清、日露の兩役を経て漸次隆盛に赴くに從ひ、此缺陷も漸く生じ、特に世界大戰の餘澤による好況時代に乘じ、産業の異常なる進歩と共に其の缺陷も亦多大となり來つたので、此狀勢に基く思

經濟狀勢  
よりの思  
想惡化

想惡化の傾向は、

- 1、自由競争に基ける利己心の旺盛
- 2、金權萬能に基ける道義心の頽廢
- 3、物質偏重に基ける人格重心の低落
- 4、利己中心に基ける公共心の缺乏
- 5、階級反目に基ける共同心の缺乏
- 6、社會不安に基ける刹那享樂の思想
- 7、生活困難に基ける自暴自棄の思想
- 8、都會憧憬に基ける奢侈心の普及
- 9、外來思想に基ける現状打破の興味
- 10、思想混亂に基ける暴力主義の發生

等を算し得る上に、特に我が國の國民經濟の現状より生じ來るものとしては、

一 富源の薄弱と國家經濟の膨脹

(1)、富源の薄弱と人口の過多

イ、天然資源の貧弱。ロ、耕地面積の過少。ハ、資源の濫獲及び不整理。ニ、人口密度の過多。ホ、人口増加率の迅速。

(2)、海外發展の困難

イ、植民地の狭小。ロ、移民地の極限。ハ、海外原料蒐集の困難。ニ、海外發展の困難。

(3)、國家經濟の膨脹

イ、國家の發展に伴ふ經濟の膨脹。ロ、國民負擔の過重。ハ、國民經濟力の國外流失。

二 經濟生活に於ける國民の不訓練

(1)、新時代の産業に於ける不訓練

イ、科學的研究心の微弱。ロ、科學的經營の不熟練。ハ、生産販賣に於ける冗費過多。ニ、農村に於ける因襲の尊重。

國狀より  
の窮迫

(2)、産業に於ける道徳心の薄弱

イ、粗製濫造。ロ、協力心の缺乏。ハ、目前利得主義の横行。ニ、勤勞忌避の風。

(3)、個人生活に於ける不合理

イ、二重生活に於ける經費過重。ロ、収入と支出との不均衡。ハ、消費合理化の  
考慮

を算することが出来る。即ち現代の文化生活に必要な鐵、石油其他の資源少き上に農業としての耕地少くして人口は非常の増加率を以て進み、之れを吐き出すべき植民地は少く、移民は制限せられて、土地廣くして人口少き國々を見詰めながら其の入ることを制せられ、國家は長足の進歩を以て世界の第一等國に伍すべく經濟の膨脹を要して國民の負擔を増し國民は又舊來の日本流生活の上に西洋流生活を重ねて其の生活を困難ならしめたる上に、更に、

三、特に現下に於ける經濟狀態と思想的影響

1、財界不況と生活苦

イ、企業熱の低落。ロ、資本家の警戒。ハ、失業者の増加。ニ、就職の困難。ホ、高等遊民の増加。ヘ、向上心の發達と生活苦の痛感。

(2)、外來思想の影響

イ、外國思想の無批判なる輸入。ロ、現状打破に於ける外國の事例。ハ、過激思想の使喚宣傳

等の加はりて、

- 1、生活苦に基く國家輕侮の觀念
- 2、道徳頹廢に基く投機心の旺盛
- 3、目前利得に基く誇大欺瞞の宣傳
- 4、組織に藉口する責任轉嫁の弊
- 5、生活不合理に基く虚飾虚榮の精神
- 6、外國模倣に基く過激思想
- 7、過激思想に對する極端なる反動思想

等を發生せしめたので、單なる模倣として片付け去ることの出来るものではなく、深く社會組織の根柢より考慮すべきもの多き上に、國民生活に直接的影響を與ふべき政治が眞に國民代表の機能を發揮せず、歐洲に於ても見得たる代議政治の弊害は憲政の運用に慣れず、自治の訓練に乏しき我が國に於て特に其の甚しきものを示して思想惡化を激成する。見よ、如何に政黨が利權爭奪に齟齬し、議會の墮落、議員の腐敗が國民の前に暴露せられ、中央政治は常に反對黨のために其の徹底を妨げられ、地方自治は政黨の混入のために其の運用を紊り、しかも其の根本たる議員選舉に於て投票の神聖を自覺するもの少く、利權や情實や權勢やの爲めに左右せられつゝあるかを。此の如きの狀勢に於て思想の次第に惡化し行くは寧ろ當然の歸結である。

### 三 思想對策の考究

思想は思想を以て導くを本義とするが、其の思想の行動に現はれて、社會の公安を妨ぐるに至つては國家は法の威力を以て之れを彈壓するの外はない。これ歐米諸國に於ても共

政弊と人  
心

法規の力

社會の改  
良

産黨禁壓に對して用ひ來れる手段にして、特に我が國の如き特殊の國體を有する國家に於て其の變革を企てんとする徒輩を出すに至つては嚴刑を以て之れに臨むは寧ろ當然の處置と目すべきで、國體變革と社會組織の根本的破壊たる私有財産制度の否認に對して昭和三年を以て治安維持法を發布して之れを禁壓することとしたが、法は人心の内部に入り込むことは出來ないから秘密裡に潛入し來る思想も、其の外形に現はるゝまでは之れを知ることが出來ず、如何に嚴刑を以てするも、社會の狀勢にして彼等の藉口すべき原因の伏在する限り、病弱なる身體に黴菌の繁殖するが如く、驅除を以てし、檢舉に次ぐに檢舉を以てするも到底これを一掃することは出來ない。寧ろ社會の病態を恢復せしめて之れに養ふに抵抗力を以てして病毒潛入の餘地なからしむるを必要とする。それには政治經濟兩方面の弊竇除却はいふまでもなく、社會政策の徹底を以て社會の不公正や個人生活の不安を除き去ると共に、現代教育制度の缺陷を填補して健全なる國民教養に邁進せしめねばならぬ。しかも、其の根本は思想に對するに思想を以てする本義に存し、如何に外より制度を革新し、社會を更改するも導くに方途を以てせずんば、隴を得て蜀を望み、依然として思想を

昏迷せしむるを免れない。こゝに新興精神振起の基礎工事を必要とするので、精神の振起と社會の改良とは相待つて思想安定の對策は講ぜらるゝ、曾て「現代青年は何が故にマルクス思想に傾きつゝあるか」の一文を稿して聊か其の方途に就て提言したることがある。左に之れを轉用し來つて所論を補ふの一助とする。

壓迫に對する反抗

壓迫と反抗

都會と云はず、地方と云はず、青年の氣分は今や時々刻々廣意に於けるマルクス思想に傾きつゝあるは争ふべからざる事實であつて、苟くも此思想に反するものは時代遅れの舊思想なりとして排撃し、清新激刺の氣を以てマルクス思想に傾倒せんとす。これ抑も何に職因するのであらう。都會は常に範を地方に示す、都會に於ける若き學徒のマルクス思想は地方に感染したのは事實であるが、其の都會に於ける若き學徒は何故にマルクス思想に隨喜するに至つたのであらう。それが單に新奇を競ふ一時の流行であるならば、やがては浮雲の如くに消え去るであらうが、此思想はなにか／＼に消え去らずして却て次第に深刻味を加へ來り、官憲の壓迫が加はれば加はるほど、隱約の間にそれが研鑽に心を傾け、秘密にそれが宣傳を企つるものあるに至るのは何故であらう。

青年には常に多分の反抗的氣分と冒險的精神を藏す、官憲の壓迫甚しければ、甚しいほど其の反抗に興味を持ち、其の冒險に氣概を示さんとするは、確かに青年心理の一面を爲すものにして、彼等をして自由に研究せしめ、指導宜しきを得ば彼等は更に其の新らしきものを求め、更に其れ以上のものを求めて、長くマルクス思想に低徊願望しつゝあるのではないのである。今日マルクス思想

が久しく青年の心理を把握しつゝあるは、寧ろ官憲の壓迫が之れを激成しつゝあるといふも過言ではない。

マルクス思想の危険

しかしながら官憲が之れを阻止せんとするも、決して無理なる處置ではない。思想は思想を以て對抗せしむべきもので斷じて官憲の威力を其の間に用ふべきものではないが、マルクス思想の危険視せらるゝは、單にそれが思想に止らずして其の立論の根柢が當面の事實に即し、其の斷案を直に實行に現はさんとする所にある。既に机上の談論を離れて街頭の事實に現はさんとする以上、其の事の社會の安寧秩序に影響するに於て、官憲の決して黙視し得べき所ではない。恰も徳川幕府が大に儒學を奨励しながら獨り知行合一を説き、其の主張を直に實行に現はさんとする王陽明學に於て壓迫を加へたるが如く、思想より實行に移らんとする一轉機、こゝに官憲の眼の光らざるを得ざる所があるのである。況んや其の思想の頗る詭激にして其の斷案の破壊的なるに於てをや。吾等は官憲の之れが取締に努力するを以て不當なりとはせぬが、此取締が嚴重なればなるほど、恐いもの見たさの好奇心や例の反抗、冒險の氣分が伴ふて壓迫益々加つて反抗従つて旺んに、到底これを根絶し得るものではない。

指摘せられたる社會の實狀

しかも、青年の此思想に向ふは唯だ新奇を好むといふ上調子の考や、反抗や冒險といふ稚氣に原因するのみではない。多くの思想の中、獨り此マルクス思想に傾倒し來るは、其の指摘する所の社會の實狀が如何にも當面の事實に即し、其の所謂資本主義の弊竇がまさ／＼と青年の眼に映じ得る

社會實狀の指摘

机上より街頭へ



からである。彼等が机上の空想より目覚めて社會の實狀を眺めた時、金權萬能の世の中に、如何に無産大衆が悲惨な状態に置かれつゝあるかは彼等の血を湧かさずには措かないのである。一切の現代の缺陷を資本主義に歸し、すべての罪惡をブルジョア階級に歸せんとする時に、マルクス主義の無理はあり、缺點は存して、少くし精到に思索し、仔細に闡明すれば他に幾多の原因あるは明かなるべきも、情に激して現實社會の不合理に痛憤せるものゝ、痛快なるマルクス思想に走らんとするは自然の勢ひで、若し社會にブルジョアの專横なく、プロレタリアの慘狀なく、政治に金權依頼の弊弊なく、公明に大衆の要求が表現せらるゝならば、千のマルクス、萬のエンゲルスありといへども、到底彼等を動かす今日の如くなるを得ないのである。

社會に此實狀あり、これを一貫するに階級闘争の思想を以てし、此現狀打破に對して青年の最も喜ぶ闘争心理を以てす彼等が之れに隨喜し渴仰するは當然にして、何れの時代といへども青年は反抗的氣分に富み闘争の興味を感じ、從順と妥協とは青年心理を動かす所以ではない、巧みに此心理を應用して煽動的言辭を弄するマルクス思想に多大の興味を感じ、一意これに傾倒して終に妄舉妄動に出んとするは勢ひの免る能はざる所で、彼等は必ずしもマルクスの唯物史觀を體得し、剩餘價值説を精讀して、徐ろに考へ、靜かに思ふて終に直接行動に出るのではなく、其の多くは隨喜し得べき斷片的理論に隨喜し、渴仰し得べき片言隻語に渴仰し、自己が思ふがまゝなる一個のマルクス偶像を作成して之れに拜跪しつゝあるに過ぎない。

#### マルクスに囚はる

勿論、若き學徒の中には眞摯なるマルクス研究者もあり、其の思想體系に傾倒せるものもあらん。

しかしながらマルクス主義は決して完備充實せる思想大系ではない。既に其の徒ベルンシュタインによつて修正せられ、又所謂マルクス直系といはるゝものにも、幾多の分派を生ぜるが如く、尙ほ修正填補すべき幾多の缺陷を有するので、彼等が研鑽一步を進め討究更に一段を加ふるあらば、所謂齊一變して魯に至るの一大反省を促し來るやも知ることが出來ない。彼等は信ずることを知つて批判することを知らず、祖述することを知つて探究することを知らず、マルクスに囚はれて、それ以外に一步を踏み出すことを知らない頑迷固陋のマルキストと成り了りつゝあるので、マルクスを離れてマルクスを見る、公平無私なる批判的態度にまで彼等を脱出せしむるは反マルクス學徒の大任務ではないか。

徒らにマルクス主義を攻撃するものはある。然れども、其の多くは斷片的の攻撃であり、片言隻語の批評であつて、其の全體系に向つて批判するものはない。これ其のより善きものを示さずして、妄りに之れを惡視するもの、此の如くにして焉ぞ彼等をマルクスの桎梏より脱去せしめ得むや。若し更に高きもの、更により善きものを示さば、向上の意氣に富む若き學徒の之れに向はざるの理あらんや。

#### マルクス以上の思想

マルクス思想の根柢を爲すものは、彼れが唯物的辨證法であり、唯物史觀である。今の青年をして此唯物的辨證法に隨喜せしめ、其の唯物史觀に渴仰せしむるに至らしめしは第十九世紀の唯物的傾向の結果であり、唯物教育の弊寶である。此唯物論に對抗すべき觀念論は事實に即せずとして一蹴し去られ、理想主義は迂遠なりとして排斥し去らるゝ、成程、從來の觀念論はあまりに唯心的で

あり、理想主義は現實と離れて居つた。しかし唯物物を包含し、現實に立脚したる一大體系は唱へられて居らぬのであらうか、又新たに唱道し得ぬのであらうか、唯物思想を此の如くに跋扈せしめたのは、確かに従來の唯心思想の空想的なるにあつた。しかし唯心思想の一方に偏するが如く、唯物思想も亦一方に偏する。物心一如の哲學の彼等を首肯せしむるものがないのであらうか、理想主義の歴史哲學は唯物史觀を修正するに役立ち得ぬのであらうか、阿片の如しと彼等が排斥し去つたる宗教は、生きたる人生の事實として彼等の前に展開するに全然無力なものであらうか、我等は今それらを論議するのが目的ではないが、兎に角、マルクス思想が人生の一面を見て他面を没却し、物質を見て精神を見ず、經濟を見て道德を忘れ、闘争を見て協同を逸し、肉を見て靈を棄てたる缺陷を有するを否定することは出来ない。マルクス思想も實は一種の反動思想であつて、中正穩健なる思想として全人生を導くべきものではない、其の偏僻を矯正し、其の缺陷を填補し、全人生を貫くべき一大思想體系の樹立こそ彼等を指導すべき唯一の目標であらねばならぬ、唯心より唯物へと展開し來れる思想の此二元合一の所に歸着點を求むる心は辨證法上寧ろ當然の趨向にして、現代思想は實に之れによつて救はるべきを思はざるを得ない、反マルクスの學徒中、未だ一人の此大企劃に志すものなきはマルクス思想をして徒らに跳梁跋扈せしむる所以ではないか。

今のマルクス思想に反對せるもの、多くは徒らに彼等の排斥せる傳統を強要して思想を逆轉せしめ、或は妄りに舊習の權威に立ち籠つて此澎湃たるマルキシズムの怒濤を堰止めんとす、之れ彼等を激發し汎濫せしむる以上、何の效果をも奏し得るものではない、水は之れを流るべきに流さしめねばならぬ、思想の水路を疏通すべき方途を講ずるのが現代の一大必要事である。

社會の合理化

思想は思想を以て導く、これ以外に他の方法はない、しかも其の思想を疏通すべき水路を開くにあらずんば沈滞不動、其の水は腐敗したる、其の思想を疏通すべき水路とは何ぞ、曰く現代社會の合理化である。如何に完備せる思想體系が彼等の前に示さるゝとも、現代社會の不合理が存する以上、思想は思想であつて事實と應同するものではない、此思想に應同せざる事實の存する限り如何なる思想も粉碎せられざるを得ない。小作争議に没頭する農村青年、必ずしもマルクスの一ページをも讀んだのではない、労働争議に應援せる無産大衆必らずしもマルクス學徒を以て任ずるものがない。しかも當面の階級闘争は彼等を驅つて其の學徒たり信徒たらざらしめんとするを得ざるものがある。恐るべきはマルクス主義者の使喚でもなければ、マルクス思想の研究でもない、社會を此闘争より救ひ、民心をして其の堵に安んぜしむべき社會の合理化である。

此社會の革新に目を注がずして、徒らに之れを抑壓制止せんとするも、それは却て青年の意氣を激昂せしむるに過ぎない。

何故に日本に多き

マルクス思想は其の當然の歸結として資本主義の旺盛なる處に於て最も多く氣焔を擧ぐべきものなるに、世界中最も資本主義の旺盛なる米合衆國に於ては殆んど氣勢揚らず、英國はマルクスの墳墓の存する所である、しかも其の邦人の多くは、其墓所の所在だも知らず、之れに詣づるものは露西亞人にあらずんば日本人なりとまでいはるゝは何の爲であらう、これを以て新奇を好む日本人の通弊なりとのみ見るは頗る淺見たるを免れない。早く勞資の問題を惹起せる英米二國は既にマルク

ス浸染の時代を經過して公正に批判し去り、佛蘭西、伊太利の如き其の主張に差異こそあれ、マルクスより脱出し得べき指導原理が示されたが爲めではあるまいか。

社會をしてマルクス主義者が指摘せるが如き弊竇より脱出せしめよ、これ青年をしてマルクス思想より脱出せしむる所以であり、學徒をしてマルクス以上更に高尚深遠にして、しかも現實に應同し得べき思想體系あるを知らしめよ、これ學徒をしてマルクス渴仰を放棄せしむる所以、徒らに自らは舊習に忤みつゝ此革新の氣分を阻み、社會の不合理を看過して獨りマルクス主義の不合理を責め、暴壓を咎めずして反抗を誦り、行くべき方途を示さずして妄りに阻止を計らば、何の日かマルクス思想の危険を脱し得べき。

若し其れモダニズムの伴ひ來る頽廢氣分に至つては、特に教育家宗教家の努力を以て唯物的人生觀の病弊を打破して人間としての靈性を自覺せしめ、身心一如の健全なる人生觀の上に人間本來の使命を體得せしめ、獸的生活より脱離して高尚優雅な精神を以て卑俗の趣味を一排し、向上發展の意氣を以て腐敗墮落の氣分を斥け、以て現實生活の淨化を企つるを第一義とする。

## 第六章 新興精神の基調

### 第一節 思想動向の洞察

#### 一 唯物的傾向と唯心的傾向

思想の流れは須臾も休まず。動あり、反動あり、表流あり、暗流あり、本流あり、支流あり、時に波瀾の重疊たることあれば、時に細漣小波の静けさを示すこともある。しかしながら大勢の動く所は略ぼ方向を示して大體の歸趨を察せしめる。中世の宗教萬能より離脱し來れる西洋文明の理智的に唯物的にと動き來つたのは近代思想の本流で、信仰より經驗へ、宗教より科學へと向ひ來つて、こゝに理智的、唯物的、經驗的、科學的なる近代文明を醸成したのであるが、人は理智のみで満足するものであらうか、世は物質的にのみ理解せらるゝものであらうか、經驗未到の天地は尙ほ未だ廣く、しかも到底人智の經驗を以

「西洋文  
明の没  
落」

ては領知せられざる幾多の領域を剩し、科學萬能の世の中にも、科學を超越する問題の殘留するを思ふては、人類思想も一轉し、近代文明に就ても疑惑を懐かざるを得なくなつた。獨逸のスベグレルは「西洋文明の没落」を著して文化(Kulture)と文明(Civilization)とを分ち、文化には理想があつて動くが文明は固定して終に没落の運命を免れない、上代の文化は希臘に赫灼として輝き動き、羅馬の文明となつて化石し固定して終に没落し、近代の文化は獨逸に發動し十九世紀の文明となつて、やがて滅び行くべき運命を有すといふ。文化を精神的に見、文明を物質的に見て、文明の行詰りを語る。まことに十九世紀には文明あつて文化なく、精神方面は其の一半を閑却せられ、たゞ物質を利用し物質を更改すべき理智の方面は著るしく尊重せられたが、情意の方面は顧らるゝこと少く、偶まその語らるゝものあれば、人の動物と相距る遠からざる本能の充足以外に一步を出でず、進んで深く心靈の秘奥に觸るゝことは少く、人の表面を見て裏面に徹せず、たゞこれ人の半面で全面を見たものではなかつた。

理智尊重

人は果してこれで満足するであらうか。此唯物的なる思想表流の裏面に唯心的なる暗流

哲學の傾  
向

の次第に動きつゝあるも亦當然の趨勢で近世哲學の劈頭に於て既に唯心的なる推理派と唯物的なる經驗派との對立はあり、或は一元或は二元と相争ひ、哲人カント出るに及びて、一たび綜合統一せられ、經驗に基く純粹理性と思索に基く實踐理性とを示して人間心理の奥底を叩いたが、フイヒテ出で、更に其の兩者の根本として唯心的なる絶對我を説くに對し、シェリングは著るしく唯物的傾向を發揮して非我の客觀より主觀の我を生ずとし二者異を樹つるの時、大思想家ヘーゲル出で、之れを絶對的理想に歸入せしめ、其の發展の順路として有名なる辨證法を説く等、第十八世紀までの精通博大なる哲學は皆な唯心的色彩の上に現はされて居つたが、第十九世紀に入るに及んで、頗る唯物的色彩を濃厚にし、其の主要なる思想の代表とも見るべき佛蘭西のコントは人類智識の階段を三期に劃し、第一期は神學の時代で、天地間一切の現象を神の力で解釋せんとする宗教的考察の時代。第二期は何事をも心の内で考へ出した抽象的思想を以て解釋せんとする形而上學の時代で尙ほ充分でないが、今や第三期の實證時代に入り心の内で考へた空理空論でなく自己の經驗と觀察とを基礎として一切の現象を研究せんとする科學的時代をいひ、此科學は近代思想の

科學の時  
代

## 生物進化

主流となり、これと相前後して人類思想に大影響を與へたものはダーウインによつて唱出せられた生物進化の理法で、これによつて從來獨り神の特寵を誇つて居つた人類を九天の上より九地の下に降すが如く、他の動物と何の異なるなき生物の始源より發達進化し來れるものに外ならずとし、次でハックスレー、ヘッケル等の學者益々研鑽を究めて生物學に一變化を與へるのみならず。人類社會も亦此進化の歷程を辿つて野蠻より文明へと進み來れるの事實は、從來未だ學者の念頭にも浮ばざりし各地方各民族の生活狀態が此時代に於ける歐羅巴各國の世界的發展に伴ふ亞弗利加内地の探検や、中央亞細亞の大旅行、さては南洋の島々、南北極地の探検等によつて實地踏査の資料は提供且つ證明せられ、此進化論を経とし、先きのコントの實證主義を緯として一切の現象を説明せんとするスペンサーの綜合哲學出で、社會も亦此進化の道程を明かにし、進化の説は時代を風靡し、科學は萬能の勢威を示し、人間心理の現象をも其の物質過程たる身體生理に遵據して之れが説明を企て、終に哲學をして科學の臣僕たるに至らしめた。

## 社會進化

しかし經驗を基礎とする科學の發達は、其の精緻を究めんとすればするほど部分的に陷

科學より  
哲學へ

## 精神生活

り、其の確實を期せんとすればするほど専門的に分科せられ、或る科學者の如きは一つの苔の研究に一生を送るといふほどに専門的となり、終に科學の大家たるオストワルトをして今や部分的研究たる科學の時代を経て、一般的研究たる哲學の時代に入るべきであると呼號し、靈活なる人間を以て機械と同一視するは極端なる矛盾にして、世界も亦人と同じく決して機械と同視すべきものでなく、物質はたゞこれ思想の形式に過ぎずとする唯心的傾向に轉換せしめ、一部の人々にはカント以後の哲學者なりとまで云はるゝ佛蘭西のベルグソンも其の初めにはスペンサーの哲學に心酔した唯物系統より一轉し來つて天地間一切の物は悉く運動し、變化し、成長しつゝある中に、不斷の創造あり、此創造こそ自然界の法則を超越したる精神生活の生命で、我等の知識は此生命によつて直覺せらるゝことによつて造り出さるといへる所謂生命の哲學を唱出して、分析的方法のみによる科學を超越して直覺の天地を開き、獨逸のオイケンモは深く人心の内面を洞察して、其處に個人モの人格を超越したる普遍的なる精神生活の存在を見出し、此精神生活の源泉より迸り出でたる新たな生活によつて他人と新らしき生活を結ぶ上に現在の人類を更に優よれたるものとし、現

在の社會を更に優<sup>すぐ</sup>れたるものたらしむとする等、科學より哲學へ、唯物より唯心へと轉向し半面の人より全面の人を見るべく進み來れるを看過することは出來ない。

此傾向は之れを社會思想の上にも見ることが出来るので、一たび社會の發展を理想の開展としたるヘーゲルの辨證法を以て逆立<sup>さかだち</sup>とし、社會は理想によつて開展するものにあらずして物質的なる經濟條件を基礎とすといへるマルクスの唯物史觀出で、社會の科學的研究は其の歩を進め來つたが、ベルンシュタインの修正によつて此唯物史觀にも多大の唯心的色彩が施され、一方マルクス直系といはるゝ思想系統によつて社會科學の研究が提唱せられ、社會科學といへば唯物史觀の外なきが如く思惟せらるゝ間に、ベルンシュタインによつて一石を投ぜられたる唯心的色彩は人と物、即ち自然と人生とを區別して人格の品位と尊嚴とを、物質以上に認めたるカントの哲學に向はんとする修正派の人々を生ずると共に、カントの哲學に立脚して社會主義を觀察した人々をも生じ、一千八百九十六年、シュタムラーが「唯物史觀に倣ふて」と書き添へて社會哲學の一研究と題し「經濟と法律」なる書を著しカント派の理想主義に立脚してマルクス派の人間の心は經濟關係によつての

み規制せられ、人間の歴史は此經濟關係の必然的なる變遷によつて動き來るといふに對し、此經濟關係も畢竟、人間、心理の發現で、人類の歴史は人類が理想を追ふ心の進みの現れで、マルクス派の人々の現在の社會を否定して、更により善き社會を建設せんとするも亦理想の現れに外ならず、經濟的任務は決して人生生活の最高理想でなく、人生には經濟以上更に高く且つ大なる理想あつてこそ進歩向上を計らるゝので、單に經濟關係を以てのみ人と人とを結合せしめんとするも、之れを統ぶるの理想なくんば、却つて人と人とを反目分離せしむる以外の何ものでもないとして、こゝに社會科學に對して社會哲學といはるゝ一方面を展開し、唯物主義の行詰りは疏通せられんとしつゝあるのである。

## 二 思想問題と宗教問題

唯物思想は終に行き詰りを示した。しかし之れが爲めに物質が消盡したのではない。我等の客觀界はすべて物質を以て満たされ、主觀の發源地たる此「我」さへも物質を以て形成せられたる身體以外に存在するものでないから此身體生存に必要な物質の需要供給を

計るべき經濟關係を離れては一日の生も保つことが出来ない。既に生存なくして何の「我」であり、精神であらう。我等の精神が客觀的な環境の力によつて動かさるゝは事實であり、我が精神が物質的な身體の事情によつて左右せらるゝも亦事實である。

蓋し宇宙は客觀的な物質と主觀的な精神とによつて構成せられ、「我」も亦心身の二によつて成る。一つを離して他をのみ採らんとする素朴なる唯心唯物の一元觀の到底容認せらるべからざるはいふまでもなく、此兩者をして相互に對立した獨立體とする二元論も亦容認し難い。主觀の客觀に影響し、物質の精神に關聯することは身心相互の關係によつても體認し得る所で、此二者もと二物にあらず、身心を統一する根本實在の上に二者其の趣きを異にし、猶ほ圓形の外よりは凸と見、内よりは凹と見るも其の體に異なるものあらざる如しとする現象即實在論によつて綜合せらるゝも、其の實在を精神的とし物質を其の發現とするか、其の根本を物質的とし精神を其の發現とするかに於て心的一元か物的一元かの差を生ずるが、物的一元に於ては當然此宇宙活動を以て機械的(Mechanical)と見て、必然の法則以外一步も出づる能はざるものとするが、若し此宇宙活動が單なる機械的な繰返

主觀と客觀

機械論と目的論

しでなく、其處に理想あり目的あつて進化の大道を辿るとしては、勢ひ目的論的(Teleological)見解を取らねばならぬ。既に目的論の見解を取る以上物質的見解は放擲せねばならぬ。宇宙は進化の歷程を辿つて終に最高動物をも發現せしめた。此人類の世界はオイケンの云へるが如くたゞ生きんとして生活する動物的な感覺世界の外に、此感覺世界に反抗して獨自の道を開き、更により善く生きんことを望み、深き思索に基く批判と選擇とによつて目的を進まんとする行動の世界がある。感覺的に生きるものは、偶然と暫有と目前の印象との奴隸となつて動くに過ぎないが、行動の世界に生きるものは、自己の計畫を立て、すべての障礙を排して其の目的の實現を企て、これを標準として行爲を從屬せしめ行く。人類文化はこれによつて創造せられたので、既に人類文化の開展といふ事實の儼存する以上、人間活動を無目的なる衝動によつて動く本能活動とも、無理想なる機械活動とも見ることが出来ず、従つて此人間を現出せる宇宙活動を以て無目的なる機械活動とは見ることが出来ない。此目的を以て宇宙萬象を超越せる神の思召とする所に一神的信仰は出で、宇宙萬象の上に伏在する佛の顯現なりとする所に汎神的宗教は組立てられるので、科學より哲

哲學より宗教へ

學へ、哲學より宗教への歸向は思想當然の趨勢と見ざるを得ない。

しかし唯物論者は其の當然の歸結として此趨勢には反抗せざるを得ない。彼等は敢然として宗教を以て冥闇の夜に輝く螢火に過ぎずして科學の太陽の前には其の光を失ふべきものと揚言し、唯物史觀の上に立つマルクスは「宗教は人間が自己自らを中心として動く様になるまでの間だけ、人間の周圍をめぐる幻想的太陽に過ぎない、此幻想的太陽を批判して克服するにあらざれば人間は眞實の生活に入ることには出来ない」宗教は抑壓せられたる活き物の嘆息であり、民衆を酔はしむる阿片である」といひ、盛んに反宗教思想を煽り、其のマルクス思想の實現とも見るべきソヴェット露西亞に於ては無神論者に限り共産黨員たることを得とし、無神同盟を組織して盛んに教會の閉鎖を行はしめ且つ十八歳以下の者に宗教教育を施すことを嚴禁して居る。

彼等が攻撃するまでもなく、近代科學の發達に伴ひ、基督教は其の權威を失墜すべく餘儀なくせられた。其の教義の發足點たる神の天地創造は、宇宙の進化を語る星雲説によつて、其の中心たる神の人類創造は生物進化論によつて、而して神の子として特別に救済の

宗教への  
反抗

宗教改造

力ありとせられし基督も亦人間に外ならずとして、従つて人類文化の淵源たるべく獨り其の權威に誇りたる基督教も亦宗教進化の歷程を経て發生し來れる一段階に過ぎずとして、異端外道と排斥する他の宗教と同列に比較せらるゝ比較宗教學等の發達によつて、最早、昔の如き信念を繋ぐに足らず、曠古無比なる世界戰亂の大慘劇を彼等の所謂基督教國に現出せしめて之れを救ふ能はざるほどの無力振<sup>むじやくぶ</sup>を發揮し、よし反宗教にあらざるも、無宗教に、無宗教にあらざるも傳統的習俗として殘留する以外、深く人心を把握する能はず。宗教改造の聲は早くも一部の識者の間に起り、亞米利加のエルワードは「宗教改造」なる一書に於て「現代社會の最大要求の一は現代生活の要求に適應し、現代科學と調和せる宗教である」といひ、一千九百十六年英のデッキンソンと會談した時に「目下世界に最も緊要なるものは宗教であるが、其の宗教も世間に有り觸れたるものにあらずして眞の宗教である」と語つたといひ、又フレデリック、ハリソンは「明かに今回の歐洲大戰の最大原因は倫理的宗教の頹廢にあるから、これの解決せられざる限り、世界の平和は恢復しないであらう」と語つたといふ。



人生は闘争のみにて持続せらるゝものでなく、人は宗教なくして安定せらるべきものではない。麵麩ペのみにて生くる能はざる人間は、麵麩なくして生くる能はずとして邁進せる近代的傾向のみにては満足することが出来ず。物質的なる反宗教運動に刺戟せられて、宗教改造へと覺醒し來つたのも亦最も近代的なる思想動向として觀察することが出来る。

### 三 全社會へ全人間へ

個人の自由に發足したる近代思想は、激甚なる自由競争を演出すると共に自己中心の思想を旺盛ならしめ、權利の主張に専心して義務の遂行を忘れ、其の極、他の利害を顧慮せざる利己的爲我的の思想をも發生せしむるに至つた。これが民權擴張の動力ともなり、自治精神の涵養ともなり、獨立の氣象を近代人に養成せしめたる効果は頗る大なるものもあるも、全く他を度外視せる弊風は一たびミル、ヘンタム等によつて最大多數の最大幸福へと轉向せしむべき功利學說によつて矯められたが、其の最大多數の幸福の名によつての競争は、依然として社會の不均衡を促進し、終に社會主義の發生へと馴致し、個人より社會

權利思想

個人より  
社會へ全社會へ  
の着眼

國家中心

への轉向は確に近代的なる一大思想となり、其の社會主義に共鳴すると否とを問はず、自己以外の大衆へと目覺め、社會生活へと覺醒し來つた事實は從來社會主義を思むこと蛇蝎の如くなりし各國政府が盛んに社會事業を獎勵し、社會政策を採用し、鋭意社會的施設を以て社會全般の福利増進へと努力せるに見ても明かで、勿論これらの施設は社會主義の破壊的なるに對し、建設的に、社會主義の階級的なるに對し、全般的に企圖せられつゝある所に根本的差異は存するが、社會全般に着目し來れるは否むべくもなく、更に其の社會主義者と著るしく異なる所は彼等が横に國際的に階級の聯絡をいふて、縦たに社會全體として統制せられたる國家を無視するに對し、此れは全體社會として統制せられたる國家に立脚し、其の統制範圍に於ては全體のために個人の自由にも幾分の制限を付せんとするので、先きに擧げたる伊太利が「資本家に權利なし、労働者に權利なし、たゞ國家に對する義務あるのみ」といへる如きファッシストの國家中心はいふまでもなく、獨逸が新憲法百五十三條第二項に於て「所有權は義務を負擔す、所有權の行使は同時に公共の福利の爲めにすることを要す」と規定して從來個人の自由に任したる所有權に制限を付したるが如きも亦國

家を中心として全般の福利へと向へる一例として見るべく、初めは横に國際的に赤化宣傳を主とし世界革命に驀進したる露西亞が漸次縦に國內へと其の着眼を轉向し、徐ろに經濟計畫を樹立し來れる如き其の出發點を異にするも先づ國家へと傾き來つたのも亦看過することが出来ない。

## 全分の關係

現在に於ける人類の生活に於ては國家以上の統制機關はなく、國家は全體として社會を統制すべく、個人は其の一部分として國家統制の下に其の生を保つての實狀にあつて其の一部分たる個人を離れて全體たる社會は構成せられず、全體たる國家なくして一部分たる個人は生活は安定せられず、全は分によつて成り、分は全によつて保たるゝ此全分の關係は更に社會の成員たる各個人と個人との關係をして、各々全體の一部分として相互脈絡貫通切つても切れない連帶關係に立つとする社會連帶の思想は全たる國家が分たる各個人の生活の安定を計るべき社會政策の根本となり、分たる各成員が全たる國家に對する社會奉仕の基調となり、從來權利のみを骨張したる各個人も社會的に共通の義務あるを自覺せしめ、相共に國家を中心として全般的福利の増進へと着眼し來つた此傾向は個人より社會へ、

鬭争より協調へと動き來るべき思想流動の過程を語るものとして看取するを要する。

## 全き人間

かくて階級より全社會へと轉向し來れる社會思潮と共に、單に物質的なる生理的部面によつてのみ人間を見んとし、よし其の精神をいふも理智のみを中心として人間を見んとしたる近代思想も亦其の方向を轉じ來つて機械としての人でなく、動物としての人でなく、人としての人、即ち人 (Man) を見んとし、亞米利加のウイリヤム・ゼームスは其の唱道し來れるプラグマチズム (Pragmatism) 即ち實用主義なる一書に於ては從來の唯物論者や科學者が専ら理智の上に重きを置き經驗にあらざれば眞理は成立せずと見るに對し、其の經驗は我等が情に於て興味を感じ、意に於て欲求することによつて注意を拂ひ、これによつて理智的なる認識は成り立つので、人生の一切を理智によつてのみ判斷し去らんとするは皮相の見地たるを免れずして其の奥に潜める情意の偉大なる力を閑却することは出来なるといひ、宗教心理學者プラットは「予の論點は全き人間 (Whole Man) は人性の一小部分たる理性とか知覺とかいふ表面のもののみでなく、人間を指導する理想は更に奥深き方面より發動するといふことである」といひ、先きにも、しばしば引用したるオイケン「社

會主義者は人間の經濟生活のみを見て精神生活を閑却して居るから決して全き人間を見て居るのではない」といふ等、人間觀に一轉化を與へつゝあるといふことも亦看逃すことは出来ない。

此人間觀の轉化は人間を取扱ふ法律の上にも現はれて、昔は法律は頗る簡單で且つ概括的であつたから、一々の事件に對しては裁判官の心證や地方の習俗に従ひしたため、名裁判官なれば最も適切な裁判も出來たが、普通は情實の弊に陥り、不公平なる裁斷に苦むものゝ少くなかつた傾向より一轉して近代法律萬能の世の中を現出し、法の明文を固守し物的證據に遵據する理智的裁判は情實に陥るの弊は之れを避け得たが、一々の事情に應同するには、其の行爲の現はるゝ社會事情や周圍の環境、さては本人の生理的素質をも考慮し、其の犯罪行爲を防止すべく寛嚴宜しきを失はざる情狀酌量の自由や、刑の執行に對する充分の留意がなければならぬ。此必要は近時刑事政策の範圍廣められて杓子定規の法の適用以外に人其者を考慮せらるゝに至つたので、こゝにも唯物的理智的なる人間觀より全人への轉向を見得るのである。

刑事政策  
へ

我等はこれらの動向を一括して中世より近代へ、近代より現代へと進み來れる思想の潮流を、

唯心より唯物へと動きたる近代が唯物より渾一へ、階級より個人へと動きたる近代が個人より社會へ、壓抑より鬭争へと動きたる近代が鬭争より協調へ、情實より理智へと動きたる近代が理智より全人へ、と流れつゝあるを看取せざるを得ない。而して此看取によつて我等を促し來るものは東洋文化の再吟味である。

思想動向  
の概観

## 第二節 東洋文化の再吟味

### 一 東洋文化の特質

一は印度洋より太平洋に向ひ、他は地中海より大西洋に向ひ、東西背中合せに發達した

海の文明  
陸の文明

る東西兩洋の文化が其の趣を異にするものあるは既に之れを見た。西洋文化も其の源を東洋に發し航海に於て最も優ぐれたるフィンシャ人を介して海路希臘半島に入り、更に伊太利半島へと海から海へと傳へられ、歐羅巴大陸より海を渡つて英吉利へ、而して又海を渡つて亞米利加へと擴がり、東洋の文化は印度より陸路中央亞細亞へ、中央亞細亞より支那へ、支那より朝鮮へと陸によつて傳へられ、僅に海を渡つて我が日本に入つたので、西洋の文化は海の如くに流動して速かに傳へられ、東洋の文化は陸の如くに遅々として歩みを進めた。海によつて傳へられたる文化は時代に於て變遷し希臘の哲學文藝、羅馬の政治法律、中世の基督教、さては近代文化の源頭を爲せるチュートン民族の自由思想と次ぎから次ぎへと歴史を辿るべく、陸によつて擴がりたる東洋文化は山河これを隔離して寧ろ印度文化、支那文化と地によつて區劃して見るを要するが、大體に於て西洋思想特に近代に於て著るしきものは自我の發展で、近世哲學の劈頭に出でたるデカルトが一切の存在は疑ふべきも「我思ふ故に我あり」として我の存在を中心として思考をめぐらしたるが如く自我を骨張するの傾向は明かに看取すべく、東洋思想特に佛教に於て自我の克服を出發點とし

自我と無我

辯論と沈黙

權利と義務

自然の克服と自我の克服

て無我を強調し、それと稍々趣を異にするも儒教に於て克己復禮を説きて自己の私心に打ち克つべきをいへるも亦西洋思想と甚しく説相を異にするを見る。

此大體に於て自我骨張の傾向を有する西洋に於て希臘羅馬の昔より自我の表現たる辯論術の發達し、「オレトリ」(Oratory)「フロキトシオン」(Elocution)等の雄辯法の研究せらるゝに對し、自我克服を修練の工夫としたる東洋に於て印度に禪那と稱する靜慮の工夫あり、支那に存想とて深き沈黙を説き、靜坐とて正しき冥想をいひつゝあるも決して偶然ではなく、従つて西洋に於て自我の骨張たる權利の觀念夙に發達して法律の進歩を促し、東洋に於て他人に對する自我の抑制たる義務の思想早く唱へられて道德の發源とせられたるも亦偶然ではない。

特に近代西洋は此自我を中心として其の經驗と觀察とを重んじ、其の基礎によつて生活の利便を計らんとする計圖は諸種の機械の發明となつて、自然を克服し利用すべく進み、東洋人の久しく自然を自然として自己の心を克服せんとしたるとは甚しく趣を異にし來つた。西洋の思想は經驗的であるが、東洋の思想は思索的であり、従つて西洋の文化は實用